

# 丈人力のススめ

「未踏の「人生九〇年」を踏破する」

筆名 堀 亜起良 東洋哲学者

元『知恵蔵』編集長 堀内正範 著

## 目次

その一 「引退余生」でいいか 「現役長生」がいいか

一 「人生六五年」から「人生九〇年」へ 3

二 「丈人力」を活かす成熟・円熟期 10

三 長寿を愛しむ三つの秘策 17

その二 「マイホームパパとママ」の憂鬱

一 「しあわせ家族」は外にある 29

二 マドギワに居場所をすえる 36

三 宙に浮いたままの「暮らしの知恵」 45

その三 生活感性を満たす国産・地産品

- 一 「MADE IN JAPAN」はどこへ行った 54
- 二 途上国産の日用品に囲まれて 65
- 三 頼れる国産・地産品が再登場 73

その四 高齢期二五年の居場所づくり

- 一 「エイジング・イン・プレイス」での日々 86
- 二 「新・地域ブランド品」で全国制覇 98
- 三 わがまち独自の「地域助け合い」 107
- 四 仲間+たまり場+まちづくり 115

その五 「人生の達人」としての八面玲瓏

- 一 まあ、いいか、でいいのか 123
  - 二 ひとりの住民・市民として 136
  - 三 ひとりの国民として 145
  - 四 ちよつとばかり国際人 156
  - 五 不戦不争の灯かりを伝えて 166
- おわりに

そして「寿終正寝」(天寿)を全うする 168

その一 「引退余生」でいいか 「現役長生」がいいか

一 「人生六五年」から「人生九〇年」へ

「加齢」に価値のある社会へ

\*一〇年も延滞する「高齢化対策」

みずからを高齢者と納得している人でも、いま通用している意味合いで、

「老人」と呼ばれると、

「違和感がある」と感じる人や、

「まだ間があるよ」と答える人は、少なくないだろう。

だれもがよく使う「老人」ということばに対して、ひとりの人の感覚の違和であるとともに、多くの人にも同様の違和感が起きている。

それは社会のしくみの方にひずみがあるからだ。

四人に一人（六五歳以上）までですすんだ「高齢化」。そのプロセスでの国の対策が遅延しているからで、本来なら「ご老人」と呼ばれると、快く敬意が感じられるような日用語なのである。

国の対策が遅延している？

そんなことはない。

日また一日、善意の心をこめて施策に努めている厚労省の現役官僚からの反論が聞こえる。年々増えつづける医療・介護費用や六五歳になった「団塊の世代」の年金を含む「社会保障」の財源をどうするか。新たに増税によって確保する「消費税増税」も、他をさしおいて「高齢化対策」としてやっているではないか。

・・その通りです。

しかし、国の「高齢化対策」というのは、医療・介護・福祉・年金といった個人に対する「高齢者対策」が主であって、ここでの対策は「高齢社会対策」のことなのです。あとで詳しく触れますが、高齢者意識の醸成や、高齢期の暮らしに便利なモノの製造の支援やサービスの促進や、みんなが安心してすごせる居場所の創出や、それから世代間交流・・といった成熟期、円熟期の人びとの暮らしにかかわる社会対策の面での「高齢化対策」のことなのです。

なかったといっているのではなく、遅延しているといっているのです。成熟期に達した人びとに対して、せいぜい半熟でいどであって、成熟と呼ぶにはほど遠いのではないですか。・・・しくみのほうが高齢化の進行に合わせて変わらないまま、「人生六五年」時代からいつの間にか「人生九〇年」時代を迎えてしまっている。

しくみのほうの遅延を高齢者自身のせいにすることはできない。繰り返すが、全容を見通して進める「国の対策」が遅延してきたせいである。

国はその対策の指針とする「高齢社会対策大綱」の改定をつい先ごろおこなったばかり。ところが、こんな自分の人生にかかわる大事な改定なのに、高齢者のみなさんは知らない。

## 一年ぶりに「高齢社会対策大綱」を改定

\*マスコミ報道は閣議決定その日かぎり

このことは高齢者ばかりでなく、先人がどう扱うかを若いみなさんにも知っておいてほしい。将来、自分にふりかかる問題のはじまりなのだから。

国の高齢社会対策の指針である「高齢社会対策大綱」には、「人生六五年から人生九〇年へ」という意識の改革と、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった分野ごとになすべき活動が要請されている。

意識の改革や活動の要請を検討するより前にまず、一足飛びに二五年の延伸が生じてしまったことに、ここ一〇年余りの「高齢社会対策」の遅延（強くいえば政治リーダーの不在）を指摘しないわけにはいかない。世界に事例がなかったというのは理由にならない。

安倍内閣もそう。安倍総理も女性と若者の成長力に期待して参加を呼びかけるが、高齢者が潜在力を発揮して実人生を豊かに過ごすことには理解が及ばない。

政治リーダーは「高齢化」の進むのに合わせて、高齢者の「居場所」や「出番」をどこまで

つくってきたか。

それぞれの選挙区で高齢者のニーズを踏まえたサービスや地産品開発をどう促進したか。

「高齢者は支えが必要な人」という固定観念を変えて、意欲と能力のある人びとには「支え手」に回ってもらうよう国民の意識改革を図ってきたか。

「人生九〇年」時代を見通して、地域コミュニティや生活環境のあり方、高齢期に向けた備え等々に、どこまで尽力してきたか。

世代間交流をどこまで進めたか。

みんなが「老人」と呼ばれたくない、高齢者への敬愛の思いが薄れていくと感じているのは、こういった対策の遅延によるところが大きいのである。

二〇一一年一〇月に、民主党政権の蓮舫担当大臣（蓮舫議員が「少子化」と兼任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていただろうか）のもとで、学識経験者による検討会を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇一二年九月七日（このときは中川正春担当大臣のもと）に閣議決定した。

内閣はもちろん民主党の野田（佳彦）内閣である。二〇〇一年の小泉（純一郎）内閣以来の「大綱」見直しであった。

まことに残念なことだが、高齢者が国民四人に一人に達しても、高齢社会を担当する専任の大臣がいらないことをみても、改定大綱を練り上げた学者と担当の内閣官僚にはわかっていな

ら、歴代内閣のリーダーには認知がなかったことの明確な証をみるのである。

その間、衆参両院議員が何をしていたかは、みなさんご記憶にあるはず。

日々、まことに熱心に、「団塊の世代」の年金を含む「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会のありようについては、ないといっているほど関心が薄かったのである。

だからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎり、内容については多くの国民の知るところとならなかった。無理もないことだが、若い厚労省クラブの現役記者は、「高齢社会対策」については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していないからだ。

### **余生はまだ先、それまでは現役のまま**

\*新たな「成熟+円熟」人生をすごす

六五年+二五年=九〇年。

これまでの「人生六五年」から一気に二五年延びて、これからは「人生九〇年」を意識して過ごす時代になる。

つい先ごろまでは六〇歳まで（定年延長して六五歳まで）働いて、いさぎよく引退し、あとは年金をもらって悠々自適の高齢期を送る。そういう考え方がふつうだったのに。

一気に二五年も延伸してしまい、「人生六五年」時代の「引退余生」の意識ではとても対応できそうにない。それでも六五歳になって、いつとは知れない終末のときまで、若い人に期待し、家族を大事にして、このまま余生としての人生を送ろうと決めてしまっているなら仕方がない。が、そういうことなら同年配の仲間たちと励ましあい、自分たちで新しいモノやらサービスやら居場所をつくりながら、「現役長生」といった前向きの意識で「人生九〇年」をめざそうではないかというのが、本稿の趣旨なのである。

戦後七〇年、みんなが努めてきて、その成果として得た長寿の期間。六五歳からの二五年を、できればそのまま現役としてすごして、国力の萎縮（デフレーション）や赤字二〇〇兆円といった後人への負債を残さないようにしてほしい、というのが国からの要請なのである。

こんなヘビー級の課題を指摘し要請を出したのは、他でもない内閣府。

史上初のこの誇るべき課題に、国民一人ひとりがどう回答を出すか。

といったところで、高齢人生への助走期である六〇歳の還暦より前の人なら率直な実感として、九〇歳なんて遠い先のこと、「まだ、いいか」となる。

還暦を迎えた人にとっては、「人生九〇年」は三度目の三〇年。二度あることは三度ある。六〇年まではさして長くはなかった。三度目の三〇年もおよそ長さの見当がつく。ただし、今回は途中リタイヤがあるところが違うと思う。

二〇一四年にみんなが六五歳以上の高齢者の仲間入りした「団塊の世代」（一九四七〜一九四



九年生まれ)の人たちはどうか。定年を迎えて年金生活にはいったばかり。ほどほど働いてきたし、ほどほどの貯蓄もある。

こちらは、あいまいに「まあ、いいか」となる。この約六五〇万人のこのままの黙止は、総量としては国力の萎縮(デフレーション)としてカウントされる。

政治の側の「高齢社会」への無理解と対策の遅延はなおも続いており、そのしわよせを受けるのは、まずはほかならぬ高齢期にいたるみなさんであり、これから高齢期を迎える中年のみなさんであり、そして将来、高齢者になる若者や次世代のみなさんである。

到達目標としてのゴールが唐突に九〇年に延びたマラソン人生の三〇キロ地点。マラソンは三〇キロ地点のあとが次第にきつくなる。

高齢期への助走期である五五〜六四歳から見定めに入っても決して早くはない。そのまま一気に突っ走ればいい。六五歳に達した人は、ギアをローに下げずにそのまま前方を見てほしい。すでに「人生九〇年」をめざして「現役長生」の意識でひたはしる先輩シニア・ランナーの姿が見えるはず。

その後ろ姿を追いながら、一団となって「人生九〇年」にむかって力走することになる。すべての人がいっしょにはいかならないから、「定年余生」でまあいいかという人を置いて「現役長生」の人びとが走りつづければ、「日本高齢社会」の達成はおぼつかない。一人またひとり、本稿がベストセラーになるほどの市民ランナーの参加が必要なのである。

## 二 「丈人力」という潜在力を活かす円熟期

### 「丈人力」とは

\*人生の「自己目標」を実現する潜在力

はじめにここで、みなさんの長い高齢期人生への励ましとなることを提供できればと思う。思い起こしていただきたい。

あの「三・一一東日本大震災」の被災地で、お互いの励ましのことばとして飛び交っていたのは何だっただろう。

「がんばろう！」だった。

「頑張ろう」はその後、「復興へ頑張ろうみやぎ」（宮城県）や「がんばろう東北」（東北楽天ゴールデンイーグルス。星野（仙一）監督や田中（将大）投手らと優勝までの頑張りを共有）、「がんばっぺ福島」や「がんばろう俺！」まで、復興活動のキャッチフレーズになっている。

それにもうひとつ、被災地の現場では「だいじょうぶ？」「だいじょうぶ！」もまた、お互いの心を支えあって飛び交ったのだった。

「大丈夫」のなかには、被災地での美智子妃の「よく生きていてくださいましたね」とともに

「だいじょうぶ！」という励ましのことばも記録されている。大きい声を必要としないでも、静かに心の深みに伝わる励ましのことばとして。

この「大丈夫」の「大」を横に置いて、男性をいう「丈夫」のうちの「夫」から二をはずしてみる。芯にあるのは「丈人」である。「大丈夫！」といったときに、心の内に包みもつ気概が「丈人」のもの。「頑張ろう！」が外向きなものに対して、「大丈夫！」はどちらかといえば、内にある力を呼びさまし励ましてくれることばといえよう。

いまや街に出れば、元気に活動する高齢者の姿を数多く見かける。男性はアウトドア・リュック姿が多いが、女性はハイミセス・ファッションを楽しんでいる。この元気な高齢者については、いろいろな立場から実にさまざまな表現が用いられている。

「シニア」「アクティブ・シニア」「スマート・シニア」「アクティブ・アダルト」「ハイエイジ」「支え手の高齢者」「健丈な高齢者」「スーパー老人」「新老人」「創業者」「熟年者」・・・など。世代としては「熟年世代」「プラチナ世代」「ブランド・ジェネレーションⅡGG」や「アクティブ・エイジング」という捉え方もある。

そのうちのひとつに地味だが、本稿での「丈人」を加えていただきたい。「丈人」と「老人」を、漢字の古語同士として対比のうえで用いることができることを特徴としている。

高度成長をなしとげて、世紀をまたいで高齢期を迎えてなお活力のあるシニアなら、「人生九〇年」にむかって、「青少年Ⅱ成長期」、「中年Ⅱ成長・成熟期」の期間をかけて培ってきた専門

知識や高いレベルの技術を保持して暮らしている。

この「高年Ⅱ成熟・円熟期」を迎えて保持している「知識・技術・資産」が、デフレ脱却の「三本目の矢」であると本稿は理解し主張しているが、政治リーダーは理解せず活かす気配がない。だから安倍さんの「三本目の矢」はどれもあやういのである。

「フレイル状態」（筋肉が衰えて活力に自在性が失われる段階）までは間がある元気な高齢者として、だれもが保っている潜在能力を用いて何かをやってみたいと思っている。「高度成長期」から「高度成熟期」へ、そしてこれからの「高度円熟期」の社会づくりへと、自分と家族にばかりでなく、みんなのためにも活かしたいと思っている。

もし新世紀の初めに、国会が衆議してまとめた「日本高齢社会ブランドデザイン」が国民の目に見えるように掲げられていけば、その達成のために率先して参加したし、するだろう。

戦後生まれの「団塊の世代」、この活力あるニューフェースのみなさんの参加をえて、昭和生まれの高齢者「昭和丈人」層が拡大した。この巨大な潜在力を発揮することによって、史上初の「日本高齢社会Ⅱ三代現役型社会」が着実に達成にむかう。

「長生してよかった」といえるシーンが、これから次々に展開することになる。必ず。

みずから決めた人生の目標を、どこまでも発展・熟達・深化させようとして、体内から湧いて出る強い生活力あるいは生命力が本稿のキーワード「丈人力」である。

成し遂げようとする目標が大きければ大きいほど、体内からふつつつと力が湧いて出る。発

揮ずる場面がないから日ごろ気づかないだけで、高齢期にいるだれもが保持している潜在力なのである。

### 「がんばらない」と「がんばる」と

\*交々に用いる「老人力」と「丈人力」

世紀をまたいだけいはずいぶん遠い記憶のように思えるが、働きづめに働いてきて、以後をどう暮らすかに思い悩んでいた高齢者を慰労してくれたことばがあった。

「老人力」（建築家の藤森照信さんと画家の赤瀬川原平さんによる命名）である。

先の大戦後の復興と成長と繁栄を成し遂げて、

「やれやれ、よくぞここまで」

とためいきまじりに高齢期を迎えようとしていた人びと。

その功労者を、「日本列島総不況」（経企庁長官だった堺屋太一さんの命名）が襲ったのは前世紀末のころだった。

働きづめに働いてきて、人生の晩期を迎えている自分の姿をすなおに見極める。

来し方の人生を納得した上で、がんばりすぎずにクールダウンしてゆくこと。

その冷静な自己認識の能力を「老人力」と呼んだ同時代人のことばに納得して、多くの高齢

者はみずからの判断で体を休め、疲れを癒した。多くの人が納得すること、「老人力」は流行語になった。

今でも高齢期を前にして、来し方の自分を顧みて、晩年期を「がんばらない」ですごすことは有効だが、おのずから表出される「頑張り」は人びとを感動させるものである。

三浦雄一郎さんがいい時期にいい事例を残してくれた。

二〇一三年五月、八〇歳でエベレスト登頂を果たした三浦雄一郎さんが推奨するように、健康を保ちながら、わくわくするような夢があり、その実現をめざすとなれば、頑張らざるをえない。「丈人力」(ハイエイジ期のわくわくするような自己目標を達成する潜在力)はおのずと湧いて出るものなのである。

といって、これまで広く用いられてきた「老人」ということばの意味を「支えられる高齢者」に限定する意図も内容も持っていない。

長い経緯をもつ「老人クラブ」や「敬老の日」。

その積極的な意味合いをこれまでどおりに理解した上で、それに重ねて、現代日本の社会に登場している「成熟・円熟した高齢者」の活動をプラスしてとらえる意味合いをもって用いている。この国の「高齢社会対策」が遅延したために、「老人」ということばが本来もっていた「敬老尊賢」とか「老練」「老師」「長老」といった熟成期の社会的な意味合いを失ってきた。それをフォローすることにもなるのである。

## 歴史をつくる劇的な実感

\*「昭和丈人層」が体現する長寿社会

現役のときの楽しかったしごとのひとつに、画家の中川恵司さんをつくった『江戸東京重ね地図』がある。

江戸時代の山手、下町の古層の上に現代の東京が重なって見えるように印刷された地図帳である。地図出版の武揚堂の現場にはご苦労いただいた力作である。その中の何枚かは江戸時代の海の上に、現代の東京がまるごと浮かんでいる。この部分は近代の人びとが活動して新たに創った都市空間なのである。当たり前といえはそれまでだが、小さな事業活動や暮らしの集積が新しい歴史をつくることの劇的な実感がある。

現代の日本で暮らす約三三〇〇万人の高齢者（六五歳以上）は、これまでの歴史にまるごとなかった存在である。史上に新たな成果として得た「人生九〇年時代」を体現している一人ひとりの高齢者が、これまでになかったモノ・居場所・しくみをこしらえながら暮らすことで達成される新しい歴史空間である。

遠くに「人生九〇年」の到達点を想定しながら、一人ひとりの高齢者が目前の日また一日を、いいねいに迎えて過ごす。この「現役長生」型の高齢者が新たに形成する成熟・円熟した社会

は、これまでの「人生六五年Ⅱ引退余生」型の高齢者による「二世代+α（アルファ）型」社会とは異なった姿になるはずだ。

ありようとしては、日ごろの生活圏でのテーマに着実に対処しつつ、小さな水玉模様の重なりのような活動である。お互いにそれを知って仲間が行き来する。そして遠からず、その総体としての「日本長寿社会」の姿が見えてくる。

わが国はいまや「超高齢社会」にあるといわれる。

が、何事にせよ、チヨーには行きすぎた語感があるから、この呼称は適当でない。「本格的な高齢社会」あるいは「長寿社会」というべきであろう。本稿では、高齢者の活動が存在感を示すとともに、青少年Ⅱ成長期、中年Ⅱ成長・成熟期そして老年Ⅱ成熟・円熟期のすべての人が等しく意識してかわることによって成立する「三世代現役型」といえる社会を、「超高齢社会」ではなく「長寿社会」と呼んでいる。

「長寿社会」へのプロセスを、みなさんは自分の来し方と重ねて理解しておいてほしい。

ご存じのように、「高齢化率」（国際基準で六五歳以上の人口比率）が七%から一四%までを「高齢化社会」という。

高齢者の存在が目立ちはじめたとはいえ、まだちらほらの段階で、余生（平均寿命）も長くはなく、後人は「支えるべき功労者」として敬愛し、介護・医療・福祉・年金などで慰労することができた。わが国では一九七〇年から一九九四年までの二四年がその期間に当たった。ヨ



ヨーロッパ諸国に比べるとはるかに短かったが、戦後にご苦労された先人は納得して亡くなることができた時期である。

その後の「高齢化率」が一四％から二一％の間を「高齢社会」と呼ぶ。

この間は高齢者が目立ってきて、高齢者意識をもつ者同士による高齢期のための「しくみや「居場所」や「モノ・サービス」づくりを展開する段階。将来に後人の手を煩わせないで「高齢社会」の形成をすすめることになる。わが国では一九九四年から二〇〇七年までの一三年がこれに当たった。

この世紀をまたいだ一三年間になされるべきであった「高齢社会」の形成にむけた対策、高齢者意識の醸成や社会参加や世代間交流は成果をあげたとはいえず、すでに指摘したように、「高齢社会対策」は一〇年余り延滞することになってしまっている。そのひずみがさまざまに露呈しはじめているのである。

いまや世界最速で、「高齢化率」二六％、三三〇〇万人（二〇一五年四月一七日、総務省）、「団塊の世代」がすべて高齢期に入り、四人に一人に達しているわが国の高齢者は、みんなが参加して形成するオールエイジズの「長寿社会」にむけて、他国から学ぶのではなく、わが国が独自に保有している経済、文化、伝統のもとで、独自のプロセスを案出しながら達成にむかわねばならないのである。

### 三 長寿を愛しむ三つの秘策

#### 「長寿時代」のライフサイクル

\* 「高年前期・後期」のあとに「長命期」

これまで「ライフサイクル」というと、ふつうには「乳幼児期」「少年（学童）期」「青年期」「成年期」「老年期」という五つの階層にわけて説明されてきた。

この発達心理学から生まれた「五つのステージ」は、自分の経験としても、あるいは子どもの成育の姿や父母の生き方を通じて、だれもが納得できる分け方として認めている。

ところが史上新たな「高齢化」という状況にあつて、「高齢社会」の実情をつぶさに考察しようとする、上の「五つのステージ」ではうまく把握できない。

なぜか。このE・エリクソン以来の発達心理学による分類は、五つのうち三つまでが二〇歳代までの「青少年期」に当てられていて、「成長型の社会」を反映している。

そのために「高齢社会」、つまり「熟成型の社会」の把握には、適当ではない。ジェロントロジー（加齢学、訳し方はいろいろ）の観点から高年齢層に配慮した別途の「長寿時代のライフサイクル」が要り用なのだ。それが「人生九〇年時代」への意識変革をもたらし、暮らしやすい新たなステージを創出する契機となる。

本稿がここで提案する新たなライフサイクルは、「青少年期」「中年期」をすくしおえて「高年期」にある人びとに手厚く、納得されるものでなければならぬ。

\*\*\*\*\*

青少年期           ○歳～二四歳   自己形成期

バトンゾーン       二五～二九歳   選択期

中年期               三〇～五四歳   労働参加・社会参加期

パラレルゾーン     五五～五九歳   高年準備期・自立期

高年期               六〇～八四歳   地域参加・自己実現期

高年前期            六〇～七四歳

高年後期            七五～八四歳

長命期               八五歳～       ケア・尊厳期

（自立・参加・ケア・自己実現・尊厳の五つは国連が提唱する「高齢者五原則」）

\*\*\*\*\*

このあたりが、高齢者が納得できる「長寿時代のライフサイクル」といえるだろう。

ここでは学問的にうんぬんするつもりはなく、みなさんに生活の実感として納得していただければいい。単なる「老年期」ではなく、三つの現役期のひとつとしての「高年期」として配慮した位置づけが、高年齢人生を実りあるものにする第一の秘策なのである。

「青少年Ⅱ成長期」「中年Ⅱ成長・成熟期」「高年Ⅱ成熟・円熟期」という三つの二五年期がライフサイクルの中心に据えられていることがわかりただけるだろう。

「バトンゾーン」(二五〜二九歳)というのは、個人のライフ・スタイルによって生じる幅であり、青少年期にいれるか、モラトリアム期とすすかかは個人が選択すればいい。

「パラレルゾーン」(五五〜五九歳)というのは、「パラレル・ライフ」(ふたつの人生)期にあるということ、**「高年準備期」**である。窓際族といわれてヒマつぶしている時期ではない。

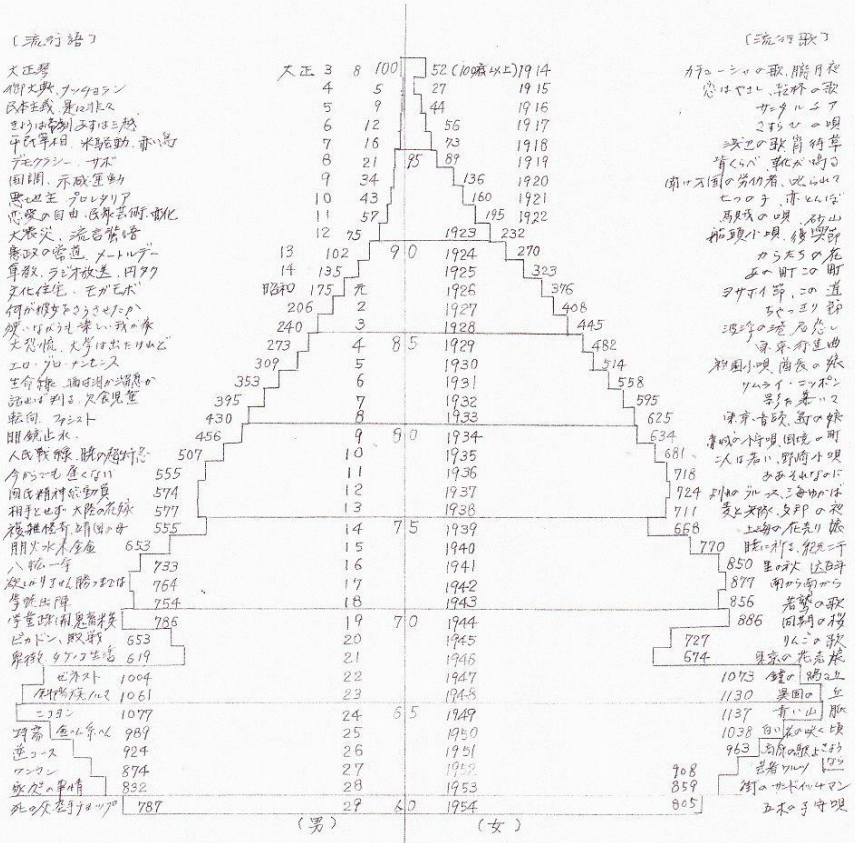
これから迎える二五年の「高年期」を前にして、自分らしく生きる自己目標の発見のための模索期であり、けっこう多忙なはずである。定年延長の替わりに給料を減らされ、心躍るしごともなくすすすだけでは惜しい。「パラレル・ライフ」(ふたつの人生)をすすしながら、わがシニア人生に悔いなしの準備をして迎えてほしい。

「定年後は余生」などと考える旧時代の「老成」タイプの「支えられる高齢者」意識がわが国の「高齢社会」形成に自然渋滞をもたらしている。「高年期」での地域参加・自己実現の二五年をどう体現して暮らすかの工夫が人生の差をつくることになるのはまちがいない。

ここで「長寿時代のライフサイクル」をgoいっしょに考えてみたい。

わが国の実情をよく観察した上で本稿が採用した「長寿時代のライフサイクル」は、成長型のそれとは逆に「高年期」を三つの時期にわけている。高年前期(六〇〜七四歳、成熟期)、高年後期(七五〜八四歳、円熟期)、そして長命期(八五歳以上、達成期)がそれである。

年齢別：男女別人口 平成26年10月1日現在 (単位 1000人)



総務省統計局 平成27年4月1日公表

みなさんはご自分が想定する高齢期人生をおよそ三分して、それぞれを有効にすごすことを考えてみてほしい。いま自分が人生のどんな時期にあるかに実感が持てればいい。この「ライフサイクル」表は標準だから個人的に自在に案分して、ご自分なりのライフサイクルをつくること、それがこの表の意味なのだから。

先ごろ七五歳以上の「後期高齢者」の医療費支払いが話題になった。七五歳で階層を刻むこと

の意味が問われたが、七五歳で截然と変わるわけではないが、「フレイル期」（筋肉が衰え活力に自在性が失われる段階）を迎えて、からだの機能のどこかで「有訴」（症状が元にもどらない）がはじまる時期であることには注意する必要がある。

本稿の「長寿時代のライフサイクル」の特徴は、八五歳頃の「長命期」を設けていることにある。「高年期（前期・後期）」（六〇〜八四歳）の二五年のあとの「長命期」が、八五歳〜という刻みについて、女性の側から異議をとなえる人があるかもしれない。

そこで男女に六歳の「平均寿命」の差がある実情にあわせて、男性の「長命期・達成期」は八五歳〜とし、女性は「後期高齢期・円熟期」七五〜八九歳とし、「長命期・達成期」九〇歳〜と分けたほうが納得しやすいかもしれない。まずはご自分の人生と重ねあわせていただきたい。とくに男性はここを越えれば長命のうちである。

「余生」ということばを使うなら、別表でもおわかりいただけるように、九〇歳からなら納得がいくだろう。「定年余生」六五歳〜がいかに他愛ない意識であるかが知られる。

### 「賀寿期五歳層」のハステージ

\* 同年配の仲間と「賀寿期」をすごす

いまでも「何何先生の喜寿の会」「おばあちゃまの米寿の会」などとして祝われているが、先人

は見定めえない人生の前方に次々に賀寿を設けて、個人的長寿のプロセスを祝福してきた。

いまのように長寿時代になって、多くの同年配の仲間とともにお互いを励まし合いながら「百寿期」をめざすのもいいではないか。

\*\*\*

還暦期（六〇歳〜六九歳）	昭和三〇年〜昭和二一年
古希期（七〇歳〜七四歳）	昭和二〇年〜昭和一六年
喜寿期（七五歳〜七九歳）	昭和一五年〜昭和一一年
傘寿期（八〇歳〜八四歳）	昭和一〇年〜昭和六年
米寿期（八五歳〜八九歳）	昭和五年〜昭和元年
卒寿期（九〇歳〜九四歳）	大正一四年〜大正一〇年
白寿期（九五歳〜九九歳）	大正九年〜大正五年
百寿期（一〇〇歳以上）	大正四年以前

\*\*\*

ただ漠然として「余生」をすごすのと、この「賀寿期五歳層」の八ステージを基準にして「長寿時代」をすごすのでは、人生に雲泥の差が生じるだろう。これが第二の秘策である。

聖路加病院名誉院長の日野原重明博士が二〇一一年一〇月四日に百寿に達して話題になった。その翌年に現役映画監督の新藤兼人さんが到達した。新藤さんは到達してすぐ亡くなったが、

百寿到達は前向きな人生の目標として実感をもたれるところまできている。

還暦の六〇（六五）歳から一〇〇歳までの間を「五歳層八段階」に分けて、その年齢層一つひとつを仲間とともに迎えて過ごす。

「還暦期」から「百寿期」まで八層の一つひとつを迎えてすごしてゆくことになる。残念ながらそのプロセスの途中で、「ちょっと、お先に」といって途中下車をする仲間を見送らねばならないこともあるが。そんな友人の願いを引き連れて、どこまでも長寿を全うすること。それがこの国の新たな歴史を刻むことになる。

二〇一五年は次のみなさんがそれぞれの「賀寿期」に到達する。何人かにすぎないが、お仲間の代表としてここにご紹介できるのは楽しい。勝手に選んだものだがお許しねがいたい。

「卒寿期」（卒寿は九〇歳）には清水司、豊田章一郎、江崎玲於奈、小尾信弥、梅原猛、永井路子、桂米丸、富永一朗、橋田壽賀子、大田昌秀、杉本苑子、大関早苗、色川大吉、篠原一、杉下茂、岡田卓也、野中広務さんら。

「傘寿期」（傘寿は八〇歳）には倉本聡、柴田翔、大江健三郎、李恢成、松岡享子、畑正憲、美輪明宏、高橋幸治、野村克也、堺屋太一、根岸英一、富岡多恵子、吉行和子、羽田孜、小沢征爾、宝井馬琴、蛭川幸雄さんら。

「古希期」（古希は七〇歳）には松原智恵子、佐良直美、東郷和彦、落合恵子、佐高信、川端達夫、宮城谷昌光、谷垣禎一、吉永小百合、栗原小卷、宮本信子、小此木政夫、増田実、鹿内春



雄、茂山千五郎、池澤夏樹、タモリ、田中直毅、永井豪、福岡政行、水前寺清子、樋口久子、直嶋正行、櫻井よし子、岡本行夫、中曽根弘文、富司純子さんら。

ご覧のように、それぞれのお歳でそれぞれのお立場で、病があっても「現役長生」の日々をすごしておられる。七〇歳の「古希」になったからといって老成することはない。やっと「第二賀寿期」に達したところ。まだまだ未踏の沃野がある。

お仲間といっしょに人生の新たな出会いを楽しむ日々が待っているのである。

## 「体・志・行」の三カテゴリー

\* 雑事をいとわないことが長寿のもと

家人がだれもない時にでも、そっと三面鏡を開いて裸形の自分を映してみよう。

まぎれようもない自分の「からだ」が眼の前にある。上半身・下半身とながめて、「まあ、いか」と納得するのが「こころ」の動きである。そして男性なら腹部に、女性なら胸部に手をやるのが自然な「ふるまい」である。

この「からだ」体」と「こころ・こころざし」心・志」と「ふるまい」行」という三つが人間（人生）としての同時存在であり、この三つ以外に存在はないというのが、東洋の哲学が教える人間（人生）観なのである。

やや哲学ふうにいえば「体志行三元論」。ここはその場ではないのでそっと記しておくが、西欧の「物心」にわけ、その発展として人間を理解する二元論ではない。西欧の存在論・認識論による世界観・文明観（一神教）の将来はあやうい。認識の基本は三元論による生命体存在論の理解にある。

生命の三つの存在の意味合いが素直に納得できるのは、やはり人として半世紀を生きてきて、生体としての「からだ」のどこかに故障・症状（すすむと有訴・疾病へ）を生じたり、物忘れが重なって「こころ」（すすむと認知症へ）に違和感が生じたり、「ふるまい」が不自由（すすむと介護へ）になったり、といった自覚が現れる時期になってからのこと。

どこかに気づいたところから、「体・志・行」の三つに配慮した暮らしを心がける。まずは「健康（からだ）」に留意し、「知識や夢（こころ・こころざし）」をたいせつにし、「技能（ふるまい）」はさびつかないようにして暮らすこと。この三つを常にバランスよく働かせることによつて、「健康寿命」（健康上の問題で日常生活が制限されることなく送れる期間）は延び、高齢期の実人生は先を見通せるものになる。

これが三つ目の秘策である。

「青少年期」「中年期」の六〇年間に積みあげてきた健康や知識や技術や有形・無形の資産には個人に差があり特徴がある。それらをバランスよく活かしながら個性的な「高齢期」をすごしている人が、ここでの敬愛すべき「丈人」のみなさんである。

スポーツ界で「心・技・体」の順として認識されているのは、スポーツでは心の構えが技・体の差を理解し克服するから。高齢期が「体・志・行」の順なのは、体が志・行を左右するからである。

\*\*\*\*

からだ

体・健康 食べる・休息・健康体操・運動・有訴・・・疾病

ころころ（ころころざし）

心・志・知識 しゃべる・考える・情報文化・歴史・・・認知症

ふるまい

行・技術 自分でする・歩く・芸能・芸術・スポーツ・・・介護

\*\*\*\*

日々の暮らしの中でのこの三つのカテゴリーのバランスが「健康寿命」を延ばす秘策になる。

とくに長い間デスクワークに従事してきた知性派の男性は、思いのほか三つの要素のバランスを欠いていることに注意が必要である。思い当たる人は症状が出ないうちから足腰を鍛えること、三つそれぞれに心地良いほどの負荷をかけて、「アンチ・エイジングⅡ若づくり」に努める。雑事はいとわずに、探しても担うのが何より三つの要素のバランスに効果がある。

「アンチ・エイジングⅡ若づくり」には努力を惜しまないこと。

健康を保持し、体力を維持し、心おどる夢・知識を堅持する。

デスクはりつきは無用。外出して活動力を鍛えること。

家事はもちろん炊事もよし、奥さまに任せずに、上手に共有して雑事をこなすこと。将来想定される奥さまへの負担を少なくできる。

現役時代に身につけた役職意識も人使いもことば遣いも無用。

できれば「厨在丈人」として厨房に立ち、旬菜料理（薬膳）を食卓に差し挟むようになれば、奥さまとの「平均寿命」六歳の差はずっと縮まることになる。

## その二 「マイホームパパとママ」の憂鬱

### 一 「しあわせ家族」は外にある

#### 「MY:」がなくなるマイホーム

\*アノヒトとかヒカラビてる人といわれて

マイホーム。

なんともいえず響きのいいことばである。

これほどまでにやわらかい生活感を内包しえたカタカナ語を、他に探すのはむずかしい。耳にすると心安まる。

マイホーム。

それはいま高齢者となっている人びとが、それぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年間にその内容をつくった日本語なのである。

だから細部の意味合いは個人によって異なる。

よき（良き、好き、善き）もの、ひよわなもの、やわらかいものを守る城として、「マイホーム」は先行の「わが家」や「家庭」などとともに、それに負けない温もりを日本語として持つ

に至っている。

そのぶん「ホームレス」ということばがわびしさを伝える。

戦後っ子だったパパとママは先輩に「マイホーム主義」とからかわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らして、ふたりの子どもを育ててきたのだった。夫婦と子どもふたりの家族が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。

その後、職場までは遠くなくても、マイホーム・パパとママは、二段ベッドで育った子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、というより子どもにせがまれて、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引っ越した。そういう体験をもつ人びとは少なくないだろう。

それが人生目標の「しあわせ家族」だったのである。

いま、たしかに家はある。が、わが家に「しあわせ家族」はない、とFさんはいう。

？ Fさんのいい分を聞かないわけにいかない。

Fさんもまた、「しあわせ家族」をめざしたひとり。そしてその成功者と見たのに、なぜ。人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得して、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。定年後まであった住宅ローンはなんとか退職金で完済した。長かった来し方を顧みていま、Fさんはマイホームの当主として存在感の薄かったことを感じている。

みずからの希望を抑えて、家族の希望をかなえることを優先してきた。

そこで不相应な応接セットや家具といった家族の共用品はあっても、みずから求めた専用品というのは少なくて、「モノと場」に表わされる当主としての存在感が希薄なのである。

子どもたちが自立せず、「エンプティ・ネスト」（空の巣）とはならず、夫婦と子どもふたりの核家族の形をなお保っている。娘と息子がふたりとも「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。そのことで、サッカーならイエローカード一枚ずつといった子どもと暮らしているFさんは、「しあわせ」ではないという。

とって「エンプティ・ネスト」（空の巣）がしあわせの証とはいえないだろう。

Fさんは戦争が終わった翌年、昭和二十一年生まれだから出生数が少ない「プレ団塊」である。そして奥さんは団塊を挟んだ昭和二五年生まれ。

二〇〇余万人に対して一四〇万人。だから団塊から除かれてきた。それで困るわけではなかったし、どちらかといえば、戦中生まれの人たちに親しみを感じるという。

イエローカード一枚の娘は、「子団塊」のあおりを受けて、短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。下の息子は浪人はしたが、ごく普通の大学をごく普通に卒業して、就職試験を受けて勤めはじめたふつうより名の知れた輸送会社だったのに、短期でやめてしまつて家にいる。

親のひいき目でもしつかりしてきたように見えるのだが、自主性にまかせているのだが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケ

イタイで情報のやりとりをしてすごしている。

「ニート化」(NEET)。就業希望を有しない若年無業者)への気配もただようが、時折り出かけて「職さがし」はしている。

Fさんが毎日家に居るようになって、娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といつていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親には面とむかって「キミ、元気かね？」などと軽くあしらわれていると感ずることがある。

父親の存在はそれほど意識せずに気ままにすごしている。

「この家はわたしが名義人なのだ」というのも愚かしい。

壁面に娘が貼ったままの「のりか」(藤原紀香)のポスターほどには、底値までさがった土地の築二〇年余という家の壁に存在感があるわけではない。

### 「ヒッペガシ娘」 vs 「ツカエナイ親」

\*総理までが女性と若者に味方する

「塩づけにできる資産などどこにもありはしないし、いまでさえわが家では子どもたち、とくに娘によって強奪に近い形でヒッペガシ(資産移譲)が行われている」



とFさん。

高齢者の平均貯蓄額が二三七〇万円とか、暮らし向きに心配のない人が七割を超えとか。そんな調査を同居の娘と息子をもつFさんは「聞かせたくない」という。そして「信じられない」と付け加える。数字にいつわりはないとはいえ、将来が不安で貯蓄をしたのだから、将来の展望をもって貯蓄など考えずに生きてきた自分や先輩とは違うと感じている。

「ほどほどの赤字人生が男子の美学だよ」

と、会社の先輩たちは貯蓄など考えずにきっぱりいい、

「きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするものだ」

と割り切って飄々としていた。Fさんも後輩として、赤字まではともかく、ゼロに始まってゼロに返る人生を納得する男子の覚悟ぐらいはしてきた。

だから娘や息子には申し訳ないが、貯蓄とはいえないケタ違いの貯蓄しかない。

しごとはやってきたし、まだやるつもりだし、やらねばならない。家にFAXを置かず、確定申告で税金逃がれをし、しごととはほどほど、貯蓄にいそしんでいたMの顔が浮かぶ。

「あいつが人生の勝利者か」

高齢者のしごととは探すとなると少ない。ここにも一〇年余の延滞が露呈している。

一方、女性の登用は「ダイバーシティ」（多様性）と呼ばれて多様に用意されている。女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるのはいいのだが、どれほどの若い女性が自分の実力

(かせぎ)で暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ(体型ギリギリのヘソ出し衣装)からいそいそとディオールのパーティー・ドレスに着替えて、自在に「変衣変性」する娘の姿をみながら、Fさんは際限なしの「女性化」に懸念をもっているのである。親の育て方がどうのこうのではなく、風潮なのだからとやかくいっても仕方がないが。

「時代の花」として娘たちを擁護し、女性の活力に期待する立場からは、無条件に、両親や祖母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じた家庭内ヒッペガシは当然のことと考えている。

ダボス会議の「男女格差報告」では、これまでも一〇〇位以下という外国にくらべた女性の活用の低位置が話題になってきた。それが急に経団連や同友会までが、女性の登用を「ダイバーシティの推進」としてすすめる。「団塊世代」の総退場による職場の弱体化を埋めるにはこれしか方法がない。

さらに女性に活躍の場をという「女性の活躍促進による経済活性化」行動計画「なでしこ」大作戦」が、二〇一二年六月に、野田内閣の関係閣僚会議で決定された。小宮山(洋子)大臣も乗り気の事業であった。

そして安倍総理もことあれば女性と若者の成長力に期待し、国連総会の演説でも女性重視を打ち出している。

女に生まれてよかった。

笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面は、すでにはしゃぎまわる女性たちで占められている。

人並みに応じられないと、「ツカエナイ親父！」としてあしらわれる。

お前こそ「ツカエナイ娘！」といい返せないところがつらい。Fさんばかりか、うかうかしている心優しい高齢者から居場所もない、おカネもないになりかねないのである。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに渋く輝いている存在になるはずだった高齢者が、居場所すらなくなるとは何たる仕打ち！

職場ではIT音痴と軽視され、売れ筋ヤング製品の現場からはずされ、はてはリストラの対象となる。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見られた「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、Fさんには、戦後すぐの頃の「ふりだし」へと戻って行くように思えてくる。  
いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

### 「家庭内ホームレス」の予感

\*居場所は図書館・ファミレス・パチンコ屋

何としたことか、わが家において、「ホームレス」とさほど遠くないわびしさを感じている戦後

ッ子パパが増えているという。

パパがすすすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでもなかったのに気づかなかつただけのことである。

テレビのチャンネル権はもともたない。というより見るに値する番組がない。ラジオもプロ野球ばかり。深夜にふとスイッチをいれて、いい人や音楽とめぐりあうことがあるが。

クルマは一台しかないので行く先が違えば使えない。というより子どものようにあちこち行く場所がない。しかし車検・整備・ガソリン・JAF費用まですべて親持ちである。

食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。自分では急に作りようがないから外食時代に好きだったものも食べられない。これがつらい。

つまり「ステージ」がない状態が深まっていく。

聞けばだれもが同様で、会社でのしごとがなくなつて、家に居場所がなくなつて、「ホームレス」になる。といって屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか、公共図書館か、パチンコ屋の休憩室くらい。

「ステージ」がない原因は自分たちにもあるが、社会のしくみにあるとは判つていても、どうしたらいいのか解らない。だからウォーキングでいらいらを解消するしかない。

このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かっていると感じられる暮らしは招き寄せようもない。

## 二 マドギワに居場所をすえる

### 「MY・」がなくなるマイホーム

\*CMがことば巧みにそそのかす

Fさんは改めてじっくりわが家の中を見直して見る。

本だなの本が動いていない。家具はどれも一〇年以上まえに購入したものばかり。二〇世紀の骨とう品だ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は百均やスーパーものが多くなった。

シャツはユニクロかアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物のなかにはブランド品もあった。ルイ・ヴィトン (LOUIS VUITTON バッグ) やプラダ (PRADA バッグ) やディオール (Dior 服装饰品) やシャネル (CHANEL 化粧品) などはFさんにもわかる。スーパー品とのアンバランスさに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

Fさんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ (OMEGA 終わりの意) の腕時計だけ。家族を優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないか。

家庭内に自立した存在としての拠点がない。

「マイホーム」のために努めてきたはずなのに、と思うのはFさんのほうの都合であって、最も優遇されている仲間を比較の基準とするジュニア側は、そうは思っていないのである。

「ツカエナイ親！」として、おおかたは現状に不満なのである。

両親に対する不満と葛藤を行動のエネルギーにしている子どもたちの体内に蓄積された「荒廃菌」のありようを、つまりわが子の「潜在的ワル度」をFさんはつかめていない。

現役時代に、自分が不用意に家庭内に持ち込んでいたタブロイド版夕刊紙の「悪を暴く記事」やイエローやピンク記事から増殖した「荒廃菌」が、抗体のなかった子どもたちに取り込まれて、いまや胸の中をうようよ泳いでいるのだ。そこから発せられるナマのことばに、家族にはない他者の悪意が混じる。Fさんはその程度の後悔と理解はしている。

それでもこのごろはテレビのCMがあやしい、と思う。

CMは、善人をよそおって家庭内にたやすく侵入する。家庭内にたやすく入れられるのは善人だからだ。そこからは美德ではなく損得を説く。差別感を助長し、勝者をつくり敗者をつくる。新製品を買えない家庭の子どもたちは、外にある「しあわせ家族」を想像し、「ツカエナイ親！」として両親のふがいなさを責めて憤懣を解消しようとする。その都度、子どもたちは体内の悪鬼にそのかされる。CMは、競争相手を抹殺し、独善的で偽善的な子どもを魂を育てる。

どうやらCMは、ことば巧みにしかけた善意で、「福は外、鬼は内」と呼びかけて、子どもを

そそのかし家庭内を翻弄する。

Fさんは家庭内に自分を支える磁場のないことに危機感を覚える。

マイホームに「MY・・」がない。

家庭内で自立するためには、存在感をきちっと示すような拠点が必要なのだ。そのための専用スペースとモノの確保。

といって、夫婦と子ども二人の最低居住水準をぎりぎりクリアしている「3LDK」の住まいだから、当主として一部屋なんていう余裕はない。子どもたちが親ばなれをせずにいるから、それぞれに一部屋、それに夫婦の一部屋である。

部屋の確保を謀って追い出し（子どもの自立）を試みても、失敗した末に孤立してしまうようでは、拠点どころか「家庭内ホームレス」の確認になってしまう。

子どもの引きこもりの多いのは聞いているが、こんなことになっているのは、わが家だけののだろうか。Fさんは憂鬱である。

「家庭内高齢化リストラ」は、黙って自らするものである。たとえ不在であっても、当主の存在感を示せるような「不在の在」としての「わたしのもの、MY・・」の形成。

となると共用スペースであるリビング・ルームの一面。たとえ不在であっても当主の存在感をきちっと示せるようなコア（核）をつくることにある。

高齢者みんなにそういう意識がないから、モノもないのではないか。

いまリビング・ルームを見渡しても、何もかもがそうであるようでそうでない。おおかたは共用品なのだ。傍らにあって、わが高齢期人生を輝かせてくれる「高齢化用品」を身のまわりに配置すること。

後にすると述べるが、これまでに蓄えてきた知識や積んできた経験や技能をさらに深化・発展させることに資する「わたしのモノ」を、いつでも利用できる状態にして置いておく。知識や経験や技能は、地域社会への参加にかかわるだいたいな「個人資産」になる。

身近にあって「わたしのモノ」という役割を担えればいいのだから、ブランド品である必要はない。日ごろから愛用しており、それなりの存在感があればいい。

これと決めた「わたしのモノ」を基点にして「家庭内リストラ」をすすめる。長い高齢期の住環境を少しずつ、さりげなく整えようというのである。

### 「MY・チエア」をマドギワにすえる

\* 即座の効用は不在時の存在感

戦後ッ子「平和団塊」のひとり、Fさんはリビング・ルームを見直した末に、小さな庭と室内の双方が見渡せる窓際に、高齢者特別席「シニア・スペシャル・シート」を据えることにした。会社でも窓際だったし家でも窓際がいいと、居心地を合わせることにして。



そして文字盤が気に入っている置き時計をサイドボードの隅に、旅先で記念に入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。

Fさんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢化時代を表現する「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。

重量感より意匠センスより何よりも座り心地を優先する。いうなればわが家の「玉座」「師子座」「座禅座」である。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのだから、「MY・チェア」として大切に扱うことにしたい。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日へを静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうやって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」

というのは、マイホームを建てたころの建築家の提言で、まことにその通りと思っただけ、家族思いの当主としてはそこまで自己主張をしなかった。

若い先長い高齢期を通じて使い込むことよって座り心地を熟成させてゆく「MY・チェア」。Fさんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらして、見るからによく、座り心地もよさそうだという。

最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製のリクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅があるようだ。

長い高齢期を安らいですぐすための拠点が「MY・チェア」なのだから、これといったイストと出会ったら思い切って投資（浪費）をする。後半生が始まる還暦の祝いに購入するのもいい、古希でも遅くはない。

一日のしごとを終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとしきり一日をふりかえる。「さて」と気を改めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チェア」の即座の効用なのだ。

どっしり座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。

それなくして何の人生か。

## モノ同士のモノ語り

\* 専用品をつなぐ暮らしの動線

静かに「家庭内高齢化リストラ」がすすむ。そのうちに同居人が「パパのもの」として気づ

くだろうが。

候補はいろいろ。デジタル化で実用性を失ったが、シャッター音と手触りの感触には変わりがない高級一眼カメラ、部品を揃えるのに一苦労するオーディオといった愛用機器の類。楽器。それにあちらこちらに散在していたのを、全員集合！をかけてあつめた七〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれで十分だ。

碁・将棋盤やゴルフ・釣り具セット。手仕事に感じ入っている碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンティーク（西洋古美術品）。

日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。

さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・・けっこうあるものだ。

どれもお気に入り「わたしのモノ」であり「高齢化コア用品」の候補だが、その中から五〜七点を選び出して、活動の基点になる机のまわりや動いて見える範囲に配置すればいいこと。家庭内に「高齢期のステージ」が立ち上がる。

地球儀なんか意外におもしろい。

極東アジアにある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角にあつて、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋大国」（排他的経済水域で六位）であることを宇宙飛行士の視点で納得することができる。極東（FE）の「小日本（シャオ・リーベン、領土で六一位）」

であるとともに、パン・パシフィック（PP）の「海洋大国」であるという多重性を理解することで快い自信を与えてくれる。空の旅はビジネス。本当の旅は船旅にある。船中で人びとと出合いながら、港町を訪れる。豪華すぎない客船の造船大国は世紀をかける事業となる。

手にいれるのは困難な貴重種だそうだが、蝶の皇帝といわれる一頭の「テングアゲハ」なら、華麗に舞う姿を思うだけで気分は晴れる。胡蝶に同化してひらひらと舞った壮年の莊子の「胡蝶の夢」は、味わって損はない。

旨し「天の美祿」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利。掌の上でのぬくもりはなまめかしい）でもいい。親ゆずりの高価な骨董品があれば、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」の候補はいくらでもある。なければレプリカを置いてホンモノを探し出すこととなる。レプリカの本物化、これが内需の功績となる。

こうしていくつかの「高齢化コア用品」とそれをめぐるいくつもの季節小物、合わせて奥さまの「わたしのモノ」の応援をえて配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママのありようを伝えるしかけが見えてくる。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強める。

それでいい。モノによる「家庭内の高齢化」はモノを通じた親子語りのはじまりを意味する。外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がない

ようでは、ほんとうに優れた高齢活動家とはいえない。

### 三 宙に浮いたままの「暮らしの知恵」

#### 「エンプティネスト家族」の孫育て

\* 近居・隣居より同居が本来型

ここでは六〇歳代の「団塊世代」よりやや年長の「喜寿期」にあるWさんのお宅の場合を見てみよう。

すでに哀樂をともにして暮らした子どもたちが巣立っていき、移り住んだころの幼い姿などを「不在の在」として想い見るほどのスペース「エンプティ・ネスト」（空になった巣）を、そっとしておくことができているご家庭である。

お二人は満足しているのだが、外からはお年寄りご夫婦のさびしい暮らしに見えるらしい。そんな意味合いの声をかけられる。

Wさんの場合も、中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをし、都市郊外の一戸建住宅を購入して転居した。「二世代型住宅」が精いっぱい、**「二世帯住宅」**にはならない。

子どもがそれぞれに自立した後は、夫婦ふたりで暮らしている。父として母としての立場で

それぞれに内容は異なるが、子育て期のいくつもの困難をクリアしてきた父と母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家は、子どもたちとくに娘にとってはいそやかな生活戦略にかかわるスペースでもある。

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%までが同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台に。

大泉逸郎さんの歌った「孫」が、桑田佳祐の「TSUNAMI」がトップという時代に、場違いといった感じでベストテン入り（二〇〇〇年度の一〇位）したことがあったが、「孫」との同居の減少傾向はなお続いており、願望はやはり歌の背景に遠のきつつある。

「古希期」あたりから高齢者の「マイホーム家族」のありようは、「わが家の三世代同居型」と「ひとり暮らし型」とに分かれる。後者の場合には、夫を失ったあとには女性のひとり暮らしになる（逆もあるが少数）。

孫はかぎりなくかわいい。傷みは目立つものの住み慣れた「二世代住宅」に暮らしている父と母は、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、わが家の三代目を養育する場を用意することになる。

「近居」ができている場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれることはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。幼い孫はかわいしいし、暮らしに張り合いをもたらしてくれる。そこで出会いを待ち、会うごとに何かと望

みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。

だれもがきちっとした「孫育て」には限界があるのはわかかっていても、現状ではこのあたりが高齢者にとっては標準的「しあわせ家族」となっている。

「近居」がうまく機能しているみなさんのご家族のしあわせをここで祈りつつ、このところ減りつづけてきた「三世代同居住宅」の課題を見てみたい。三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまうからだ。

いままさにその瀬戸ぎわの時期にある。「三世代同居」型住宅は「わが家三代の暮らしの知恵」を子子孫孫に伝えるには、どうしても必要な住環境だからである。

かつてのヨメ（嫁）の忍従によって成り立っていた農家型標準住宅ではなく、三世代がそれぞれのプライバシー空間を保持しながら、同等の意識で暮らしをともにする大きめの家族住宅である。

### 「実家依存症」といわれても

\* M字でなく真一文字型の女性就労

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

近ごろは「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月のハネムーン・ベビーを

待つよりも、結婚六カ月前後が最多とかで、案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー（孫）」がやってくる。

二五歳までの並みの出産期をはずすと、あとは先延ばしして三〇歳代に。これでは少子化に歯止めをかけようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか子どもをと覚悟はきめたものの、夫婦の不安定なしごとでは将来、養育・教育費が家計の重圧になるのは見えている。

公立でも約一〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円になるというし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつるばかり。そこで、「カアさん力を借して」ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。

国は夫婦ふたりによる子育てを「エンゼル・プラン」（文部、厚生、労働、建設の四大臣合意により平成六年一二月に策定）以来の目標として推奨しているし、若いカップルを対象にして子どもの養育のしごとをしている専門職側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていない。

驚いたことには「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていない。これではわが家三代の暮らしの知恵は、宙に浮いてしまう。「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦がいる。

かつてシュウトメにわずらわされないよう専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、



M字型就業を避けて真一文字型の就業により専業課長でありたい娘世代による「三世代同居」へのUターンである。ここは女系の母娘とするが、それでも三割強は十分に確保できる。

### 「三世代同居型」住宅の魅力

\*高齡化ではメーカーが配慮くらべ

大都市近郊に住むWさん夫妻は、近居して子育て中の娘家族からの要望もあつて、「二世帯三世代同居」型の住居への建て替えを覚悟している。覚悟というと大げさに聞こえるが、目をつむっても、どこに何があるかが分かっている住宅から、新たな暮らしへの転換は、やはり覚悟がいるという。地方のお宅なら、敷地内での「隣居」が可能だろうが、都市郊外住宅の場合はそこまでの土地の余裕がない。

「三世代住宅」についてメーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはない。各メーカーともユーザー側のさまざまな要望に対応できるノウハウを持っており、住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されている。Wさんにはこれが魅力である。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・・などが実現されている。「家族とともに成長する住まい」

を提案しているメーカーもある。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。

そこで、Wさんは訪問会に参加してみた。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居だから外形も安定している。樹木も育っていて、大ぶりに枝を広げたなサクラが庭の隅にあって、それを囲むようにL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

Wさんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻のほかは高校生の娘と義母の四人家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあって、サザエさんのオムコさん「マスオさん」として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。

上下階の雰囲気には違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからだろう。「三世代同居型住宅」として申し分ないが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったという。

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省。この年に「高齢社会対策基本法」が成立）が出て二〇年近くになる。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて

高齢化対応がもつとも進んでいる業界である。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、まだまだ共用スペースのつくりつけがミドル+ジュニア主体に寄りがちになっている。「三世代型住宅」とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられるのが実情なのである。

これではほんとうの高齢化時代の三世代住宅とはいえない。

「人生の第三期」の主役として、これから二〇年も長い高齢期をゆったりと暮らす家ではない、とWさんは気づいている。

## 暮らしの知恵を次世代に伝える

\*「うちのジージがね」と自慢するジュニア

ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母となる高齢女性の出番である。孫の成長に接しながらわが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての共有スペースはもちろん、「三世代のプライベート・スペース」を等しく織り込んだ住居を目標にして設計にはいつている。

いまは三世代が揃っていないなくとも、また自分がいなくなっても、三世代が等しく扱われる同

居住宅が「三世代同等同居型」住宅（長いので「三同同型住宅」）である。

「家族みんなで考えていろいろ解決することが出来ますから」

と、Wさんはライフ・スタイルが異なる家族三代が出くわすさまざまな場面での処理にも気をくばる。

「三同同型住宅」をいま実現できるW家は「超しあわせ家族」である。すべてのご家庭にできるわけではない恵まれたケースではあるが、多くあっていいケースなのである。超優遇措置を講じてでも「しあわせ家族」を増やすことだ。おだやかな国民性は三世代あるいは四世代同居に培われて継承されていくのだから。

「三同同型住宅」の標準化のために、国や自治体はさまざまな優遇措置をおこない、建設業者はノウハウを蓄積し、企業側は女性社員の地元勤務型キャリアの設置とともに、子育て期の女性が男子社員と伍して能力を十分に発揮できるよう支援する。

地域と家族は総出で次世代を育てることとなる。

これまで女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトというM字型就業にかわって、入社時から高年齢まで真一文字型にしごと集中できる女性人材として処遇されるようになる。

そして次世代に、母系のつながりを有効に活かしながら「わが家の暮らしの知恵」を伝えることが可能になる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによって

もたらされる孫世代へのメリットには計り知れないものがある。父と母はともに凛々しくしごとに向かい、祖父母は家族を温かく包容する。

「うちのジージがね」

とって自慢するジュニアが三分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。国の骨格がもろくなってしまうのである。

同居しながら高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するために重要な「三つのステージ化」の一環なのである。

### その三 生活感性を満たす国産・地産品

#### ―「MADE IN JAPAN」は再び行った

#### 「サンパク以後（三八九一五）」は片下がり

\* 経済的デフレと潜在的パワーの萎縮

晴れやかだった記憶として思い起こせば、東京株式市場の「大納会」で「東証一部の株価」が三万八九一五円というピーク値を記録したのは一九八九年一月二十九日だった。「三八九〇サ  
ンパクⅡ三白」というのは正月三ガ日に降る祝いの雪をいうが、一九九〇年正月の東京の空に  
雪ならぬ株価が舞って、「サンパク以後」（三八九一五）はひたすら右片下がりとなった。

それに先立つ一九八九年一月七日に、一〇〇日を超える闘病をつづけた「昭和天皇」が八七  
歳の高齢で亡くなったのだった。六月二十四日には、「東京キッド」や「私は街の子」以来、戦後  
の日本を体現していた歌手の美空ひばりさんが、最後に「川の流れるように」を歌って五二歳  
で亡くなっている。

「やれやれ、これで戦後が終わったのだ」  
とつぶやいた人びと。

とくに終戦を二〇歳〜三四歳で迎えた大正生まれの人びとは、このときは六四歳〜七八歳の高齢期での実感だったにちがいない。「昭和」が終焉し、「平成」とともに始まった日本経済の下降。高齢期の人びとのなかには、みずからの戦後を顧みての終息感と、その後の「経済の萎縮（デフレーション）」とを体感として理解した人が大勢いたのだった。

ここらの底には戦乱で亡くなった人びとへの鎮魂の思いは消えずとも、自分の肩にかかる荷だけは静かに降ろし、長かった緊張を解いたのだった。将来の高齢期に新しい目標も構想も見当たらなかったし。

「われにかえった」高齢者の一人ひとりに「内在する萎縮（デフレーション）」は、ゆっくりとした静かな変容であり、外から気づかれることはなかった。

しかし戦争の惨禍を知り、どん底の貧しさを知るといふきびしい経緯をもつ自分たちの後を、戦争も知らず、貧しさも知らない若い連中が一对一で引き継ぐことなどできないだろうという自負と憂慮をない交ぜにした感慨は、大正生まれの仲間同士の会話のうちに繰り返された。

それがすべてではないとは知りながら、企業現場からの自分たちの隠退（労働力・構想力の消滅）が、総体として「日本経済や社会の萎縮」をもたらす要因となるだろうことは予測しえても、まさかこれほど早くに高齢者となった自分たちの医療費の負担増や年金の減額や消費税増税が現実になり、あるうことか、若年層から不公平との反発まで浴びようとは、思いもよらなかったことにちがいない。

## 「大正生まれ」の歌

\*働きづめに働いた人びと

大正生まれの人は今、平成二七年〓二〇一五年には九〇〓一〇四歳である。  
ゼロから始まった人生だからゼロに帰ること、「孤独死」だっていとわなない人びと。

大正（明治四五年〓大正元年〓一九一二年七月三〇日から大正一五年〓昭和元年〓一九二六年一二月二五日）生まれの人びとは、だれもがたいへんだった。男性も女性も。男たちは「富国強兵」の下で育てられて、大陸や太平洋の戦場で戦い、終戦の昭和二〇年〓一九四五年には二〇〓三四歳。生き残った男たちはこんどは「企業戦士」となって、死んだ者、傷ついた者の分まで働いた。女性たちは「良妻賢母」に育てられて、銃後をまもり、戦後は子どもを育て、身をもって平和を伝えてきた。かつて大陸で「自ら生きよ」と放り出され、いままた一人暮らしで「自ら生きよ」と二度も放り出された人もいる。力をつくして高度経済成長を成し遂げた昭和五〇年〓一九七五年には五〇〓六四歳。このころ次の歌が歌われた。

「大正生まれ」 小林朗 作詞 大野正雄 作曲

1番



♪大正生まれの俺達は 明治の親父に育てられ  
忠君愛国そのままに お国の為に働いて  
みんなの為に死んでゆきや 日本男子の本懐と  
覚悟は決めていた なあお前

2 番

♪大正生まれの青春は すべて戦争（いくさ）のただ中で  
戦い毎の尖兵は みな大正の俺達だ  
終戦迎えたその時は 西に東に駆けまわり  
苦しかったぞ なあお前

3 番

♪大正生まれの俺達にや 再建日本の大仕事  
政治、経済、教育と ただがむしやらに三十年  
泣きも笑いも出つくして やつと振り向きや乱れ足  
まだまだやらなきや なあお前

4 番

♪大正生まれの俺達は 五十、六十のよい男  
子供もいまではパパになり 可愛い孫も育ってる

それでもまだまだ若造だ やらねばならぬことがある  
休んじやならぬぞ なあお前  
しつかりやろうぜ なあお前

作詞者の小林朗（こばやし・あきら）さんは大正一四年の生まれ。二〇〇九年二月二日に死去。「大正生れ」の歌は一九七六年にテイチクからレコードが出された。

大正人の優れた業績を垣間見るために、少しだけ知名人をみてみよう。二ページほど紙幅をいただいて。**赤色**は平成二四年以降に他界した方、**青色**は現存の方である。

一九一二／元年 一／太田薫 二／双葉山定次、三／都留重人 四／**新藤兼人** 五／林伊佐緒  
六／大友柳太朗 八／田島直人、福田恆存 九／成田知巳、松下正治 一二／木下恵介  
一九一三／二年 一／荒正人、田中英光 二／中原淳一 三／尾上松緑（二代）、金田一春彦、  
三・二八**篠田桃紅** 五／森繁久弥 六／杉浦民平 九／家永三郎、丹下建三、豊田英二、**吉田秀和** 一〇／織田作之助

一九一四／三年 一／深沢七郎 三／丸山真男 五／前畑秀子 六／**呉清源**、霧島昇 七／木下順二、笠置シヅ子、八／後藤田正晴、平岩外四 九／宇野重吉 一一／田村魚菜  
一九一五／四年 一・二**むのたけじ** 二／二葉あき子、水の江滝子、野間宏、小島信夫 三／濱谷浩 四／飛鳥田一雄 六／和歌森太郎 九／高川格 一一／春日野八千代

一九一六／五年 一／福武哲彦、岡晴夫 三／有島一郎、五味川純平、齊藤茂太、岩谷時子 四  
 ／木下忠司 七／坂田道太、鶴岡一人 八／藤村富美男、五島昇 一〇／渡久地政信  
 一九一七／六年 一・一一**日高六郎** 一・一二**秋山ちえ子**、中村歌右衛門 二／沢村栄治、山  
 田五十鈴、横山泰三 三／柴田鍊三郎 四／島尾敏雄 七／浜口庫之助 一〇／角川源義  
 一九一八／七年 一／小暮実千代 二／池部良 三／中村真一郎、福永武彦、升田幸三 五／  
 田中角栄、五・二七**中曾根康弘** 七／堀田善衛、近江俊郎 九／高橋圭三 一二／高峰三枝子  
 一九一九／八年 一／**田端義夫** 一・二三**園田天光** 二やなせたかし 三／水上勉 六／岩  
 波雄二郎 七／長洲一二 八／大野晋 九／加藤周一、九・二三／**金子兜太** 一一／佐治敬三  
 一九二〇／九年 一／長谷川町子 二／**山口淑子** 三／**川上哲治** 四／三船敏郎 五／**森光子**  
 五／**安岡章太郎** 六／秋山庄太郎、梅棹忠夫 七／竹内均 一二・二四**阿川弘之**  
 一九二一／一〇年 一／谷桃子、吉田正、盛田昭夫 二／庄野潤三、大松博文 三／貝谷八百  
 子 四／犬養道子 七／藤原弘達 一〇／一〇・一三**塩川正十郎** 一二／山本七平、五味康祐  
 一九二二／一一年 一／橋川文三、山田風太郎 二／三根山隆司、安川加寿子 三／山下清、  
 和田寿郎 四／岩井章、三浦綾子 五・一五**瀬戸内寂聴** 六・一八**D・キーン**、七／丹波哲郎  
 八／石井好子 九／塚本邦雄、九・一二**内海桂子** 一〇／別所毅彦 一二／大下弘  
 一九二三／一二年 一／池波正太郎，**三國連太郎** 三／大山康晴、田村隆一、遠藤周作 四／  
 四・一九**千宗室** 五／五・二四**鈴木清順** 八／司馬遼太郎 一一／白井義男、一一・五**佐藤愛子**

一九二四／一三年 一／佐藤亮一 一・一六京極純一 二／石本美由紀、岡本喜八 二・一八  
 陳舜臣、越路吹雪、淡島千景 三／安部公房、三・三村山富市、三・二五京マチ子、高峰秀子、  
 高田好胤 四／團伊玖磨、吉行淳之介 六／芦野宏、六・二五丹阿彌谷津子 一〇／石橋政嗣  
 一一／山崎豊子、青田昇、一一・一四鈴木登紀子、吉本隆明 一二／鶴田浩二  
 一九二五／一四年 一／三島由紀夫 二／栃錦清隆、二・二七豊田章一郎 三・一二江崎玲於  
 奈、三・二〇梅原猛 五・一〇橋田寿賀子 六／藤沢秀行、加藤芳郎、六・二八大関早苗 七  
 ／芥川也寸志、藤沢嵐子、七・二三色川大吉、八・二一篠原一、丸谷才一 九／杉下茂、辻邦  
 生 一〇／中村雄二郎、一〇・二〇野中広務、一一・六桂米朝  
 一九二六／一五年（一二月二五日）一／一・八森英恵、いいだもも、一・一二三浦朱門 二  
 ／榊莫山、松谷みよ子 三／萩原延寿、犬丸一郎、三・一五辻久子、三・二〇安野光雅、加古  
 里子 四／宮尾登美子 七／奥野健男 八／古田武彦 九・一／石井ふく子、星新一、今村昌  
 平、九・一九小柴昌俊 一一／根本陸夫、一一・三〇中根千枝

### 九割中流は「大同社会」にいま一歩

\* 社会主義的平等主義的自由経済の国

「もはや戦後ではない」といわれたのが一九五六年。

それ以後に生まれた人々には戦禍の実感がないのかもしれないが、一億人を超える国の国民の九割までが「中流と感ずる社会」を実現して、しかも長期に継続（一九七〇年～八九年）したことは世界にも例がないのである。

「日本は社会主義的・平等主義的・自由経済の国だ」

と八〇年代に、外国人に向かって紹介したのは、「大正人」のひとり、盛田昭夫さん（当時はソニー会長、経団連副会長）だった。

盛田さんは、外国人に日本の「国のかたち」を問われると、自信をもってそう説明していたという。国際的基準の中で、世界の開発途上国から目標とされるアジア地域の先進国として立ち現れたのである。

高齢者のだれもがその経緯をリアルタイムで体感してきた。個人の体験してきたその歴史的成果は、仔細に思い返して実感し直してほしい。

一九七〇年には「進歩と調和」を掲げた「日本万国博」があり、八〇年には絶頂期の「山口百恵」が引退し、そして八九年には昭和天皇が亡くなり、美空ひばりが世を去った。

その間に、ゴミ戦争、列島改造、べるばら、カラオケ、インベーダー、そしてフルムーン、おしん、くれない族、新人類、トラバリュ、外にはペレストロイカ、ベルリンの壁・・・。

その間、「九割中流社会」といわれた。

三千年にわたって中国歴代の為政者が目標として成しえない「大同社会」（いまの中国は「小

康社会」をめざす)にほど近い社会であり、したがって歴史的にも貴重な体験なのである。たしかにみんな等しく穏やかで居心地はよかったが、通過時には、それほどとも思えなかった。理想とする「大同社会」とはどういう社会か。

わかりやすくいうと、『礼記「礼運」』では「外に戸を閉ざさず、これを大同という」といい、世直し『水滸伝「第一回」』でも「路に遺ちたるを拾わず、戸夜に閉ざさず」という太平の世を夢見ている。

「夜に戸を閉ざさず」に暮らせる社会のこと。たしかにそういう時期があった。

「セキュリティって何？」という社会である。

「路に遺ちたるを拾わず」は、拾わないのではなく、落としたりした人のところへ戻ってくることに。そういう時期がこの国の一九八〇年ころには確かにあった。拾ったものは必ず交番に届けたし、なくしたものや忘れたものは必ず戻ってきた。つい三〇年ほど前のこと。みんなどこかで、歴史的なこの貴重な時代を体験してきているのである。

そして、いまや、もはやありえない。

世界が狭くなり、どこからでも侵入者や破壊者がやってくる時代。

大戦後の東アジアの小世界「日本」だったから可能だったのだろう。ボートピープルが命がけでめざしたあのころの、あこがれの国「日本」のことである。

いまでも「シニア海外ボランティア」の高齢者や日本企業の現地駐在の高齢社員が、開発途

上国の現地の人びとから心からの信頼をかち得ているのは、生産者としてユーザーが満足する品質（モノ）にこだわるとともに、背後に息づく品格（ヒト）がおのずから伝わるからだ。「みんなが中流」という当たり前だった平等意識に亀裂をもたらすことになる日本経済の「萎縮」（デフレーション）がはじまったのは九〇年代初めのころである。

ベルリンの壁の崩壊、アメリカ一極化、途上国の台頭・・・。

平成とともにはじまったということになれば、すでに四半世紀のあいだ「九割中流」の壁は崩落しつづけてきたことになる。

## 「MADE IN JAPAN」のゆくえ

\* 丈夫で長持ちする中級品が評価

日本経済の頂上期に、盛田さんが書いた『MADE IN JAPAN』（一九八七年、朝日新聞社）は、そのあたりのことをこう記している。

「国内のマーケット・シェアをかけた激しい競争を通し、海外での競争力を養うのだ。エレクトロニクス、自動車、カメラ、家庭用電気製品、半導体、精密機械などが、その代表的なものである」

日本製品の多くは高級品ではなかった。

「良質な中級品」、つまり一般の人びとも必要とする良質なものを作ることには活路を見出ししてきたのだった。良質というのは、「使いやすく、丈夫で、長持ちする」という意味でいわれた。高級品ではない。

しやにむに近代化（といっても多くは戦勝国アメリカ化）をすすめた日本は、外国から素材を買い、丈夫で長持ちする良質な製品を作って売る「加工貿易立国」として、明治維新に次ぐ第二の開国を行い、国土の再建をめざした。鉄のカーテン（ソビエト）や竹のカーテン（革命中国）のむこう側の「社会主義」の動向にも関心を払いながら。

盛田さんがあげた前記の商品は、国内でよく売ればそれは外国とくにアメリカ市場で評判がよかった。

「MADE IN JAPAN」のトランジスタラジオ、カメラ、テレビ、小型車など良質な中級品は、実用品として認められてきたのである。それがまた日本人みずからの生活を平均的に充足し、中産化することで、

「みんなが中流」  
の実感が生まれた。

優れた技術者が「良質な中級品」をつくり提供することが、わが国の立国の基盤である。

そのことは骨に刻み心に銘じておかなければならない。けっして高級品ではない。

だからどこの家庭でも、日用品はどれも丈夫で長持ちする国産品があたりまえだった。わが



国では舶来ものといえば、化粧品とか時計といった欧米からのブランド品が主だった。

そこへ「途上国産品」が混じり出し、目立つようになり、はては逆に国産品はどれというようになるまでに、せいぜい一〇年余といったところだったろうか。

前述したが、流行語にもなった「日本列島総不況」と堺屋太一さん（経企庁長官だった）が日本経済を評したのが一九九八年のこと。当時すでにアメリカ一極体制の下で、途上国主導の経済活動が本格化していたということになる。日本の進出を求めるアジア諸国への対応は、ヨーロッパ勢や韓国に一步も二歩も遅れることになった。

それまで途上国からの輸入品といえは「山海珍味」のパイナップルやマンゴーなどで、東京では明治屋や紀ノ国屋の店頭をにぎわせていた程度だった。あとは韓国製の「衣料品」が目立つくらい。日用品は輸入せずともこと足りていたからである。

## 二 途上国産の日用品に囲まれて

### 家庭内に「途上国産品」が入り乱れる

\*「アジアの共生（豊かさの共有）」を実感

「衣料品」からはじまった「家庭用品の途上国産化」。

ほかの製品への広がりには、その後、日新月異の勢いでどんどん進んでいった。

暮らしの中で「MADE IN KOREA」から「MADE IN CHINA」や「MADE IN THAILAND」…といったアジアの国々からの日用品が次々に国産品に入れ替わる度に実感されてきた。

「えッ、これもか」

と驚くほど早く「モノの途上国産化」は進んで、ついには精密機器にも及んでいった。

「日本列島総不況」の下で収入が減ったわが国の消費者は、国産品や製作技術の将来を危惧しながらも、やや粗悪だが「安価」な途上国製品を購入することになった。

「丈夫で長持ちする純国産の優良品」に囲まれて暮らしていた一九八〇年ころと比較すればよくわかる。およそ三五年前のこと、みなさんはおいくつだったろう。

一九八二年が小売店のピークだったという。そのころは全国に商店が一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所もあったという。数もそうだが商店街には人をひきつける活気があった。馴染みの店に寄るのが楽しかった。

商品知識ばかりか人生の先達があちこちにいて、元気がもらえたのである。

「モノと暮らしの情報源」

それが商店街だった。

歳末の商店街の活気はどこもなつかしい記憶になったが、そのころ購入した優良品のあれこれはまだ暮らしの中で生きている。

日本企業の海外進出は、業績悪化の果ての生き残りをかけてであった。

アジア市場でもヨーロッパ系企業や韓国企業にあきらかに時期遅れではじまったものの、現地での歓迎と期待は大きいものがあつた。

あこがれの日本から、有名企業がやってきたのである。

「日本製品を使って日本人のような暮らしをしたい」

というアジア途上諸国の人びとの願望が叶いつつあるのである。

決して褒めすぎでも言いすぎでもなく、「アジアの共生（豊かさの共有）」へむかって、わが国の私企業による公益的成果として、日本ブランドは成立している。アジア各地にしっかりと着床しているのである。

世紀の視野でみて、日本が誇っている国際貢献である。

毎日用いている日本ブランドの生産地を逆にたどれば、アジア諸国の人びとの暮らしに日本企業をもたらしている成果が推察される。

いうまでもなく現地を仔細にみれば、先行の欧米企業や韓国企業、最近是中国企業の進出もあり、日本企業は生き残りを懸けて事業を展開しているのに変わりはない。現場での事業活動の成果は、派遣社員の並みならぬていねいな指導とそれを受けて日夜を徹して移入に努めている現地従業員の熱意の結果でもあるのである。

わかりやすい例だが、海外の現場へ大衆性に配慮して進出した「ユニクロ・UNIQLO」

や「大創（ダイソー・DAISO）」の動向をみれば、「アジアの共生（豊かさの共有）」が時流としてアジアの奔流となつていくことが理解される。

前世紀には戦場となつた地域でも、「平和裏」に展開される「モノとヒト」の交渉や製造プロセスを通じて、わが国が平和国家であり、民主主義によつて「しくみ」をつくり、ユーザーが納得する「モノ」づくりをし、従業員に差別なく接していることを理解しているにちがいない。

豊かさの共有をめざしてきた「日本型マネジメント」を現地で活かしている日本企業とその社員は、言い過ぎでなく、わが国を代表する平和の遣使なのである。

### 家庭内に「百均グッズ」・職場に「非正規社員」

\* 途上国日本化による日本途上国化

中国へ進出した日本企業は、上海だけでも三〇〇〇社を超えするという。それぞれ社名の漢字表記に工夫しているのはご存じのとおり。

いくつか例をあげてみよう。

たとえば「優衣庫」（ユニクロ）、「三德利」（サントリー）、「索尼」（ソニー）、「施楽」（ゼロックス）、「佳能」（キヤノン）、「樂天」（ロッテ、まぎらわしいが音ではルオ・テイエン）、「華歌爾」（ワコール）、「百樂」（パイロット）、「養樂多」（ヤクルト）、「日波」（サンウエーブ）、「可

果美」(カゴメ)など、「資生堂」「富士通」「麒麟」「味之素」などはそのまま。

しごとの現場では、技能も人格も優れた多くの派遣社員がことばや生活習慣の違い、国民感情に配慮しながら業務に当たっている。

前項でもみたように途上国主導の「グローバル化」の対応に、日本企業は遅れに遅れて生き残りをかけた荒療法が、生産拠点の途上国シフトと社内リストラだった。

両方ができる企業はそれを急いだ。

わが国は前世紀にアジア地域でただひとつ、「欧米追随型の先進国化」をなしとげていたが、同じアジア諸国の人びとの近代化への熱い思いを理解していたとはいえない。

アメリカ市場での途上国主導の「グローバル化」にうながされて、日本企業は「サバイバル(生き残り)」をかけた進出となり、資金、人材、ノウハウを移出して、途上国の需要に見合う日本ブランド品の生産をめざすこととなった。

早くから進出していた企業は、比較にならない良い人脈と体制を現地で保持しえている。

ここでやや理屈っぽく日本企業の海外進出をいうのは、その結果として国内での対応が混乱し、これまでの「終身雇用」型の正社員では経営がもたなくなり、アルバイトや派遣社員で支える「日本企業の途上国化」対応が急速に進んだことをいうためである。

したがって正社員化は「途上国の日本化」とともにゆっくり回復せざるをえない。政冷経熱の結果の混乱であり、わが国の企業に現れて当然のグローバル化症候群であった。

ひととき電球や電池は安くなったがすぐ切れる粗悪品になった。メーカーを見ると日本を代表する企業である。広州では、

「あの日本の索尼（SONY）がこんな製品を」

という風評が立たざるをえなくなる。

これもアジア共生のための「日本企業の途上国化」の実態であり、「余儀なく受けざるをえない悪評」である。

いまや家庭内の電球は、「ライト・イノベーション」（ベンチャー企業名になっている）によって、やや高だが安心して使える日用品の成功例になりつつある。こうして途上国製品で満たされていた家庭内日用品は、ひとつずつ国産・地産品に戻ることになる。

高齢者なら体験としてわかることだが、かつて日本がたどったX地点まで戻って足踏みしながらおこなうアジア共生のための「共同歩調」であり、日本のなすべき責務なのである。

現地社員に「ありがとう」と率直な謝意を受けることは、現地で尽力する日本人社員にとつてしあわせなことだ。その謝意の半ばは戦後に会社をつくった先輩に捧げるべきものだろう。踊り場で足踏みして待っていた日本の熟練技術者。

「家庭用品の途上国化」のための日用品の劣化を、アジアの時流として眺めてきた。それゆえの「足踏み」であったから、時をまつて再開する優れた製品、やや高だが安心な製品の国産・地産化のための技術や意欲まで失うことはなかったのである。

## 海外製品が安価・粗悪から脱するとき

\*「足踏み」して待った熟練技術者が動く

日本企業が次々に海外進出して一〇年余り、日本ブランドの海外製品が増えつづけてきた。たからといって国内の熟練技術者の技術を越える製品が次々にできて、生活感性の高いわが国の高齢者の暮らしが快適になったわけではなかった。

この間、日本の中小企業の熟練社員はどうしていたのだろうか。死活の問題といわれながら、耐えつづけてきた。途上国製の百均グッズを見て、ご本人たちには分かっている口にしていないから聞こえてこない。

自分たちがかつてたどった同じ道をたどって、アジア途上諸国の人びとが製品をつくり、豊かになることを願って、踊り場で「足踏み」をして見守ってきたのである。

踊り場で「足踏み」をしてというのは、技術力を保持しながら、じつと機会を待っていたということである。

アジア途上国産の製品が「粗悪品から中級品」に達したのを見定めて、企業も戻ってくる。国内産の「やや高」だけでも「品質が安定」しており、「安心して買う」ことができる優良日用品（高級品ではない）の企画・製造・販売に取りかかることになる。

その先例として、今治のタオル (IMABARI) がよく引かれる。

吸水性のいい「使って気持ちが良いタオル」をとことんまで追求してえた技術結集の成果であり、「やや高だが安心して使える優良地産品」のモデルになっている。

スーパーで日用品の中に「MADE IN JAPAN」を見つけると、うれしい。

国民として技術の保持にほっとするし、滞らせていた生活感性がもどってくる実感も生まれる。日本製の下着の肌に触れる心地良さは暮らしの張りにつながる。男性なら途上国製の電動髭剃りの傍らで、チタンコートの手動髭剃りを使ってみるとよい。剃り味抜群であっばれの心地良さなのである。生活の萎縮 (デフレ) からの脱却は、こういう生活感性の小さな回復・再生から本格化するのちがいない。

優れた生活感性をもつわが国の高齢者にとって、使って心地の良いものとなる「国産・地産優良品」が、企業内で窓際族といわれていた高年社員の起死回生のアイデアから生まれる。

そういう日用品の回復・再生は、「団塊の世代」など若手シニア・ユーズーからの要望によって動きだしている。大手家電はシニアが家電に抱いている不満を聞いて開発した新製品を売り出した。車から紙オムツまで、もうすぐ「雨過天青」といった明快さで技術レベルの高い国産・地産の新製品が次ぎ次ぎに現われてくる。

がまんして待っていた高齢者の暮らしを豊かにするだろう。



### 三 頼れる国産・地産品が再登場

#### 流通から先に反応がはじまる

\*富裕層を対象とする高級品ではない

都内のデパートは、さすがに変わり身がはやい。

顧客ターゲットを若者・女性層から高齢者層に切り替えて改装をおこなったところもある。

「製品」の生産現場より顧客に近い「商品」の流通現場のほうから反応がはじまる。

イオンの「GG（ブランド・ジェネレーション）」戦略などがそれだが、人生を楽しむ「ラジェネ世代」の要請に応える新製品が間に合わない段階であり、時代の烽火にはなるが収益にはまだ結びつかないだろう。

サービス部門では、セブンイレブン、イトーヨーカドー、生協、JP（日本郵便）などが先行して動いている。

しかし注意すべきは、ここでも「較差」と「格差」の意識が混在して動いていることにある。

デパートの若手担当者が「高齢者の富裕層を対象にして」と口をすべらせたように、格差としての要請を認めていることにある。

求められているのは、選ばれた人が用いる高級品ではない。

途上国製品との比較で優れている「較差」であつて「格差」ではない。「エイジノミクス」を検討する場で、ユーザーのありようとして、マクロ経済学の吉川洋教授も指摘されている。

わが国の熟練生産者は、途上国産品の良質化を見たうえで、その上をゆく優良品、生活感性の高いわが国の高齢者みんなが心地よく使える優れた国産・地産品を提供しようとしているのである。流通部門がそこを間違えると企業回復を阻害する。

この一〇年余り、だれもが体験してきたことは、「家庭用品の途上国産化」だった。国も企業も国民もその時流を時代の要請として受け入れてきたといつてよい。

それは工業技術製品の対価としてもたらされた海外各地からの食品が「飽食の時代」といわれるまでにこの国の食卓を豊かにしてきたことで実感されている。スーパーの棚の食品には産地の名が記されていて、日本製品がたどりついて、その住民の暮らしを豊かにしている地先の姿が見えるからである。

そんな中であつて、日本各地産の食品はどうだろう。

市場で苦戦を強いられてきたが、山梨のモモもといい、青森・長野のリンゴといい、山形のサクランボといい、産地の努力がうかがえるほどに質の差が歴然とし、価格がほどほどに収まっている。ついでに、「やや高だけれど優良な国産・地産食品」として、受け入れられている。

それらはわが国のユーザーにしっかりモニターされた「優良な輸出品」候補なのである。一次産品でそうなのだから、他の技術系の商品ではなおさらである。

生活感性の高い日本の高齢者は、「モノの途上国産化」による「生活水準の途上国化」にがまんしながら、「やや高でも安心な国産・地産の優良品」の登場を待っていたのである。

「みんなで豊かになる」という基本理念は生きている。

何度でも繰り返すが、わが国が追求するものは決して高級品ではない。

## 「エイジノミクス」が財政難を克服

\*「成長＋成熟＋円熟」社会を支える

「アベノミクス」後の財政難を想定外の「エイジノミクス（高齢化経済）」が克服する。

といっても、目前の時流としての課題に忙殺されている現役リーダー層には、同時に底流しているこの身近な課題はもつとも理解しづらいものようである。

経済力を維持するにはこれまでどこの国でも成長力が必要であり、いまの日本では若者と女性の潜在力がそれだと信じこんでいるからだ。

国際的に高齢化先行国である日本が、「成長＋成熟＋円熟」社会を達成することによって、世界の多くの高齢化途上国が追随することになる成功モデル事例。「三世代現役型」として達成する重要な課題であることに思い及ばない。日本の高齢者の実人生が、多数の他の国の高齢者の人生の指標になる。誇らしい光景ではないか。

とって日本の高齢者が特別な活動をする必要はない。

生活感性の高い日本シニアが、自分たちの暮らしを快適にするようなモノやサービスを要請すること。それに応えて技術や知識や経験のある人びとが、新しいモノやサービスを作り出せばいい。それは中小規模のもので、ありようとしては水玉模様のように重なりながらこの国の大地を覆っていくことになる。

マイホームに自分が要望した「MY・・」がひとつずつ増えていく。

肌で感じられるほどに「優良な国産・地産品」が身のまわりに安定した存在感を示すとき、「日本高齢社会」を下支えする「エイジノミクス（高齢化経済）」の安定した姿が見えてくる。内需による持続可能な経済活動の新展開となる。

それでいい。

そうしてはじめて各地各界の中小企業の熟練技術者が動き出し、自社製品の開発に挑む体勢をととのえることになる。引退した社友も参画して、みんなが愛着をもって新たな自社ブランド製品を送り出す。

高齢化製品・商品・用品ルネサンスである。

「いい時代に生まれちゃったじゃないか」

高齢期にそう言いあえる社会である。

そう言えないようでは「いい高齢社会」にむかっているとは言えない。

その成果を集めて幕張メッセを賑わすような「国際高齢化製品展示会（I E E）」が催されて、外国人バイヤーが集まることになるだろう。これは広州でも上海でも不可能な、日本の「M A K U H A R I」が独走する国際イベントとなる。

一つひとつは小規模でいい。

着実に優良製品化に成功した企業が増えることで、現有のグローバル経済圏にさらに「高齢化製品経済圏」を着実に上乘せする「子ガメの上に親ガメ」といった趣きの経済活動「エイジノミクス（高齢化経済）」が展開されることになる。

アベノミクス（女性と若者経済）は失敗させるわけにはいかない。その上に成熟・円熟型経済を乗せることで、オールジャパン、オールエイジズの日本経済が成立する。

企業内高齢者の努力で「高齢化国産品」の開発に成功した業種が増え、地域では「高齢化地産品」が増えることで、地域生活圏をますます豊かにする。「B1グランプリ」（ご当地グルメでまちおこしの祭典！）のような形の「高齢化地産品グランプリ」もいい。増えつつける「現役長生」型の高齢者の要請によって、持続的な内需を拡大し安定させる。かつて江戸時代に全国的地産品を生みだしたように、地域特性を活かした製品化を大いに競って。

いずれ海外の高齢者が求めるような良質の日本製「国際高齢化商品」（新ジャポニスム）は、次世代の輸出品となる。今がその歴史的に優位な時期なのだ。

日本シニアが持つこういう優れた「世紀の役割」を感知できず、能力を發揮する環境を整え

ることなく、一〇年余りを延滞させてしまったのは、だれか。

このまま推移しては、政治リーダーはわが国の「新世紀の役割」を感知できなかつた責任を歴史的に負わなければならなくなる。政治リーダーは君子豹変して、増えつづける高齢者の「成熟＋円熟社会」創生という活動が持続可能な経済活力であることをすみやかに認めて、高齢化商品による経済活動「エイジノミクス（高齢化経済）」を活発化してもらいたい。

### 「新終身雇用」と「新年功序列」による再編

\*アメリカ型「成果主義」の成果は限定的

「新商品開発の遅さ、人事異動の不活性、非採算性など、みな日本企業のもつ特殊性です」

と云つてのけ、個人の能力にインセンティブを期待する「個人主義」や、社内競争による「成果主義」といった手法を導入する。それがあたかもマスターキイでもあるかのように。

したがって給与も、終身・年功型給与の基本である「年齢給」や「勤続給」を縮小あるいは廃止して、能力優先の「職務給」にシフトする。日立までが世界企業化にむけて「ポスト型賃金」まで導入した。「日本型マネジメント」の幹に傷をつけるような変革にも着手してしまう。

わが国の企業風土では、成果を個人に還元する「アメリカ型の成果主義」はインセンティブとして効果を生まない、というか長くは生みつづけないだろう。

家庭の、地域の、企業の、国家の根幹に据えてきた「和の絆」、日本を支えているのは働く人びとの信頼と協働である。企業の活動を弱らせ、製品の輝きを失わせ、企業風土を歪ませてしまふであろう改革に異議をとなえてまず立つのは、内需型「百年企業」である。

導入してみてアメリカ型マネジメントのもつ脆弱性に気づけば、日本企業の「終身雇用」と「年功序列」がいかに有効なオールエイジズの「日本型マネジメント」の骨格であるかに思い及ぶはずである。いま加速する「社会の高齢化」を支える良質な「高齢化製品」の開発のために、熟練高齢者を活用する。その際に年齢差別のない「新・終身雇用制」を企業インセンティブとして捉え直すこと。そうして初めて企業の「成長+成熟」新製品への道が見えてくる。「終身雇用制と呼ばれてきましたが、実際には六〇歳定年制が一般的だったですよ」といわれれば、その通りである。

たしかに「終身雇用」といつても終身ではなかったものの長期（無期）であり、先輩から後輩へとわが社流儀を伝えながら生涯支えあう信頼と平等の絆の表現として「終身雇用」は引き継がれてきた。定年後も終身のつきあいを建て前とする「愛社意識」として保たれてきた「和の絆」の伝統なのである。

先輩を敬愛する「年功序列」の骨組みも変わらない。企業と現役社員を思う旧友会・社友会も健在である。伝統のある「百年企業」にはそのまま今も根づいており、息づいている。

いま「逆風行舟」にある日本型企业が基本としている「終身雇用」や「年功序列」を支援し

擁護する本稿の立場は明快である。

入社したての若手社員は企業の発展を願ひ先輩社員を敬愛し、企業の骨格を支える中堅社員は製品を育ててくれた引退社友を敬愛する。

社友は生涯にわたって愛社の心を失うことはない。それが率直に表わされることが「終身雇用」の安心感となり、「年功序列」として先輩への敬意となり、「和の絆」の信頼感となり、企業の安定感となり、しごとへのインセンティブとなる。

これがユーザーへ最良の製品を提供する企業の「社是」の根幹であり、それが国の骨格と企業の品格を支えている「日本型マネジメント」による生産活動ではないか。

## 日本型企业は禍中からサバイバル

\*オールエイジズが再生の契機に

思い起こせば、一九八〇年代には「日本型マネジメントは世界一」(ジャパン・アズ・ナンバーワン)とみていた海外投資家に、二〇年後には日本企業の利益率が低いのは「終身雇用のせい」といわれるようになる。

この間に何があり、何がなかったのか。

仔細な分析は学者の方々にまかせるとして、企業現場の実感としては、「終身雇用」制のせい



ではなく、二〇年の間に企業内の人的パワー（潜在力を含めて）が弱体化したせいなのだ。いまでも七〇%以上のわが国の労働者は「終身雇用」を支持している。

だが、二〇年のあいだに個人にはわからない社員として持つ想像力、気力、愛社の心が右片下がり落ちてきた。

みんなで生き抜くために働いた「創成期」と違って、有名企業になり業績も安定している企業に入社した社員の「守成期」への対応がもたらしているものだ。

社員同士が信頼しあい生産知識・技術を共有し、最良の製品をつくるために働ける。そのための「終身雇用」や「年功序列」といった日本企業の基本樹形であった「日本型マネジメント」がいけないわけではない。業績がいいトヨタやキャノンだから支えられたのではなく、本来はいずれの企業でも根・幹として守ることができる慣行なのである。

いまある企業は、いまの社員のためではあっても、いまある社員のものではない。敗戦の焼け野原の下に温存されていた根っこから、先人が「生き残る」ために敗戦後の状況に適応させ、試行錯誤を繰り返しながら樹形を整え、枝葉を茂らせてきたものである。

苦難の中で模索し、選択してきたのが「終身雇用」であり「年功序列」と呼ばれる企業慣行であることを、そう簡単に忘れ去るわけにはいかない。

経緯が穏やかであったわけではない。思い返せば胸の奥から歌声が聞こえてくる。

大地ばかりか、企業の存続をゆるがすような社内争議を、「♪起て飢えたる者よ・・・」で始ま

る「インタナショナル」や「♪暴虐の雲、光を覆い・・・」で始まる「ワルシャワ労働歌」を歌って社屋を包囲する労働者側と、受けて立つ経営者側との間で何度も繰り返したすえに形成されてきたものである。

だからやわな企業樹形ではない。

先人が戦禍の跡から苦闘のすえに育てあげてきた基本樹形である「日本型マネジメント」を、まるごと伐採してしまうような軽率な改革は避けなければならぬ。

と云って頑なに固定的に捉えることではないだろう。

時流である「経済のグローバル化・途上国化」には、製品化・IT化も含めて若年層で対応してきたのは選択として正しい。が、問題はいま潮流として迎えている「高齢化」に、企業がどう対処するかにある。

高齢社会が必要とし、高齢期のみんなが必要とする自社製品を提供する。それを成功させることが、新たな時代に「日本型マネジメント」を活かし作り直すプロセスとなる。当然のこと、「現役長生」型の高齢社員と「社友」が協力して対応するよりほかにない。

日米の違いは、アメリカはなお若年・中年が中心の社会であるが、日本社会は経済のグローバル化とともに高齢化をも合わせ迎えている。

その変容に企業システムをどう対応させていくかに苦慮している時に、「日本型企业」を全否定する意見が先行するのは困ったことだ。

## 伝家の宝刀は社員・社友の「和の来歴」

\*「日本型マネジメント」の新企業樹形

ここでもう一度みなさんと確認しておきたいのは、優れた生活感性を持っているハイエイジ層の生活者として、アジアの人びととの共生（豊かさの共有）である「グローバル化」で足並みをそろえるとはいっても、長い人生のすべてを途上国製品に埋もれて暮らすなどということは、決してあってはいけないということである。

そこまで待つて足並みをそろえるのは待ちすぎ。

アジアの人びととの豊かさの共有は、アジア唯一の先行国としてしっかりと進めながら、たいせつなのはこれもまた国際的に先行している「高齢化」の課題に同時に先行して対処することにある。

これは直接には企業の側に向かっていくべきだが、ここではリストラの現場に立ち会って退職した社友のみなさんと、定年で引退まじかの高年社員のみなさんに語りかけている。

途上国主導の「グローバル化」の動きに対しては「時流」対応として、企業がサバイバル（生き残り）をかけて海外に出ること、社内ではアルバイトや派遣社員を受け入れてリストラをおこなったことは体験されてきたとおりである。

そして底流している「潮流」としての「高齢化」については、同じ企業が同時に高齢者の生活を充足させるためのモノやしくみの創出まで実現することはむずかしかった。だから遅延させざるをえなかったことへの納得もある。

この時流と潮流の双方への対応が企業のサバイバルの本流であることも分かっている。

若者や女性とともに、華やかさを押さえていぶし銀のように輝いている高齢社員の姿をみるとはななかった。企業のリストラは、本来は温存すべき高齢社員にむけられて、給料を削られ、定年は六五歳の年金受給まで延ばされたものの、肝心の心躍るしごとがなかった。

この一〇年余り、そういう生活を強いられた高齢社員が、定年後に「余生」の意識で内向的になるのはしかたがない。この中には「団塊の世代」の人びとが含まれている。

そのみなさんが主演者となる企業の「平成サバイバル」とは何か。

ここで還暦前後の高齢準備期や団塊の世代の六〇歳代の若手シニアに訴えることは、生活者として「現役長生」の意識に切り替えて、臆することなく優れた製品を企業に要請し、その成果を十分に享受する生活感性の高いユーザーでありつづけてほしいということである。

だれもが新たな「高齢化優良品」のユーザーとして暮らしを楽しむ側となること。それぞれの成熟期・円熟期の生活感性を満足させる完成度の高い製品を求めつづけること。

あなたの企業にとってもこれでいいのではないか。

内需型日本企業は、外国からうらやましがられていいほどに好都合な「終身雇用」と「年功

序列」という在来のしくみとともに、世界レベルの経験も知識も技術もある良質な高齢社員・社友をかかえているという歴史的優位性を持っている。

「日本社会」を礎として支えているのは「日本的風土」に根ざした「日本型企业」とその製品であり、いま輝いているグローバル化企業は、時流による外圧に対応する緊急処置としての業態であり、やがては「日本型企业の基本樹形」に回帰する「宿り木業態」なのである。

日本企業もまた、時流である「グローバル化」による苦境脱出のために、若者・女性・中堅社員の優遇とアルバイト、派遣社員の受け入れによって「第一次リストラ」をおこなった。

それをうまく通過したあと、今度はこれは世紀の潮流である「高齢化」に対応する。

わが社の「高齢化優良品」の創出をめざして、熟練高齢社員・社友を優遇する「第二次リストラ」をすすめることになる。

「第二次リストラ」の過程そのものが「新・終身雇用」や「新・年功序列」という愛社意識の新たな展開となる。ここでオールジャパン、オールエイジズに立ち向かう「社是」と「日本型マネジメント」の真髄がよみがえる。

伝統の愛社意識を醸成しながら逆転の「第二次リストラ」に立ち向かうには、なによりも「和の絆」によって培われた製品開発でのわが社の来歴を活かすことだ。

これこそが日本企業再生の「伝家の宝刀」なのである。

## その四 高齢期二五年の居場所づくり

### 一 「エイジング・イン・プレイス」での日々

#### 夜空に舞うホタルの光は

\* なつかしいものを想い出させる

夜空に舞うホタルの光は、過去に出会って見失ってしまった何かなつかしいものを想い起こさせる力を持っている。神戸総領事（ポルトガル）を辞したのち、徳島に住んだモラエスは、闇に弧を画いて飛ぶホタルの光に、先立ってしまったふたりの女性を実感した。

「おヨネだろうか、コハルだろうか」

モラエスは暗闇の中にその光跡を追う。

ホタルの飛翔は今はその姿が見えなくとも、どこかで生きつづけている何かへのリード・ライトなのだろう。

「ふるさと」を蘇らせるものは何かを探っていた人たちによって、ホタルは「♪水は清きふるさと」のシンボルとして全国各地で蘇った。「ほたるサミット」も開かれている。

ホタルは高齢期をおだやかに暮らす居場所を探るこの章のリード・ライトでもある。

春になると、きまって蠢動（字づらも音もいい）していた小さな生きものたち。そのうちの何かの姿を見せなくなる。目の前で次々に失せていくのだが、季節に鈍感になった現代人は、そんな小さな「自然環境」の変化に気づこうとしない。自分の生と関わりがないと思っっている。しかし、おおいに関わりがあるとする人びとがいる。その人びとが抛るデータが「環境省レッドリスト」である。

平成二五年版によれば、日本で絶滅の恐れのあるものは一〇分類群三五九七種。そのなかに、なんとニホンウナギまで含まれた。

ウナギが絶滅？ かば焼きと肝吸いがなくなる？

ここまでできてやっどツキリ。

朱鷺・トキ *nipponia nippon* の絶滅（二〇〇三年、キングが最後）が騒がれたときには中国のトキによる佐渡での再生があり、その努力と成功は物語の世界であったが、ウナギとなるとわかには生活実感がわく。なんとかして自然ウナギの生育環境を保たなければと、食べながら店のおやじさんと話す。話は「自然環境」の回復にまで及ぶ。

ひとくちに「環境の回復」といっても意味がひろい。

三つの側面がある。

ヒト中心の利用が行きすぎて自然の再生力に乱れや崩れを生じさせた反省から「自然環境」の回復がいわれる。もうひとつ、生産を優先して消費現場を壊した反省から「生活環境」の回

復がいわゆる。循環型社会のための3R（リデュース、リユース、リサイクル）がこれ。そしてもうひとつの側面に「歴史・伝統環境」の再興がある。

「ふるさと再生」はいわれて久しい。

このラインの目立った活動としては、前世紀の末に近く、「ふるさと創生一億円事業」（竹下登内閣）として、全国の市町村が知恵をしばって試みた事業があった。いまでも記念のメニューが各地に残っているが、活動として継続している創生事業となるとどうか。あれだけ話題になりそれぞれ努力したのだから、多くはないが少なくはないはず。

いままた「地方創生」がいわゆる。

二〇一四年九月に安倍（晋三）内閣は、石破（茂）地方創生相を起用して、「ひと、まち、しごと創生本部」を発足させた。「人口急減・超高齢化」という大きな課題に対して、政府一体となつて取り組み、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生しようと呼びかけている。そのための三つの視点は、①若い世代の就労・結婚・子育てでの希望の実現、②「東京一極集中」の歯止め、③地域の特性に即した地域課題の解決だという。

まことに残念なことだが、担当大臣の石破氏の頭のなかに高齢者が参加する姿が見えていない。だから「石破天驚」（李賀の詩など）といった意外の成果を生じることもない。

三つの視点のうち実行者として若い世代だけを取り上げている。担当大臣として決定的な欠落は、高齢期に社会参加してすごしながら若い人の支え手となる高齢者の存在と役割を理解し



ていないこと。地域の課題の解決のための「知識・技術・資産」の「三本の矢」を保持している高齢者が、地域に多くいることに思い至らない構想力の欠如にある。地域特性を知っているのは高齢者のみなさんなのだから、若者と同時に出勤を要請すべきときなのであるが。

高齢期二五年をそこですごす居場所づくりや「ふるさと生活圏」の再興への意欲をもつ高齢者と、それを継承し新たに創生に加わる熱意をもつ若い人びとの両翼の働きがないと、地方はうまく飛び立てないのではないか。

### 「現風景」に「ふるさと原風景」を重ねる

\*Uターンする人びとの願い

終戦から七〇年が過ぎて、戦後生まれの人びとが「七十古希」に達する。

七〇歳をどこで迎えているか。その後をどうすごすか。

高度成長期に「ふるさと」を離れた人びと。都会に夢と人生を求めて出て、そのまま職に就いたり、大学で学んでから就職をし、都会暮らしをし、結婚をし、次世代を育ててきて、定年を迎えた人びと。

その中には定年後もそのまま都市郊外の団地に住んで、子どもを送り出して、高齢化する生活圏に夫婦で居つづけて、最後はひとり住まいになって、「都市浮遊型の人生」で終わる人も多

くいる。もうこの世では十分に働いたから、あとは勝手にさせてくれという「引退余生」型の人生を選択した人びと。日本の繁栄に貢献した功労者として見守ってあげたいそういう人びとについては別の章で取り上げたい。

ここでは「ふるさと」へ回帰して高齢期から終末期までを過ごす「エイジング・イン・プレイス」での成果を期待する人びとの高齢期人生について見てみたい。

しごとを終えて、あるいは終える前から、晩年を「ふるさと」にもどってすごそうと考えている人びとを「Uターン」型（族）、あるいはそういう「ふるさと帰巢」指向の人生を思う人びとを「Jターン」型（族）と呼んでいる。U・J型どちらの人にも「ふるさとの原風景」があつて、ときに静かに「ふるさと」（大正三年・一九一四年、一〇〇年前に作られた）を歌えば、うさぎやこぶな、なつかしい山や川は変わることなく眼の裏に浮かぶ。

「♪いかにいます父母・・」となると、父母はすでなく記憶の中の存在になっている人も多いだろうが、あるいは大正生まれの母上がひとりご健在でおられるかもしれない。

「ふるさとの現風景」は、とくにこの二〇年ほどのあいだに、地元が求めているものとはずいぶん違う姿になっている。

この間に「ふるさと」が失ってしまったものの多いことに気づく。

失ったものといえば——安心して歩ける小路。生垣。緑ゆたかな里山や鎮守の森。ヒバリやカエルの声。赤とんぼ。わら屋根の篤農家。商店街の活気。そして野外で遊ぶ子どもたちの歓

声や腰の曲がったお年寄りの笑顔・・もちろんまだまだあるが。

得たものといえば――舗装された真っ直ぐな道路。メカニックな騒音。コンビニ、スーパー、駐車場。ウサギ小屋どころかハチの巣マンション、コンクリート造りの新庁舎。マイカーとプレハブづくりのマイホーム・・もちろんまだまだあるが。

三〇年の不在の間の変容。丘の上から指図して地方を疲弊させたのは政治で、次の構想もなしに失政を指摘したのは政治家である。二〇四〇年までに八九六自治体がなくなるといふシヨツキングな可能性を指摘したのは、「日本創成会議」（座長・増田寛也元岩手県知事）である。「人口減少」がその主因だが、名指しで自治体がなくなるといわれた地域では戸惑いが隠せない。創成や創生より「創政」こそが真つ先の課題ではないか。

「人口減少」だけで地域の未来は測れない。暗い未来も意味しない。大都市の人生が浮遊して終わるのに対して、全国各地で高齢者が参加して、泉が湧き出るように形成される新しい生活空間は、「高齢期人生」の活動の舞台「エイジング・イン・プレイス」なのである。それは国や自治体からの要請で始まるものではない、個々人がみずからの人生のために始めるものである。ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、しゃれた家を建てて暮らす人もいるだろうが、戻って地元に残っていた仲間とともに「ふるさと再生」事業に加わる人もいる。こういう気構えを持ってＵターンする人の発想に可能性を見出す。

まだ現役のＣさんがそうだ。Ｃさん夫妻は戻って農業をやることを決めている。

「帰りなんいざ」の思いがある。

篤農家には耐えがたかった休耕田の時代も終わる。

「T P P」（環太平洋パートナーシップ協定）では、太平洋リングの海洋大国である日本に新たな構想を求めている。

### 「ニシキ族」より「キキョウ族」がほしい

＊子や孫も暮らせる「ふるさと創生住宅」

いま、ふるさとに「ニシキ」を飾って帰って、違和感のある家を見て、地域と融け合わない暮らしをするような人（＊地閉症）は期待されていない。「ふるさと生活圏」をともにつくる気構えで「キキョウ（帰郷）」する人が求められている時節なのだから。

Cさん夫妻は小・中学時代がいっしょの同郷である。ふるさとに終の棲家をつくるなら、高齢者専用ではなく、都会暮らしをしている子や孫が遊びに来てもすぐせるような、あるいは孫を呼び寄せて育てられるような二世帯用住宅にするつもり。

そして将来は子や孫が、父母が「エイジング・イン・プレイス」とした地に、「父母のふるさと」として戻って暮らせるような。

国土交通省住宅局（安心居住推進課）と厚労省が共管事業として都市内ですすめる「都市型

高齢者住宅」への税制上の優遇は、むしろ「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」でこそ活かしてほしいところである。「地域型高齢者住宅（ふるさと創生住宅）」は、とくに五〇歳代後半の高齢準備期・助走期のみなさん、Cさんのような人生選択をするUターン型の人びとへの支援として地域活性化の核になる。

と同時に、政府一体といいながら、二〇一五年から地方自治体と地域高齢者の協働の場がさまざまなに作動しようとしていることと「地域創生」事業の連携がとれていない。政策は二本立ての縦割りのままで地域の現場においてくる。その実態を当事者となる高齢者がよく理解していない。

「地域医療・介護推進法」が二〇一四年六月に成立した。

その内容が二〇一五年四月から実施に移されている。介護のほかには、子育て、認知症対策、障害者、生活保護、ニート対策などの実務が自治体に移されることになる。

見えているものはふたつだが、「まちづくり」の活動が、「国から地方へ」と移譲されると理解したほうがいい。活動の中心が「国ではなく住民と地方自治体にある」として国が認めざるをえない世論の動向があるからだ。

市町村合併のあと、どれほどの地域がどれほど元気であるかを知るためにおこなわれた調査がある。「地域再生に関する特別世論調査」（内閣府・二〇〇五年六月）がそれで、少し間をおいたデータだが、その後の状況はむしろ進展しているプロセスにある

合併協議は、ご記憶のように、「生活圏の広域化」や「少子高齢化」などを課題としたが、ひと段落したところで、どれほどの地域がどれほど元気であるかを内閣府が調べたところ、自分が住む地域に「元気がない」と感じる人（四四％）が、「元気がある」と感じる人（三八％）を上回っていた。「元気がない」と答えた人は、その理由として「子供や若者の減少」（五九％）、「中心街のにぎわいの薄れ」（五一％）、「地域産業の衰退」（三九％）などをあげている。このあたりはいまのみなさんの実感とそう遠くないだろう。

そして問題はここにある。

活動の中心となるのが国（一八％）ではなく、住民（四八％）と地方自治体（三八％）であることがはっきりしたこと。国の一八％というのは、もはや活動の中心が「国ではなく住民のみなさんと地方自治体です」と国がいわざるをえないほど低率だったのである。これも地域で暮らすみなさんにあまり知られていない。

増えつづける「支えられる高齢者」のための「地域包括支援センター」が充実すると同時に「支える側の高齢者」がその気で動かないでは充実などおぼつかない。

PPK（ピンピンコロリ）でないかぎり、高齢者はだれでも健常期のあと、介護期、医療期、入院期、終末期のプロセスを踏んで一生を終わる。ところが、これまでのように治療を病院の外来で受け、重篤になったら入院し病院で死ぬるといふ時代でなくなる。施設完結（病院）型から地域（自宅）完結型に替わるからだ。

「支える側」に在るうちに自主的な地域参加が要請される。実はこれらは「ふるさと回帰」をする人にとっては地域参加しやすい環境が整うことになる。それとともに「子ども・子育て」もまた両親と施設から、地域が助け合って次世代を育てようという政策転換を迎える。Ｕターンして「ふるさと」で暮らしながら、可愛い孫を預かっているなかで育てる。都市に残った若いふたりは、もう一人産むチャンスを得ることになる。

「子供や若者の減少」には「少子化」があり、「中心街のにぎわいの薄れ」には商品流通の変化がある。そして「地域産業の衰退」には大資本による系列化、グローバル化による生産拠点の海外移転といった事情がかかわっている。

そこで自治体は小ぶりでも特性を活かした地域産業を支援し、「子育て」を施策のNO・1にして、みんなが次世代が安心して育つ「しくみ」をこしらえる。子どもたちが集まってくるまち。孫たちを呼び寄せるまち。こんなまちなら人口は増えるだろう。

同じ「ふるさと」の同じ場所で高齢者は子どもたちと暮らし、情報源になる街の中心をつくり、地域産業を起こす原動力になればいい。「エイジング・イン・プレイス」として窓口は開かれている。都会から地域へという「ふるさと生活圏」への人の動きが、新たな地域を創生する原動力になる。地域問題は人口減少ではない。高齢者の実人生にかかわる住民としての選択の問題なのである。なんととっても住民の四人にひとりなのである。

## 「均衡ある国土」に重なる「特性ある地域」

\*横並びの均衡、横比べの特性

列車の座席でうとうとした後で、身を起こして、窓から外を見る。

「ん？ いま、どこさ走ってるん？」

流れ去っていく風景からでは、どこを走っているかの判別がつかない。

外国での話ならともかく、わが国の国内での話。利用した人ならだれもが経験していることのある新幹線なのである。次々に展開する田畑も家並みも、どこも同じような風景なのだ。

車窓からの風景の中に、「ここはR町 △△が特産」といった程度の看板くらいはあってもよさそうだが、地方特性（特産）がいつこうに立ち上がっていない。「地方の時代」といわれてもよいぶん経つというのに、とふつうにはそう思う。

しかし、これは見方の違いによるのであって、いずれの地も凸もさせず凹もさせずに、「富を等しく分かち合いながら、ともに豊かになる」という、先の大戦後にわが国の先人が選んで目標としてきた「日本的よき均等性」の成果なのである。

「豊かになれる者からなれ」とはせず、個人差や地域差をなくして、等しく成果を分かち合おうと務めてきた善意の人びとによる積年の成果なのだ。

その意味でなら、これまでも「地方の時代」だったといえる。



東京一極集中の風潮の中で、優れた人材を都市に提供しながら、地方に残った人びとは、「モノと場の平等な豊かさ」のために、たゆまず努力をしてきたのである。

みんなが等しく貧しかった時代、若者たちを大都市へ送り出し、地元に残って貧しさや不便さにも耐えながら辛苦した人びと。いまはその姿は遠く定かでないが、地元のために尽くした先人の努力を無視・軽視しては、現状の公平な豊かさに対する理解の公平さを欠くことになる。

合併前の旧市町村長室には歴代の首長の写真がかかっていた、だれもがよい顔をして並んでいた。合併後はどうなったのかはわからないが、それに励まされ力をもって現役的首長はしごとをしてきたにちがいない。

新幹線を利用しながらこう語るのは失礼になるが、

「善く行くものは轍迹なし」(『老子』から)

という先哲のことばに耳を傾けたい。すべての業績を周囲の人に振り分けて、みずからは轍の跡を残さず去っていった善意の人びとの姿を忘れ去るわけにはいかない。

等しく富を享受するために先人が選んで始まった「国土の均衡ある発展」という政策が、時を経て「横並びの安心感」による自立意識の欠如となり、推進力を失っている。ここでも成果主義といった個人の目先の競争誘因を取り込まねばならない転機を迎えようとしている。

地域の基盤があぶない。そこで、その危機感の表現として政府が掲げたのが、

「国土の均衡ある発展」から「地域の特性ある発展」へ

という「骨太の方針」だった。ここで注意すべきことは、「くからくへ」というのは「くを転換して」ではなく、「くを多重化して」と理解すること。

「特性」ある発展だからといって、「均衡」を一八〇度転換するのではなく、これまで国がリードしてきた「横並びの均等化」によって得た現況に、さらに地元の発想で「特性の多重化」をおこなって、地域の活力を呼び起こそうということである。

基盤としての「均衡」の上に「特性」を重ねる。そう理解しなければ先人が善意で積み重ねてきた「みんなが平等に」という営為をまるごと無視することになってしまう。

「地域に根ざした暮らしの知恵がどこの地方にもあるはずなのだが」

と思いつながら、新幹線の客は、どこかわからないまま車窓から目を戻す。前方の出入り口の上の小さな空間をニュースが流れ、「あと三分でN・・」というお知らせが流れた。

## 二 「新・地域ブランド品」で全国制覇

### 「地域特性」が息づくまちづくり

\*みんなでつくる「地域特産品」

貧しいときは貧しいなりに、豊かになれば豊かさをお互いに分け合う。

この「モノと場の横並びの平等」が、敗戦の惨禍あと、わが国の復興事業の基本となってきたことで、地方の人びとはどこにいても安心感をもって事業を支えてきたのだった。

その意味では国のしごとと携わってきた有能な官僚の半世紀にわたる事業分配の業績といえる。だから新幹線の窓から見ても凹凸が際立たないようなまちづくりが目標とされ、実現されてきた。「モノ」の配分における地方議員の平等主義のみごとな時代表現である。

そういう評価をしないで国が独占していると批判するのは、ここでも先人が善意で積み重ねてきた「みんなが平等に」という営為を無視することになってしまう。

その証として小さなR町でも、隣の大きなN市に劣らず、横並びの「基本課題」を共通して持っており、それを担当する課があり職員がいる。そしてこれまでの地元議員の主なしごとは、各地域に等しく予算と事業を配分することにあつた。

「国土の均衡ある発展」はこれからも基本として継続するのだから、自治体はせっかちに従来の部課係を解消するような単純な変更は避けなければならぬ。そんなことを急ぐと職員も住民も混乱してしまう。新旧ふたつの課題をうまくつないで対応する新たな課をつくり職員を配置することになる。従来の課係をなくすのではなく、重ねて新しい課題を担当する部署を構成することになる。

みなさんの自治体はいかがですか。

「地域の個性ある発展」へむかって、すでに活動しているのが、「まちづくり推進課」「子育て

支援課」「高齢社会対策課」「伝統産業育成課」などで、そのほかに二課を合わせた部課、たとえば「健康福祉課」（福祉優先の「福祉健康課」よりも健康への意識が進んでいる）、「産業観光課」「スポーツ生涯学習課」（知識と技術を単純にわけない）などが内容を調整しながら活動を推し進めている。

これまで地域に関係の薄かった人には、こういう新しい課の窓口をたずねてみることをおすすめしたい。気軽に参加できる地域活動に出合えるにちがいない。

「シルバー人材センター」（就労）や「地域包括支援センター」（健康）は、これまでも地域住民の健康、生活の安定、しごとづくりのための支援をする中核的機関として住民に知られて定期的に機能している。

民間団体である「社会福祉協議会」も官民協働の活動が多くなり、自治体と付かず離れずの関係を保ってきたから、自治体から天下りといわれて当然の人材が集まっている。二万法人あるそうだが、住民がどう関わるかで活動の成果に差が生じている。

新たに「地域特性」が息づくまちを創り出すには、まずみんなで手分けして地域の特性を掘り起こす作業がある。これまでの周辺地域との横並びの均衡ある発展を基盤としながら、その上に周辺地域にない「地域特性」を活かしたまちづくりをめざす活動が重ねられる。特性を掘出し、活かす事業がいま全国の自治体で競われている。

「特性のあるまちづくり」が内閣府の「中心市街地活性化」の基本計画である。地域から練り

上げてきたものだから、それぞれ競いあいながら着実に姿を現すに違いない。ここからもわがまちの生き残りの方途を得ることができる。

ほんの一部が見てみよう。

城下町では「街なか回遊」（彦根市）・「回廊」（会津若松市）、港町では「みなとみらい21・OLD&NEW」（横浜市）・「港町スクエア」（気仙沼市）・「海DO戦略」（下関市）、そして「まると博物館」（有田町）、「都市型高感度市街地」（宝塚市）・「体感スポット点在のまち」（久留米市）、「フアッション・ジュエリー都市」（甲府市）・「リ・ガラスのまち」（水俣市）、「こみせ・まちづくり」（黒石市）・「詩情公園都市」（小諸市）・「市（いち）の復権」（市原市）、「まちなかづくり」（臼杵市）・「へそのまちのへそづくり」（富良野町）・・・。

どこも街並みの整備、歩きやすい環境づくり、いこいの場の設置、観光資源や歴史資源の活用、イベントなどに特性を活かしたまちづくりが企図されている。地域再生の場に、地元高齢者の経験と知識を取り入れながら実施する事例に事欠かない。

先に富山市の「まちなかカート」を取り上げたが、「環境未来都市（平成一九年二月）構想に指定されている「コンパクトシティ」富山市は、またOECの「ケーススタディ都市」にも選定されている。「高齢者優遇」での展開が「歩いて暮らせるまちづくり」への成果として一歩進んで具体化されている。

## 全国版「地域ブランド品」を競いあう

\* 農業の「六次産業化」と「当地グルメ」

身近な実例としては、各地の「ご当地グルメ」がよく話題になる。

農業の「六次産業化」による「ご当地グルメ」や新製品は、競えば競うほど磨かれる。「全国ご当地グルメ祭」も開かれている。勝ち抜けば全国版の「地域ブランド品」となる。

環境に関する「エコ・ライフ」「スロー・ライフ」による活動や居場所づくり。「ホテルの里」や菜の花・レンゲ・コスモスといった「花の里」、「そばの里」「和紙の里」といった各種の地産品の里づくり。そして地元の焼き物・織物の再生。和太鼓・歌舞伎・踊りなどの伝統文化・芸能の復活。民俗・ことばの保存と伝承など「地域特性」を活かした活動の成果が、暗いニュースの多いなかに割って入って、明るいニュースとしてテレビで紹介されている。

廃線寸前だった「いすみ鉄道」がいまや人気路線になっているのは、他地域にはない、あるいは失ってしまった特徴を掘り起こした努力の成果であるといえよう。

全国版の「地域ブランド品」は、お中元やお歳暮の商品対象として、JP（日本郵便）のリストなどでもご存じのとおり。地域で生まれて国を代表する商品になった製品である。地域名のついた伝統製品は、地域の人びとの並み並みならぬ努力のたまものである。

全国版「地域ブランド品」のうち、みなさんにも親しいものの例を少しあげてみよう。

アイヌ民芸品、石狩鍋、松前漬、津軽塗、津軽こぎん、南部鉄器、三陸わかめ、鳴子こけし、仙台たんす、曲げわっぱ、秋田八丈、紅花染、米沢織物、会津漆器、相馬焼、喜多方ラーメン、笠間焼、結城つむぎ、益子焼、日光彫、鹿沼土、桐生銘仙、藤岡瓦、川口鋳物、草加煎餅、秩父銘仙、狭山茶、房州うちわ、黄八丈、鎌倉彫、小千谷紬、富山家庭菜、加賀友禅、九谷焼、輪島塗、越前竹人形、越前がに、山梨ワイン、信州そば、野沢菜、岐阜提灯、静岡茶、安倍川餅、瀬戸焼、伊勢海老、松阪牛、彦根仏壇、西陣織、京友禅、丹後ちりめん、清水焼、宇治茶、堺緞通、灘清酒、奈良漬、三輪そうめん、紀州みかん、鳥取梨、出雲石灯籠、備前焼、吉備団子、備後表、広島かき、萩焼、赤間硯、阿波鏡台、讃岐うどん、今治タオル、伊予柑、土佐鯉節、博多人形、久留米がすり、八女茶、有田焼、伊万里焼、長崎カステラ、球磨焼酎、豊後表、宮崎はにわ人形、薩摩揚げ、桜島大根、大島紬、芭蕉布、沖縄泡盛・・・。

まだまだあるが、地域特産のブランド保持のためには、常日ごろから地元の職人や企業のためゆまぬ努力があるが、なによりそれを支える多くの住民の力に負っている。

新たな特産品づくりがいま全国で展開されている。

どこのどんなものが全国征覇にむけて勝ちあがってくるか。

一人の傑出した技能をもつ人が案出して、みんな協力して展開することもあるだろう。しかし多くは「地域特性」を際立たせるみんなの地道な試行が、「地域の個性ある製品」化につながる。それらはまたシニア世代の暮らしに見合った「地域生活圏」エイジング・イン・プレイ

ス」達成への道に重なる。そのために高齢者の知識、技術を活かす現場はいくらでもある。初めは身近でこう考えることから始まる。

地域で暮らすの自分たちが一生のあいだ便利して使える生活用品を自分たちの力でつくり出す。そのために仲間を集める。さまざまな地産品がまちの品評会で競われて評判になる。さらにはわがまちの製品が道の駅や周辺地域で人気を得れば、それは「地域ブランド品」誕生のチャンスとなる。

優れたものは姉妹都市や友好都市を通じて、海外の高齢者にも受け入れられれば、MADE IN JAPAN の新たな輸出品になるに違いない。

### 三世代の意欲的企画の合流点

\*「三世代ふれあい館」なんていいね

世代交流について。

平成二六年度の内閣府主催「高齢社会フォーラム in 東京」（七月二九日）には、「多世代からみたシニアの意識改革」と「シニアと多世代がつながるために（ICTの活用）」という分科会が設けられた。これまでは高齢者による高齢者のためのフォーラムの感があったが、世代をつなぐことで、みんなが協力して形成する「長寿社会」への視点がうまれる。



こんなシニア像が指摘された。

「嫌われシニア」「愛されシニア」「孤独なシニア」「アクティブ・シニア」「プラチナ・シニア」「良いシニア」「困ったシニア」「悪ガキシニア」・・・。

嫌われシニアや困ったシニアは、差別する、空気が読めない、自分のことばかりいうなど。愛されシニアや良いシニアは、潔い、自他がわかる、甘えさせてくれる、など。

「プラチナ・シニア」は渋く輝いている。思いのほか「悪ガキシニア」の評判がいいのは意識しておいていいかもしれない。

これまでの世代間の出会いといえば、地縁組織である「老人クラブ」と「子ども会」との間での交流が知られる。「全老連」（全国老人クラブ連合会）がおこなってきた「地域を豊かにする活動」（旅行や将棋など）がそれで、「伝承活動」や「世代交流」は組織あげての活動の柱になっている。力をもつクラブは、地域文化や芸能・民芸や手工芸、郷土史などを子どもたちに伝承している。クラブの若手会員による独自の活動も見られる。

いずれにしても地域の子どもたちが当面している問題は、「老人クラブ」と「子ども会」との間では担いきれないほど山積しており、地域生活圏でもっと広い高齢者の活動が、次世代育成の事業として必要なものになっている。

大都市近郊での例としては、千葉県柏市では、柏市・東大高齢社会総合研究機構・UR都市機構との協働で、ここをベッドタウンとしてきた高齢世代が、優れた知識や技術を活かしてさ

さまざまな地域でのしごとづくりをしている。そのうちのひとつが海外勤務の多かった商社マンや技術者が子どもたちに生きた英語を教え、理科系の知識の伝授に一役かっているという。こういう世代間の課題別の出会いは、あらたな次世代育成の場をつくることになる。こういう活動は、都市近郊ではさまざまな分野で広く可能であろう。

「住民だれでもが（車イスでも）行動しやすい環境の整備では、「ユニバーサル・デザイン」に配慮したまちづくりとして、「バリアフリーのまちづくり活動事業」（厚労省）が各地で実現しているが、さらに重ねて高齢者がそれぞれの立場で暮らしを便利にし、お互いの活動を支援し合い、さまざまな課題を具体化していくことになる。

そのためには高齢者活動の団体と個人が物産、文化、余暇にわたって参加する「地域シニア会議」（地域支援協議会）が開かれることになる。さらに世代別の要望を実現するための「三世代会議」や、そのための常設の施設「三世代会館」が、将来はどこの自治体にも設置されて、遅速はあっても「まちづくり」の拠点として機能することになるだろう。

これまでの地域の青年館や公民館とともに、三世代が協力して活動する場として、すでに「三世代交流館」（大洲市）や「三世代ふれあい館」（土岐市）など「三世代会館」を称する先駆的活動もみられる。

三世代の代表者がそれぞれを代表して交流し、合議する場として運営できるようになれば、それぞれの立場をお互いに理解し支援しやすくなる。世代別のあるいは合同の集会や文化事業

の施設として有効に機能するだろう。

### 三 わがまち独自の「地域助け合い」

#### 「地域協議体」が活動の拠点に

＊自治体ごとに「生活支援コーディネーター」

地域で暮らす高齢者は、大きく三つに分類される。

地元の中学校を終えて、仲間が都会へ出て行ったあとも、ふるさとに残って地域の物産や伝統行事を守り、次世代を育ててきた人びと（Q字型）。

次がふるさとを離れて都会で活動したあと、高齢期から終末期をふたたびふるさとに戻って過ごす人びと（U字型）。

そして魅力のある町には、これまでに関係を持たなかった人びとも都会から高齢期を過ごすためにやってくる（J字型）。

こういうそれぞれに異なった能力と来歴を持つ人びとが、高齢期に地域で出会って、それぞれに蓄積してきた知識や技術や人脈や資産などを有効に活かすために集まって議論する。それぞれが高齢期を過ごす「エイジング・イン・プレイス」で、「地域特性」を活かして、みんなが

住みやすいまちにするために能力を提供しあう。

自治体はこうした人的資産を用いることで、みんなが住みよいまちづくりを進める。共生や共助がしやすい「しくみ」を速やかに提供できるかどうか。

ここは新地域支援活動で全国の自治体をまわって高齢者主導の「協議体(会)」の設立を説き、「共生の文化をつくろう」という提言をされている「さわやか福祉財団」の堀田力会長の発言に耳を傾けることにしよう。

「・・・共生の文化」というのは、簡単にいえば、定年退職をして家に籠っている。あるいは外へ出て行く場所は居酒屋程度。家族で旅行はするけれど、ご近所とのつきあいは一切なく、通りで顔をあわせれば目礼するだけ。こういう暮らし方は「恥ずかしい」とみんなが感じるような風習、それを「共生の文化」と呼びたいと思います。ここまで一生懸命働いて社会に尽くし家庭に尽くしてきて、定年退職したんだから何をしても自由ではないか、という考え方が多数、いまはそういう文化です。だけれども、人と交わり人の喜ぶことをしたほうがもっと良くなるわけではありませんか、そういうことを社会的な自由と考えられないでしょうか、という訴え方をしてきました。それをもう一步踏み出して、「恥ずかしい」と感じるところまで進めようというのが本日の提言であります。」(内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「あたたかく助け合う地域社会へ」、二〇一四年七月)

堀田さんの提言の背景になっているのは、最近の国の政策の動きで、高齢者の「医療・介護」

ばかりでなく、子ども・子育て、障害者、認知症、そして生活困窮者対策、といった対策が期せずして地域で支えていこうという方向、「国から地域へ」と動き出していることにある。

二〇一五年四月から各自治体にひとり、「生活支援コーディネーター」(地域助け合い推進員、有償)が置かれる。自治体は「地域医療と介護推進法」の実施にあたって「生活支援コーディネーター」を認定して、官民協働の活動を進めることにしているからだ。

その後、地域包括支援センターごとに(ここまでは有償)、さらにその後は地域の要望に応じて認定する(ここは無償)。

この「生活支援コーディネーター」と協力して活動を支える組織が「地域協議体(会)」で、この活動の巧拙・遅速によって、自治体間に差が生じるにちがいない。地域の高齢者をどこまで集約できるかによって、活動の広がりには差が生じるからだ。特性あるわがまちの発展は、新設の「生活支援コーディネーター」がもつ裁量と「地域協議体(会)」の結束力にかかっている。

高齢者の積極的参加なくしては高齢者への敬愛も尊厳も生まれない。

長い高齢期を過ごすことになる生活圏には、「生涯学習センター」や「地域大学校」があつて高齢期に必要な知識・技能を学び生涯の友人をえる。就労の「シルバー人材センター」があつて可能なしごとをえる。「地域包括支援センター」があつて介護を受けて医療を受けて、最後は施設完結型(病院など)ではなく、地域や自宅で穏やかに終末のときを迎える。

元気なうちは住民として地域活動に参加して、できるかぎりの支援をする。それはいずれの

日にか自分にもどってくる「共生支援」である。そんな活動を横目にして、いずれの日にか「介護・医療」のときだけはやっかいになるうというのでは、やはり「恥ずかしい人生」であろう。

### 「(仮) 地域シニア会議」がイニシアティブ

\* 近隣市町村との較差を表現

ここからは未見の情景であるが、本稿は避けては通れない。

地域に住む高齢者が「共生・共助」の証として、自由に、自在に、自発的に集まってくる。そういう「しくみ」を本稿は「地域シニア会議」（愛称は「ぢぢさばばさの会」と呼んでいる。もちろんすでにそういう活動をしているところもあるし、呼称も形態も自由であるが。

本稿のいう「地域シニア会議」の活動は、ボランティアとして自治体と関わるだけではなく、「モノやサービス」のナノコーポ（小規模高齢期起業）としての事業の開発、世代間の交流、各種セミナーの主催などが含まれるが、自治体からの要請には十分な対応が可能であろう。

遅延による団体とは別に、物産、文化、余暇といったテーマ別の活動団体・個人が参加する「地域シニア会議」は、当然のこと、会員である高齢者が力を合わせて、健康（認知症や終末期医療にも関心）についても、就労（新しい事業の展開）についても、生涯学習（地域の課題を学ぶ大学のカリキュラム）や趣味についても、あるいは孫育てや世代間交流についても、

多角的な活動の主体となる。

いうまでもないことだが、地域の持つ事情によって会議のメンバーは異なるが、想定されるのは、たとえばNPOのリーダー、さまざまな職種の元サラリーマン、元議員、元職員、名誉教授、芸術家（陶芸や園芸など）、農産家、医師、僧侶・ほか名誉町民もいる。その協議と活動が「地域特性」を活かしたまちづくりの拠点となる。

「地域シニア会議」と「地域支援協議会（体）」と「生活支援コーディネーター」の活動のようすを具体的に見てみよう。

メンバーには前項で指摘した三つの経歴の違う高齢者が参加する。地元在住の旧住民（Q字型知識人）と外部で培った経験や知識をもつ新住民（U・J型知識人）とである。

協議にあたっては、地縁組織の人びとは既存の権益を守るために排他的になってはいけなし、一方で故郷に戻ったり外から参入した人びとは地域の伝統やしぐみを軽視してこれまでの暮らし方を持ち込もうとするのはよくないことだ。お互いの持ち味を組み合わせた「地域シニア会議」が成立してはじめて、「地域特性」を活かすまちづくりへの拠点ができることになる。「協議体（会）」に合流し、まとめ役が「生活支援コーディネーター」に出ることも想定される。社会福祉協議会のメンバーも会員だから、その代表が推されて出ることもあるだろう。地域の総力をあげたこの寄り合いの巧拙が、近隣の市町村との決定的な地域差を産む。

「地域シニア会議」は同時に、まちの将来を担う子どもたちの「青少年期のステージ（居場所）」

とこれまでの地域活動の中心である中年世代のための「中年期のステージ（居場所）」とをよく観察した上で、これまでになかった新たな「高年期のステージ（居場所）」をこしらえる。三者がバランスよく多重化して機能するまちの態様をつくりあげることになる。

この「地域の三つのステージ（居場所）」の創出が、「長寿社会」に即応するしくみであり、そのために三世代それぞれが推挙したメンバーによる「三世代会議」を成立させることで推進する。高齢者のイニシアティブによってつくるこの新たなしくみは、地域の総体を表現したオールエイジズのものであり、地域の特性を作り上げる基盤となるだろう。

青少年⇨成長期、中年⇨成熟期、高年⇨円熟期の代表による「三世代会議」の「高齢者部門」が「地域シニア会議」ということになる。この「三世代会議」をリードするのは、高齢者代表でもある「生活支援コーディネーター」である。これがこれまで活動してきた「老人クラブ」「婦人会」「社会福祉協議会」「地域包括支援センター」「シルバー人材センター」「生涯学習センター」「地域文化団体協議会」などと人脈が重なりながら、新たな人材と課題を巻き込んだ「特性あるまちづくり事業」の包括拠点となる。

ここまでたどりついたとき、はじめて官制の「生活支援コーディネーター」を支える力をもつ民間の「地域支援」のしくみが見えて、ここから新次元の地域の歴史をつくる活動がはじまる。「三世代会議」の運営は、それぞれの世代から推挙された代表者が当たる。



## 自治能力が持続可能性を証明

\* 新時代の地域社会を実現する

先見的でやや粗略な情景であるが、いま少しつづけたい。

月ぎめで、公開でおこなわれる「地域シニア会議」は、地域住民の仔細な要望をしつかり聞きとる場である。たとえば高齢者の日用品の購入から、医院・病院への通院、図書館など公共施設の利用法、散歩道の整備、地産品情報、四季の伝統行事・風習、人物紹介、次世代との交流など、共通した課題から個別の要請までいろいろである。

公開だから爆笑と拍手と思わぬ展開の議論のうちに会議は進行する。地域の課題を具体的に取り上げて確認し、分科会を設け、その解決までを実行するのが役割である。

一般的には中学校区で二〇〇三〇人ほどが呼びかけ人（幹事）になり、幹事会を構成する。課題ごとに幹事のもとに七〇九人といった分科会を構成する。「わがまちのベスト・ナイン」がいい。そこでの他地域と異なる内容の検討と実現が将来の「地域特性のあるまち」をつくる契機となる。

何より「地域の本流（地域民主主義）」をつくりだす潮目の時期だから、ありきたりの発想や表現力ではこの難題を乗り切れない。とくに公開の「地域シニア会議」では、未整理なナマの意見を的確に整理したり、多様な意見を調整したり、党派的な利害を排して中立を保ったり、

民主的な進行のなかで即座に公平な判断ができ、柔軟な表現力のある人の司会が求められる。「地域シニア会議」が中心になって「三世代会議」を呼びかける。「三世代会議」が討議を重ねて作りあげた「地域特性を持つまちづくり」（ふるさと創生二一構想）は、住民をも自治体をも県をも国をも納得させるレベルで、「地方主権」「平和擁護」「民主主義」を具体的に担保する自治能力の表現となるにちがいない。

これこそが戦後に「与えられた民主主義」を基礎として、半世紀をかけて「みずから創った民主主義」の成立を証すことになる。国を守る国民意識の醸成も自治体の保持も「地域からの本流」としてここから始まる。ここからしか始まらない。そしてこの国の民衆にはいまそれを成し遂げる民力が蓄積されている。

「地域シニア会議」は、住民の意向を集約しながら、地域の高齢者や子どもたち、そしてみんなが暮らしやすい生活環境「長寿社会」を具体的に検討していく。これまでの医療、介護、福祉はもちろん、環境や物産や伝統行事や高齢人材養成といったテーマについても取り上げる。

地方議会は今ままでどおり「均衡あるまちの発展」を担い、「地域シニア会議」や「三世代会議」が「特性あるまちの発展」に寄与することになる。「人生九〇年時代」を生きる高齢者が、新次元の地域社会を後代に残す「歴史的なしごと」を仕上げることになる。

ここまでは未見の情景である。本稿はひとつの仮想空間を提案することで通過した。先見粗略な情景であるが、遠からず着実に実態が追い越していくだろう。

## 四 仲間十たまり場十まちづくり

### 明治・昭和「大合併」では人材養成

\*「村立尋常小学校」と「町立新制中学校」

「人づくり」は市町村合併の重要な課題だった。

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、それぞれに新しい自治体が地域発展のための人材養成（教育）を重要な目標の一つとしたことに改めて注目したい。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボルとされた。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成した。その夢はいっしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていったが。三〇〇〜五〇〇戸の規模で教育、戸籍、徴税、土木、救済などが課題だった。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが町の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされた。子どもたちは町立中学校を卒業すると、多くは都会へ出て行って高度成長の担い手となった。八〇〇〇人規模で、新制中学、消防、保健衛生などが共通した課題だった。

さて二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」では、新しい自治体は将来の地域を担う

人材を育成するために、何をシンボルとしたらだろうか。

今回、国（文科省）は、「少子・高齢化」への対応として、これまでの生涯学習のほかには明確な指針を示さなかったのである。

課題がなかったわけではない。

明治の「村立尋常小学校」、昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、「市立の高等教育機関」であり、それは合併協議の「少子・高齢化」に見合う対策である意味からいって、長寿をえた高齢者が対象の教育機関となるべきものであった。

「市立高年大学校」といった態様のものが想定された。すでに各県・各市には六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高齢者大学校・シニアカレッジなど名称は多様）が開設されていて、高齢人材教育の成果をあげており、本来なら合併協議の場で、文科省が地域自治体の主導において地域発展のために設置を検討するよう指示すべきだったのである。

本稿の使い分けからすると、生涯学習は年齢にかかわりがない「長寿社会」のためであり、「市立高年大学校」は高齢化時代の「地域高齢社会」のための教育機関と想定された。

まことに残念だったのは、平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことである。そして文科省にそういう高齢人材養成を推進する機関を新設する強い意向がなかったことである。

## 市立（公立）「高年大学校」の設置

\* 地域が求める高齢人材を養成

平成の市町村合併の時に検討すべきだった人材養成についてさらに記しておきたい。もちろんこれからでも遅くはない。

合併の課題のひとつに人材養成があつて、前説したが、明治の合併のときには村立尋常小学校が、昭和の合併のときには町立新制中学校が設立されて、新しい自治体を支える人材の養成に当たつた。平成の合併では市立（公立）大学校が想定された。その修学者は、若者ではない。

六〇歳以上の高齢者で、これから二〇年以上に及ぶ高齢期を地域で安心してすごすための知識や地産品づくりの技術を学ぶとともに、生涯をともしする仲間を得るための機会とする高齢人材養成機関である。地域で健康に高齢期を過ごし、その能力をみずからの人生の充実と地域の発展のために活用する高齢人材の養成が必要なのである。

地域にはすでに医療・介護・福祉の「地域包括支援センター」があり、就労の「シルバー人材センター」がある。それとともに、「地域生活圏」を支える新たな高齢人材を養成する「地域シニア人材養成センター」が構想されて、その中核になるのが「市立（公立）高年大学校」ということになる。中学校区規模で希望者全員の修学を目標にして、自治体が運営する。

「平成の大合併」時の重要な検討課題であつた人材養成として、文科省内での議論があつたこ

とは想定されるが、合併時にその提案はなく、その後省内に担当する部局もつくらずに過ぎた。これは厚労省と合議して「日本高齢社会」形成へむけた高齢人材養成機関として文科省の管轄とすべき緊急かつ必須の課題としてあるのである。

幼児期保育・教育とともに、新たな「長寿社会」に対応する高齢人材養成の教育機関が、厚労省と文科省の共管によって検討され、それぞれの自治体の主導によって特徴のある内容をもつ「大学校」の新設が進められる。

ここでもまた政治リーダーは、一〇年の遅延を認めた上で、なお高齢化が進行するわが国の「人生九〇年」社会の課題として、政府一体での検討と取り組みが必要だろう。

「人生六五年」から「人生九〇年」時代への意識変革を促し、高齢者に社会参加を訴えているのは、ほかならぬ内閣府の「高齢社会対策大綱」（二〇一二年九月改定）である。

高齢者が、六五歳からの長い「成熟期・円熟期の人生」を送るに当たって、就業、健康づくり、社会参加、生活環境、世代交流といった分野の知識や技術をえ、生涯にわたる友人をえて、お互いの人生を豊かに過ごすことは、自治体を活性化する必須の条件なのである。

合併の結果、往年の特性や精気を失っている地域にとって、「市立（公立）高年大学校」（中学校区）の修学生と卒業生の活気ある取り組みが地域社会の活性化に与える影響は測りしれないものがある。

## 生涯の友と地域カリキュラムを学ぶ

\*まちづくりには知識・技術を活かす

多くの県が「教育立県」を宣言しているのは、何よりも地元で暮らして地元を豊かにする人材の育成に力を入れているからであろう。

すでに全国各地で成果をあげている「地域高齢者大学校」（生涯大学校、シニア・カレッジほか名称はさまざま）は、地域活性化を担う人材を養成するために、それぞれに地域性を加味したカリキュラムを構成している。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者。これまでの経験に重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の同学を得る。熱中できるテーマがあり、その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるために「地域カリキュラム」は重要な要素である。

ここで実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を見てみよう。

全国に先駆けて一九六九年に開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格。週一回の講義で、学科は園芸、健康づくり、文化、陶芸の四つ。

クラブ活動には高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどがある。

より専門性をもつリーダー養成の大学院も設置。

注意すべきは、一九九九年の「国際高齢者年」に「いなみ野宣言」を出していることである。

学科の設定でもクラブ活動でも、高齢者が個人的に夢中になれる教科であることが重要な要素になっている。

全国の「地域高齢者大学校」は名称もいろいろ。

沖縄県は「かりゆし長寿大学校」(一年制)、島根県は「シマネスクくにびき学園」(二年制)、  
檀原市は「まほろば大学校」(二年制)といった地域性に特徴がある。

全国各地で各様の構想で実施されており、東京の世田谷区生涯大学シニア・カレッジ(二年制)、江戸川区総合人生大学(二年制)、成田市生涯大学院(三年制)などではそれぞれに独自の学科とカリキュラムで模索を重ねながら、個人的な能力の開発、地域社会が必要とする多様な能力の養成などの目標を掲げて活動している。

ほかにも栃木県シルバー大学校(二年制)、千葉県生涯大学校(二年制)、鳥取県ことぶき学園(一年制)、長崎県すこやか長寿大学校(二年制)、明石市あかねが丘学園(三年制)、明石市好古学園大学校(四年制)など、それぞれの特徴を活かして開校している。

自治体主導で官民協働の特徴のある「市立高年大学校」(複数中学校区)の全国展開が、地域創生のために急がれる時期にある。



## 地方大学は「多重活用」が生き残り策

\*子は昼に親は夜に同学の談論風発

地方の公立大学は「均衡ある国土の発展」のために、全国どこも共通の同じようなカリキュラムを組んできたために地域の特徴を活かすことができなかった。

だが国の政策が「個性ある地域の発展」へと転回して、地方大学は独自の地域性を取り入れた講座によって変容するチャンスを迎えている。地域経済、地場産業、地方文化・言語・歴史、伝統工芸などといった「地域関連講座」が並ぶことになる。

主な受講者はここを「エイジング・イン・プレイス」と定めて。人生の第三期をすごすことになる高齢者である。

地方大学が地域の特性を採り入れた課程を強化しているのは、時代に即応した生き残りの手法でもあるからだ。

早い例では、東京経済大学では二〇〇七年四月からシニア対象の大学院を開講した。立教大学でも開講。早稲田大学は学外キャンパスで開講している。埼玉大学は「充実した第二の人生を埼玉で」ということで夜間コースをシニアに開放した。

地域の特徴のあるカリキュラムをつくって、地元にもどって高齢期を迎えようとする人びと、高齢期を迎えて新しい知識を求める地域住民の要請に応じて開設するのが、地方大学の「シニ

ア学部・シニア大学院」である。

人気テーマには全国から高齢者が修学にやってくる。

長期滞在し、そのまま定住者あるいは永住者になるかもしれない。地域創生にかかわる物産情報・地方文化といった講座は人気になるだろうし、大学は高齢者人材の養成と集積、発信拠点としての機能をはたすことになる。

同じ時期、同じキャンパスで、オヤジやオフクロは夜間の「シニア学部」で人生第三期のための知識を学び、情報を得、生涯の友人と出会う。そしてムスコやムスメは昼間の大学課程で、人生第二期の社会参加ための基礎知識、専門知識を学び、活動期の友人を得る。

これが地方大学の「多重活用」である。

六〇歳をすぎて、長い高齢期を視野に入れた「カリキュラム」でスキル・アップして、前職の経験を合わせて「人生の第三期」をめざすオヤジやオフクロや先輩たち。その意欲的な姿が、同じキャンパスでグータラにすごしていた現役学生に与える影響が大いに期待される。

「大学多重活用」のメリットはもうひとつ。

「シニア学部」には六〇歳をすぎたお知識欲の旺盛な人びとが学びにくるわけだから、名誉教授や「シニア教授」のスキル・ブラッシュ、つまり専門知識のさび止めにも大いに役立つことになる。

## その五 「人生の達人」としての八面玲瓏

一 まあ、いいか、でいいのか

パソコンで「八面玲瓏」と書こうとしたら

\*「れいろう」でなんと「冷老」と出た

深夜に、愛用のパソコンを前にして、「八面玲瓏」と書こうとした。

無理かなとは思いつながら「れいろう」と打ったら、なんと「冷老」と出た。

眠気覚ましにはいささかサービス過剰な応答である。

パソコンの辞書からは学ぶところも多少はあるが、気ままな応答には多々困らせられる。

「玲瓏」くらい一発で出なくては辞書として失格、「冷老」とは失礼ではないか。

「だれに対しても曇りなく応対できて、処世が円滑である境地を示す」

とあるのは、さすがにペーパーの辞書。

「玲瓏」は棋士の羽生（善治。永世名人）さんが好んで揮毫するそうだが、盤上の争いとはいえ、真剣勝負を前にしての心境だって示せる、含みの大きいことばなのである。

夜も三更（これも一発では出ない。夜五更のうちのまんなか、午前さまのころ）にいたって、

思い立って日録に「八面玲瓏」と書こうとしたわけは、ひとりの「人間」として、ひとりの「親」として、ひとりの「働き手」として、また、ひとりの「住民」として、ひとりの「市民」として、ひとりの「国民」として、ひとりの「国際人」として、そして、ひとりの「現代人」として、八面から自省して、だれに対しても曇りなく応対したいと願ったからである。

そんな心境になるのは、棋士なら「名人戦」などに向かうときだろう。

棋道の達人である羽生永世名人なら、盤の向こうに対面するのは、いづれ劣らぬ好敵手であろうが、願って「人生の達人」をめざそうといういま、盤の向こうにいるのは、他でもないもうひとりの自分である。

もちろん先手はこちらにある。

「おまえが達人に？ 丈人までは納得できたが・・・」

そう口撃の先手を打たれて、初手から「挙棋不定」となる。コマを手にとって挙げたもの、さて、打つ心が定まらない。打たなければ先へ進まない。

「まあ、いいか」

そこで定石中の定石である2六歩にそのままコマを置く。

国民の一人ひとりに対して、これまでの「人生六五年」の意識を改めて、「人生九〇年」に向かって社会を変えながらすごしてほしいという要請（懇請に近い）を出したのは、先にも記したように、内閣府である。

そこからひとりの「国民」として、どう対応すべきかと考えているうちに、前記の心境に達したのである。

新世紀になってこの一〇年余り、国からそんな苦渋に満ちた指摘や要請が高齢者にあつたこととはなかった。だから不安に感じながらも、六五歳から支給される「年金」を頼りに長い余生を生きることに切迫感はなかったのである。

このたびの要請は、「人生九〇年」への「高齢者意識」の成熟と、就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場の活性化、全世代の参画といった分野への「社会参加」である。

### 「人生九〇年」のステージを迎えたのに

\*意識はまだ未熟か半熟のまま

「高齢者意識」については、多くの国民は、定年が延びて年金が支給される「六五歳から」と意識することはあつても、「人生九〇年」までを考えることはなかった。

だから「人生六五年」から「人生九〇年」へという「高齢者意識」の成熟は、未熟でありせいぜいが半熟のままなのである。

これまで生涯現役型の暮らし方をしてきた人なら、  
「やっとなたか」

で、そのまま受け入れられるだろうが、「人生六五年」での「引退余生」を意識して、けっこう長かった現役時代のトップギアからミドルあるいはロウにまでギア・チェンジしてしまった人びとにとっては、「いまさら何を」の思いがあるだろう。

とはいえだれもが納得せざるをえないのは、高齢者（六五歳以上）が三三〇〇万人、二六％にまで達してなお増えつづける社会では、一人ひとりの高齢者の二〇年を越える「余生」に、介護と医療を提供しつづける社会では、一人ひとりの高齢者の二〇年を越える「余生」に、周辺を見、総体を考えれば、だれもが納得せざるをえない辛い将来の情景である。

そこで「自分だけはなんとか」と考える。

そのとき、そこから格差を認める思考過程に入ることになり、「温かな助け合い」から抜け落ちることになるのに気づいているかどうか。

かつて大正七年に芥川龍之介が『赤い鳥』創刊号に書いた「蜘蛛の糸」の主人公、一筋のクモの糸にすぎる犍陀多が思い出される。天国と地獄という格差の途中で、天国への糸にすぎなくて「自分だけは」と考えたことで犍陀多は、助かることなく地獄に落ちていった。その後、芥川を襲った「唯ぼんやりした不安」については、ここは論ずるところでないが。

といって、すべての高齢者が九〇歳まで生きられるわけではなく、願っても女性で半分、男性は五人にひとりであることを考慮すれば、何がなんでも「九〇歳・現役長生」型人生を前提にしてすべての人がというのは酷な話ということになる。

と行って、みんながみんな「六五歳・引退余生」型人生を送りながら、「自分だけは」という思いにさせられるのも罪な話。

酷でもなく罪でもない穏当な話にならないのかということである。

どうすればいいのか。

ここは盤を挟んでの内輪の話であるが。

・「人生六五年」時代の「引退余生」をできる人は先に延ばしたらどうだろう。平均年齢である男性は「人生八〇年」からを、女性は「人生八五年」からを「引退余生」と捉えなおすとか。それまでを「現役長生」とするなら納得する人も多くいるだろう。

少なくとも「フレイル状態」（筋肉が衰えて活力に自在性が失われる段階）を自覚し、「有訴」（症状が元にもどらない）となり、「介護」を受けざるを得ない加齢プロセスを思えば、「フレイル」以前は「現役長生」でいけるのではないか。・

盤を挟んでの沈黙考がつづく。

社会に対して自閉的な症候を「自閉症」というが、「地方創生」や「新地域支援構想」のこの時期に、「社会人」として自閉的なことを、巷では「\*地閉症」というようだが。

いま「地域デビュー」することはむしろかきいことではない。現役時代からの「\*地閉的暮らし」をそのままつづけることのほうが恥ずかしいと思えるが。

もうひとつ、「人生の達人」について。

・「八面玲瓏」に心がけて、「現役長生」の立場で、生涯にわたって実直に「自己目標の達成を追いつづける人」の意でいいだろうか。

いいのではないか。「達」について、孔子は「実直」にだれの人生も有意義であることを思い、ことばやふるまいをよく「観察」し、「配慮」して下につくことだといっている（『論語「顔淵一二』』）。ここでは、目標は未達成でも、それを生涯めざしながら、だれとも等しく接することができる人を「達人」と呼ぶ。その姿が「達人」なのだから。

それなら特定の有名人だけではなく、だれもが「達人」になれる・・・。

将棋盤をはさんで、そんな会話を交わし、地域や職域や趣味・娯楽域での活動にどう参加したらいいかの良策を練り、歩をすすめる自分がいる。

### 高齢者はすべて「社会の被扶養者」として

＊みんなで渡った「霞が関の赤信号」

わが国は一九九五年に「高齢社会対策基本法」を制定して高齢社会対策のスタートをきったのだが、それから二〇年、どうして対策に遅延を起こすことになったのか。

新世紀を迎えたころ、国際的な潮流である「高齢化」について、政治リーダーは高齢有識者ととともに衆議して、高齢者意識の醸成と就業、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、



市場の活性化、全世代の参画といった分野ごとになすべき活動を、「日本高齢社会グランドデザイン」として掲げて、高齢者に呼びかけることをしなかったのだろうか。

二〇〇一年、五年ぶりに見直された「高齢社会対策大綱」が閣議決定されたが、これは政府がすすめるべき対策であり、高齢者に参加を訴える指針ではなかったからである。

新世紀の「高齢化」は国際的潮流であり、それを前にして、わが国でも「高齢化」に関する次のような事業活動が立てつづけにおこなわれている。

\*\*\*\*\*

一九九五年には「高齢社会対策基本法」を制定（村山富市内閣）

一九九六年には「高齢社会対策大綱」を閣議決定（橋本龍太郎内閣）

一九九九年には国連の「国際高齢者年」の記念事業（小渕恵三内閣）を全国的に展開

二〇〇一年には「高齢社会対策大綱」を見直し（小泉純一郎内閣）

二〇〇二年にはスペインのマドリードで第二回「高齢化に関する世界会議」。このスペインのマドリードでの第二回世界会議には、わが国からも代表が参加した。

\*\*\*\*\*

この重要な時期に、当時の首相は「所信表明演説」（二〇〇一・五・七）で何といったか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、

「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」

と言いつつありさま。

それが間違っているというわけではない。が、否定発言では構想にならないし、対策が「高齢者」であり、「高齢社会」でなかったことに問題がある。シーリングがかかった予算折衝に当たって、焦眉の急が「介護・医療・年金」だったことは確か。そこで、

「元気ならみずから生きよ」

となった。内部議論はあったと推察されるが、収斂したベクトルは「無策」であった。

「給付は厚く、負担は軽くだけは、何としても保っていきたい」と訴えて、将来の財政難を説きつつ、増えつづける高齢者層に、「自助と自律」の意識の醸成とともに、高齢者が暮らしやすい社会の創出への参加を求めるのが政治リーダーの構想力だったのでなかったか。

首相の「所信表明演説」を聞いて、天を仰いで慨嘆した学者や官僚や高齢社会活動家や高齢者がいたはずである。わたしもその一人であった。

このままだと、これは記したくないのだが、

「年老いて負担がかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」

なんてことにならざるをえないのではないかと思われた。来たるべき国際的な「高齢化時代」を展望する時、先行高齢化国の日本として、その経緯はあまりにつらすぎる。

新世紀のはじめ、先の「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相である。

いま「原発の全面禁止」を訴えておられるが、「高齢社会対策」の延滞をつくった政治リーダーを代表して将来展望を論じて国民に参加を求めなかった過ちを君子豹変して弁明してほしいものである。今世紀はじめに、政界の「世代交代」の突風にあおられながら、みんなを誘導して「霞が関の赤信号」を渡ったのは、優れた厚生大臣でもあった小泉首相だったのだから。

アベノミクスからは実人生で何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、高齢者が、「この国の将来の姿はもう見たくない。子どもたちに少しでも遺産を残せるうちに死にたい」とつぶやき、エンディング・ノートを書くような国をだれが望んだらう。

今世紀のはじめ、まだ先輩が残してくれた資産（隠し資産も）があったころ、政治リーダーは、一〇年後、二〇年後の「高齢社会」の姿を構想できなかったのである。「多岐亡羊」といべきか、さがすべき羊がないほうの路へ迷い込んでしまったのである。それ以後の歴代内閣はなお迷路のうちをさまよっている。

「高齢者は社会の被扶養者である」

と位置づけて、その上での「医療・介護・福祉・年金」の施策では国際的評価を得たし、平均寿命や健康寿命では世界一となっている。これら「高齢者対策」は率直に世界に誇るべきことなのである。

しかし、そのとき政治リーダーは同時に「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議したか。先の小渕内閣での「消費税」のとき、「社会保障」のための完全目的税にするために、当時の

宮澤（喜一）蔵相を説いて認めさせた藤井（裕久）さんは、

「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」

ともらしてくれた。

担当する官僚にそういう動きがまったくなかったわけではないだろう。

二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」改定を閣議決定しているのである。紙背まで読まなくとも、その記述の中に、優れた官僚と学者によってなすべき対策は埋めこまれている。政界が「世代交代」の大合唱の中にあっただとはいえ、政治リーダーが一年先の「高齢化」の状況に想像力が届かなかったといわれて弁解の余地はないだろう。

## ライトを浴びる「平和団塊」の人びと

\*「現役長生」型のニューフェースとして

ご存じのように、一九四五年の敗戦のあと一九四七〜四九年に生まれた約七〇〇万人の人びとを、やや失礼と知りつつ「団塊の世代」と呼んできた。一九七六年に作家の堺屋太一さんが『団塊の世代』を書いて、そのボリュームゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名である。

しかし本稿が用いている戦後っ子としての「平和団塊の世代」というのは、同じくいま二〇〇万人を越える一九五〇年と、終戦の翌年である一九四六年生まれのいま一四〇万人を加えて、

二一世紀を迎えた一〇三七万人（二〇〇〇年一〇月）、いま九七〇万人（二〇一五年四月）の戦後ツ子の人びとを指している。

「平和団塊の世代」は、生活感性の高い「現役長生」型高齢者のニューフェースである。産業人としては定年を機に、ギアをトップから下げたかもしれないが、生活者として消費者としてのポリウムもエネルギーも品格も変わらない。

時代の要請を受けて、「人生九〇年（六五十二年）時代」の第三期のステージにライトを浴びて立つ、若き高齢者「平和団塊」のみなさんの動向に本稿は注目している。敬意をもってその歴史的活動を見守っている。

ここでその主役になる「平和団塊」のみなさんの横顔をすこし紹介しておこう。

#### 一九四六（昭和二一）年生まれ。

仙谷由人（政治家） 鳳蘭（俳優） 松本健一（作家） 宇崎竜童（歌手） 美川憲一（歌手）  
北山修（歌手） 新藤宗幸（政治学） 柏木博（デザイン） 岡林信康（歌手） 堺正章（TVタレント） 坂東真理子（官僚） 田淵幸一（プロ野球） 菅直人（政治家） 秋山仁（数学教育） 藤森照信（建築史） 倍賞美津子（俳優）・・

#### 一九四七（昭和二二）年生まれ。

橋本大二郎（政治家） 衣笠祥雄（野球評論） ビートたけし（TVタレント） 星野仙一（プロ野球） 尾崎将司（プロゴルフ） 西郷輝彦（歌手） 鳩山由起夫（政治家） 津島佑子（作

家) 千昌夫(歌手) 上原まり(琵琶奏者) 荒俣宏(作家) 中原誠(将棋棋士) 小田  
 和正(歌手) 北方謙三(作家) 金井美恵子(作家) 西田敏行(俳優) 森進一(歌手)  
 池田理代子(漫画家) 布施明(歌手)・  
 一九四八(昭和二三)年生まれ。  
 高橋三千綱(作家) 輪島大士(大相撲) 毛利衛(宇宙飛行士) 里中満智子(漫画家) 赤  
 川次郎(作家) 五木ひろし(歌手) 赤松広隆(政治家) 江夏豊(プロ野球) 都倉俊一  
 (作曲家) 沢田研二(歌手) 上野千鶴子(女性学) 井上陽水(歌手) 鳩山邦夫(政治  
 家) 橋爪大三郎(社会学) 糸井重里(コピーライター) 由起さおり(歌手) 舛添要一  
 (都知事) 谷村新司(歌手) 内田光子(ピアニスト)・  
 一九四九(昭和二四)年生まれ。  
 村上春樹(作家) 鴨下一郎(政治家) 林望(国文学) 海江田万里(政治家) 高橋真梨  
 子(歌手) 平野博文(政治家) 武田鉄矢(歌手) 高橋伴明(映画監督) 萩尾望都(漫  
 画家) ガッツ石松(ボクシング) 矢沢栄吉(歌手) 佐藤陽子(バイオリニスト) 堀内  
 孝雄(歌手) 松崎しげる(歌手) 森田健作(政治家) テリー伊藤(演出家)・  
 一九五〇(昭和二五)年生まれ。  
 残間里江子(プロデューサー) 舘ひろし(俳優) 和田アキ子(歌手) 坂東玉三郎(歌舞  
 伎俳優) 東尾修(プロ野球) 中沢新一(宗教学者) 池上彰(ジャーナリスト) 姜尚中

(政治学者) 八代亜紀(歌手) 辺見マリ(俳優) 塩崎恭久(政治家) 梅沢富士男(俳優)  
優) 岩合光昭(写真家) 綾小路きみまろ(漫談家) 神田正輝(俳優)・

この約九七〇万人の一人ひとりを、敗戦後のきびしい生活環境の中で生み育てたご両親の思いを思い起こして、本稿は新世紀の国際平和を支える「平和団塊の世代」と呼んで注目してきた。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれも不満かもしれないが、あわせて「平和団塊の世代」と呼ぶのをお許しねがいたい。

先進諸国の同世代の人びととともに、この「平和団塊の世代」(戦後っ子)が、平和裏にみずから安心して後半生をすごせる社会を形成し、長寿を全うすることが、前世紀の戦争の惨禍と混乱の中で両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証にちがいないからである。

わが国の高齢者の一人ひとりが世紀をまたいで、人類の普遍の願いである長寿を体現している。こんな役回りは願っても求めても得られるものではない。「新しい人類史」をつくっているという実感を大事にしてほしい。

そして二一世紀半ばの二〇四七年、「日本国憲法」は制定一〇〇年を迎える。

平和に徹した高齢化先進国の日本が持ちこたった誇るべき「世界平和の証」となる。

そのとき一〇〇年保持しつづけて「百寿」で迎える平和憲法は、国際社会からスタンディング・オベーションを受けて歓迎されることになるだろう。

「日本国憲法一〇〇周年記念」祝典。

この世紀のドラマまで、あと三二年である。「平和団塊」のみなさんは、亡き先輩の願いを引き連れて、歴史の証人として参加するために、「人生一〇〇年」をめざして歩むことになる。

## 二 ひとりの住民・市民として

### 熟成期を共有する「地域シニア文化圏」

\*何十万という水玉模様が存在のかたち

本稿では「地域シニア文化圏」ということばを、強いグリップ力をもつ高齢期キーワードとして位置づけている。高齢者によって「家庭外の居場所」といつてもいい。

「シニア文化圏」というのは、「人間六五年」をすごして、それぞれに個性的にわが道の業績を積み上げてきた高齢者が、異なった成果を得た人びとと出会い、お互いに経験や業績を語り合い、高齢者同士でなければ味わい得ないレベルの理解を共有することを目途として集った「高齢期の文化拠点」といった程のところ。

少し排他的にいえば、「利」を望まずに、あるいは望んでも優先せず、「文を以って友と会す」（曾子のことば、『論語』から）といったところ。少し加えていえば、青少年や中年の存在を脇に置いて、「おとなが文化を語っておとなの文化を感じる場」といったほうが分かりやすい



かもしれない。

そう気づいていないだけで、すでにさまざまな形で存在しているから、とくに新しいことを言い出しているわけではない。ここではそれを高齢期を意識した視点から捉え直すことになる。「あ、これはシニア文化圏だ」と意識することで、高齢社会のなかにそれぞれに個別な特色をもって重なった水玉模様のような印象の存在として見えてくればいいのである。

語られる「シニア文化の内容」とはどういうものか。

「環境」とか「文化」というと、どうにでも広くも狭くもなるが、狭く考える必要はないだろう。学術的な領域から芸能・スポーツ、暮らしの知恵に至るまで、万般にわたってみんなが共有しているもつとも広い意味での「文化」のイメージでいい。少し限定するとすれば、六五歳を経た高齢期にある人が関心をもって考え、語り、感じとり、作り、表現した事象・事物を主に対象とする、ということぐらい。

二〇一二年三月に亡くなったが、同時代人として並みならぬ思索の根っこを持っていた吉本隆明さんのような人の、一九六〇年代の状況下で「ロゴス」（統一法則を内包することば）の混乱にまきこまれながら柔軟で示唆的であった『共同幻想論』などから、思索の根っこをそのまま曝した『老いの流儀』などの近作にいたるまでの作品を採り上げてみるのもおもしろい。

また『蓮如』を書いた五木寛之さんは、古代インドの「四住期」から想をえて人生のありようを説く『林住期』を書き、最近『新老人の思想』を書いた。井上靖さんの『孔子』や瀬戸

内寂聴さんの『釈迦』といった史上の人物についての作品は、作者の生き方と重ねて、さまざまな角度から語り合える素材となる。曾野綾子さんも『人間にとって成熟とは何か』で終末期への心がまえをていねいに説く。近くは画家の篠田桃紅さんの『一〇三歳になってわかったこと』が話題になった。こんな著作からみんなの経験と知識が飛び交えばいい。

文化圏の「圏」としての大きさは、どうだろう。

テーマや参加する人にもよるだろうが、「最小規模の多数」である七〇一人といったところが基本だろうか。私的な仲間の会としてみかける四、五人の会では、少ないために変則や異見といった「文化を生じる」要素を含み込みづらいが、時にゲストを呼んでみることで新たな「文化圏」になるだろう。

また多すぎると散漫になる。わかりやすい例としては、多くの会議や学会の総会そのものは高齢者が中心の「シニア文化圏」ではあるが、その後の「二次会」のほうを基本型と考えたらどうだろう。二次会なら五、七人でも談論風発、結論を出す必要もなく、話題はさまざまに移っていく。ひとつのテーマをめぐる場合もあるが、意見が二つに割れたり三つになったり、二つの話題が混ざって語られたり、また一つにもどったりする。その自在性の中に「最小規模の多数」による発見と味わいがある。

高齢者同士が自在に「文化を語って文化を生じる場」が「シニア文化圏」であり、高齢期の人生の成熟・円熟とともに実感しあえる愉快的な「高齢期の居場所」なのである。

高齢期になって親しくつきあえる人といえ、だれでも「学友」と「同僚」と「親族」の三点セットのうちに、幾人もの信頼する相手を持つているだろう。

しかし実はこの三点セットだけでは長い高齢期の人生を充足して送るには心もとないのである。心もとない理由は、どれも高齢期になって自らが選んだものではなく、与えられた環境下で得た人びとであり、外にむかって閉じた仲間だからだ。

高齢期に心躍る人生の充足を得るには、さらに地域や目標とする分野からあらたに加えて五つ七つの「シニア文化圏」での活動が、高齢期の人生に変化と厚みのある成果を刻んでいくことになる。「シニア文化圏」だからといって「青少年」や「中年者」を排することはない。中心になる構成メンバーが高齢者であり、中心テーマが高齢者が対象とするものということであって、とくに次の成員となる中年の人びとには開かれたものでいい。

ほどよい「シニア文化圏」の存在が、一人ひとりの「第三期ステージの人生」の充足と重なるであろうことは確かである。

### 多岐にわたる高齢者活動

\*リードする「昭和丈人層」の人たち

昭和生まれの高齢者層が、あるべき存在感を示していないわけではない。わが国の「高齢者

活動」は湧出期にあつて、その中心にいてリードしているのは、まぎれもない昭和生まれのみなさんなのだから。長い苦闘の経緯をもつ高齢者ケアとしての「介護」「医療」「福祉」の分野はもちろんのこと、高齢者活動は、実にさまざまな領域へと広がっており、際立つ分野だけでもこれほどにある。みなさんもいくつかの分野にかかわっているだろう。

各種の生涯学習（趣味、生きがい、健康）。

虐待防止、遺言相談。後見人相談。

高齢者雇用、起業支援。

年金、貯蓄・投資、マーケット情報、保険。

シニア向け新商品開発、介護福祉機器・電化製品、車・乗り物などの製造・販売。

ショッピング、通販、宅配。

ファッション、料理、食品、レストラン、居酒屋。

ケア付き住居、いなか暮らし、住宅改修（バリアフリー）、家具・用具。

パソコン教室・通信、カルチャー講座・セミナー・シンポジウム、イベント。

シニア向け新聞・雑誌・広告、テレビ・ラジオ番組。

短歌・俳句・川柳、ナツメロの会、自分史、楽団、手づくりクラフト。

ゲートボール、テニス、ゴルフ、太極拳・ヨガ、碁・将棋、ゲーム。

環境美化、伝承活動、世代交流。

国際交流、海外ツアー、旅行、ホステル、国民宿舎。

・などなどである。

組織の名称はといえば、「シニア」が圧倒的に。「老人」や「シルバー」といった先輩格のもの、しっかりと根をはって活動している。

「老人」ということは、老練、長老、老師など経験を積んだ高齢者をもいうのだが、どうも旗色がわるいのは、長く「老人ホーム」や「敬老会」などが随伴してきたために「高齢弱者」をねぎらうというニュアンスが働いているからだ。

「敬老」には「敬老尊賢」という味わいのあるすつくと立ついいことばもあるのだが。そのあたりの欠落をフォローするために本稿の「丈人」が意味合いをもつことになる。

「老人のつく活動組織」での代表は「老人クラブ」である。敗戦後間もない一九五〇（昭和二五）年に発足して以来、自治体と連携しながら地域の高齢者の生きがいと健康づくりに貢献してきた。「全国老人クラブ連合会」（全老連）には、一一万クラブ、約六七〇万人の会員が参加。

「友愛訪問」「伝承活動」「環境美化」「世代交流」といった幅広い活動に乗り出している。

本稿が「老人力」や二〇一三年六月に亡くなったなだいなださんの「老人党」の活動に関心を持ちながら、新しい「高齢化」の活動に「丈人力論」を展開しているのは、既成の活動が収容しきれない高齢者活動に注目しているからで、決して他を否定的にみているわけではない。なかには、高年期の人生は明日をも知れないことに実感がある、「九〇歳をいうのは結果であ

って意味がない」という生き方もある。高齢期の生き方は多彩であっていい。高齢者みんな何かをとというのは、いささかキツイ話だからである。といって、みんながみんな内向的になつてしまうのは、社会の姿として困ったことになる。

## シルバー・シニア・エージング

\* 涌出するカタカナ団体

高齢者の活動の湧出期にあたって、さまざまな分野で新しい活動が進められている。そこでカタカナ語の団体・協会が続出している。

ここで立ち入ってカタカナ語に触れるのは、高齢者活動は、さまざまな方向でそれぞれの立場で、熱心に活動している人びとと組織に支えられているからで、どれかひとつとはいかない。それどころか多いことはいいことなのである。まだまだあるのだが、多岐にわたることを知っているただくためにほんの一例として紹介であり、お名前をあげたところにも、あげなかったところにも、失礼をお許しねがいたい。

### 「シルバー」・「アクティブライフ」

「シルバー」は、グリーンやブルーといった「アシッド・カラー」（柑橘類の色）などに対する色彩の比較から生まれた和製語である。

高年者を「シルバーエイジ」としてとらえて、活動的なイメージを付加して、運動・旅行・講座などの研究所や教室が用いている。高齢者の能力を活用する「全国シルバー人材センター事業協会」や「シルバーサービスマネジメント協会」などは定着している。

「アクティブライフ」は、活動的な暮らしをめざすことで、高年者主体のボランティア・グループが用いている。「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」など。

### 「エイジド」・「エージング」・「エイジレス」

「エイジド」や「エージング」などは、それぞれに年輪を刻んで到達した営みが意識されて使われている。

「エイジド」は、ワインやギターやコーヒー豆での利用が優勢だが、経験を積んで熟成した意味で、これも高齢者を支えるボランティア組織やNPOが用いている。

「エージング」は、老化がすすむことを意識して「アンチエージング」として医療や美容外科など、もっと広く「わかづくり」ほどの意味で用いられる。「ウエルエージング」や「アクティブ・エージング」として高齢期を積極的に受け入れる立場を示している。「エージング総合研究センター」や「日本ウエルエージング協会」は歴史をもつ活動をおこなっている。

「エルダー」は、旅好きのおとなのための「エルダー・ホテル」が世界一〇〇カ国に開設されていて、学習と旅をあわせた高齢者対象の活動をしているのが目立つ。「日本エルダー協会」や「エルダーホテル協会」など。

「エイジレス」は、年齢にとらわれないという意味で「エイジレス・デザイン」「エイジレス商品」「エイジレス・ライフ」などとして広く用いられている。

### 「ユニバーサル」

一方に、高齢を意識しながら人生に年齢は無関係であり、それを越えたものであるという意味での「ユニバーサル」が知られる。

「ユニバーサル」は、だれもがという意味合いで、とくに「ユニバーサル・ファッション」が、高齢者にも障害者にも快適で喜ばれるファッションとしてバリアフリーが意識されて用いられている。「ユニバーサル・ファッション協会」など。

### 「高齢者活動団体」

活動の広がりを見るために紹介がカタカナ語に片寄ってしまったが、とくに福祉を核としながら活動している「高齢者活動団体」は枚挙にきりが無い。

その推進役になっている組織・団体の存在を見落として先にいくことはできないので、その場でないからほんの一例にかぎるが紹介しておきたい。失礼があればお恕しねがいたい。

福祉・介護・市民後見人の「さわやか福祉財団」「ダイヤ高齢社会研究財団」「全国介護者支援協議会」、医療の「国立長寿医療研究センター」、高齢者・加齢学研究の「東京都健康長寿医療センター」（老人総合研究所と老人医療センターが統合）「日本応用老年学会」「シニア社会学会」、高齢者雇用の「高年齢者雇用開発協会」「高齢・障害・求職者雇用支援機構」「日本高齢者



生活協同組合連合会」「高齢社」、高齢女性の「高齢社会をよくする女性の会」、毎年「ねんりんピック」によって活力ある長寿社会をめざす「長寿社会開発センター」、生涯学習の「生涯学習開発財団」、住宅に関する「高齢者住宅財団」、高齢活動人材養成の「社会教育協会」「高齢社会検定協会」、高齢社会の「日本ウエルエージング協会」「エイジング総合研究センター」など。

そして一九九九年の「国際高齢者年」の国民運動を機に設立された「日本高齢社会NGO連携協議会」(JANCA)にはNGO(非政府組織)・NPO(特定非営利活動法人)を中心にした多くの活動団体が参加して運動を支えている。

そして何より心づよいことは、「高齢社会」形成の主役を体現しながら活動する組織を支えているのが、先の大戦の惨禍と戦後の混乱を身をもって知っている昭和前期・中期生まれの「昭和丈人層」の人びとであることである。

### 三 ひどりの国民として

#### ああいう国になりたいという国の姿

\*さまざまな立場の高齢社会構想

すでにるる述べてきたが、いまこそ「高齢者が新たな歴史をつくるとき(世紀)」である。

ここでは将来の日本の姿について、次の方々の声に耳を傾けよう。紹介している方々は、それぞれに確かなこの国の将来像をお持ちであり、静かに話されている声を聞いているうちに、将来のその姿が見えてくる。

まずは「高齢社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長の将来像から。樋口さんの将来像は、歴史上で初の「人生一〇〇年社会」である。

女性リードで「一〇〇歳社会」をめざす樋口さんご自身は、まだ「傘寿期」に到達したばかり。お仲間とともに初代として「人生一〇〇年社会」の到達点を見据えている。一〇年を差し引いて内閣府が「人生九〇年」としたのは、男性型であると評しながら。

「いまわたくしたちは、「人生一〇〇年社会」へという、人類の歴史のなかで初めての長寿を普遍的に獲得した社会を生きる。そしてそれにのつとつた地域であろうと国であろうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、「なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか」と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」（内閣府「高齢社会フォーラム in 東京」基調講演「シニアの社会参加で世代をつなぐ」二〇一三年七月）

と明快に述べておられる。

次は「さわやか福祉財団」の堀田力会長の講演から。



二〇一四年七月二十九日、内閣府主催の「高齢社会フォーラム in 東京」での講演で、堀田さんの声は囁かれていた。この夏は東奔西走といった忙しさで、全国の自治体をまわって「新地域支援構想」について解説・講演をしておいでだったからである。「支えられる高齢者」のための介護支援などの事業が二〇一五年から地域自治体に移行する。「地域医療・介護推進法」の成立（二〇一四年六月）とともに「支える側の高齢者」の自主参加が求められるからである。

堀田さんは「毎日が月火水木金」といった忙しさで、「毎日が日曜日」の暮らしに慣れ親しんでいる退職後の男性たちに、「社会参加による共生の文化」を説いておられる。住んでいる地域に関心が薄く、いずれ「介護・医療」のときだけは地域に頼るといふ暮らし方が「恥ずかしい」と感じるような風習を、「共生の文化」と呼んで元気な高齢者への提言としている。

住み慣れた地域で高齢者が「地域協議会（体）」に参加して、自治体ごとに配置される「生活支援コーディネーター」を支えて、自治体の事業を支援しようというものである。

元東大大学長の小宮山宏プラチナ構想ネットワーク会長は、「産業革命からプラチナ革命へ」を説く。江戸時代にはすでに近代への準備を終えていたアジア唯一の先進国であった（途上国でなかった）わが国は、いまや大量生産



時代を終えて新しい価値QOLである「省エネ時代」にはいつている。「プラチナ社会」というのは、成熟社会における成長の一つのモデルであり、先進国として直面する課題の解決と新たな可能性の創造によってもたらされる、豊かで快適でプラチナのように威厳をもって光り輝く社会と説明している。

プラチナ構想ネットワークは、毎年、優れた事例を選考してプラチナ大賞・優秀賞ほかを贈呈して活動の推進につとめている。第一回（平成二五年）は大賞に、海士町（島根県隠岐郡）の「魅力ある学校づくり×持続可能な島づくり」島前高校魅力化プロジェクトの挑戦」が、第二回（平成二六年）は、ヤマトホールディングス株式会社の「地域に密着したヤマト流CSV『まごころ宅急便』」が選ばれている。

東大高齢社会総合研究機構の秋山弘子特任教授は、高齢社会活動の成功事例を集めた「リソースセンター」の設立を提案しておられる。東大リーディング大学院での国際的人材育成や「高齢社会検定試験」（高齢社会検定協会）、柏市でのまちづくり、RISTEX「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」の領域総括として全国一五プロジェクトの推進などを通じて成果を積み上げておられる。「ああいう国になりたいという国」がつくれるかを課題として。

政界の長老、藤井裕久民主党顧問はクォータ制でも参議院に残っていただきたい高齢政治家のおひとりである。藤井さんは引退したあとも「戦



争のない社会を守りつづける政治」「歴史に学ぶ政治」の課題を実践しておられる。民主党近現代史研究会のオープンフォーラムはその実現の現場のひとつ。三谷太一郎、加藤陽子講師などを呼んで「昭和初期の歴史」に「戦争」への萌芽をさぐっている。安倍政権の「歴史に学べない」方向に危惧を深めながら。

（これらの方々の講演は、web『月刊丈風』二〇一四年八月号に「特集」を組んでいるので開いてみていただきたい。）

高齢者が自主的に社会参加しないかぎり、「日本高齢社会」の形成は遅延しつづける。公助の負担は増え、後進世代からは自助の要請が強まることになる。いまは「地域参加」によって「共生の文化圏」というしくみづくりに立つ好機といえる。本稿はその後押しのためである。

### 「高齢社会グランドデザイン」を掲げよう

\*政治リーダーの構想力が問われている

世界の注目を受けながら、「先進的高齢社会」を成し遂げるべく、いまそのプロセスを体現しているのが、わが国の高齢者である。

とはいうものの、これまでのところではなお「高齢者社会」であって、さまざまに各地各界



で繰り広げられるはずの「モノ・サービス」づくり、「居場所」づくり、「世代交流」のしくみづくりなど、高齢者が保持している知識・技術・資産を活かした高齢化活動が停滞している。高齢者みずからが暮らしやすい「シニア生活圏」の達成にむかってスムーズに動いていない。高齢者が「高齢社会」づくりを意識して参加していない。その成果を共有し享受しているという実感や共感を持つことができないでいる。

それはなぜか。

何度も述べてきたが、「日本高齢社会」構想が掲げられていないからだ。

産・官・学・民の衆知をあつめて構想せねばならず、それを推進するのが政治リーダーの役割であり、平和戦略であり、それにふさわしい社会体制づくりである。そのためには専任の高齢社会担当大臣が内閣府にどっしりと座していなければできないことである。

ここでの欠落は「高齢者対策」ではなく「高齢社会対策」であり、それを推進する政治リーダーの不在である。政治は「社会保障」の財源を用意してくれたが、肝心の「日本高齢社会グランドデザイン」を衆議して掲げることをしてこなかった。先にも記したが、「消費税」導入のとき、「社会保障」のための完全目的税にするために務めてくれた藤井裕久民主党顧問は、「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」

と率直に述懐しておられる。

人口の四人にひとりの「先行高齢者国」が「先進高齢社会」をどう成し遂げるかは、国内は

おろかアジア地域どころか世界規模で注目されており、まずは「高齢社会グランドデザイン」を公開し、その達成にむけたプロセスと成果を国際発信することによって納得されるのである。そういう時期なのに現状はそういう姿に向かっていない。

二〇一二年一月から二〇一三年八月まで、「社会保障制度改革国民会議」が検討したのは、「医療・介護・福祉・年金・少子化」であり、そのうち年金は結論を出していない。つまり本格的な「高齢社会構想」の議論には踏み込んでいないのである。座長を務めた清家篤慶応義塾大学塾長は、「高齢社会対策大綱」を検討し改定した際の有識者会議で座長をつとめており、そのあたりのことは熟知しているはずであるが、多数意見を尊重する立場上、発言されていない。一九九五年の「高齢社会対策基本法」制定以来、二〇一五年は二〇年になる。推進の中心に担当大臣を置いて、国会で衆議して「日本高齢社会グランドデザイン」を構想として掲げるべきときである。

### 基本法二〇年を専任大臣のもとで

\*内閣府に「高齢社会対策」担当の動線を

最近の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者をみると、平成二一年度

版は小渕優子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣、二四年度版は小宮山洋子大臣、二五年度版・二六年度版は森まさこ大臣が閣議決定時での担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせ担当する人選であり兼任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られる。

民主党政権時代だけで九人の担当大臣がいた。そのことを議員どころか閣僚どころか本人すら意味合いを知らなかったのではないか、と思われるほどなのである。

参考までだが、九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員。時節がらその重要性を知っていれば、少時とはいえ内閣改造時に兼任で担当となった岡田副総理は、おそらくそれ相応の対策をとったことだろう。

これは記すのをためらうが、改定した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田（佳彦）総理も、高齢者の活動がいまの社会にもたらす有意な影響には触れているが、それが高齢者自身の実人生を活発にし新しい社会の形成に向かうことには気づいていない。若き総理（五五歳）には理解が及ばなかったようである。それは六〇歳の安倍総理にもいえることだが。

これはいったいどうしたらいいのか。

担当大臣としてしごとも少なく、予算も少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出ないために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が出ない。「日本高齢社会」の



形成は国際的・歴史的大事業なのに、国のリーダーはその重要性を認知しないままである。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当している。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員にはいるが、兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い動線が内閣府内に整っているとはいえない。要するに主要な職務として扱われなくなつて久しいのである。

「高齢化」を一過性のもものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになる。遅れを取り戻すには、内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い動線を形成して、高齢社会推進のしごとを進めねばならない時期にある。「スポーツ庁」よりは「高齢社会庁」の設置が先。世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を優先すべきなのにもかかわらず、国会議員は、その不在になお気づこうとしない。

ここは三三〇〇万人の高齢者が、声を合わせて衆口一詞、

「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

「日本高齢社会グランドデザインを掲げよう！」

と叫ぶ必要がある。

世界の高齢者が期待する「日本高齢社会」形成への新たな烽火を掲げて戦うために、「衆志成城」の時である。

## 世界トップで「長寿社会」の達成をめざす

\*すべての世代が等しく参加して

高齢化先行国（先進国とはいえない）として「日本高齢社会」を形成する事業は、一九九五年に「高齢社会対策基本法」を制定してまずまずのスタートを切った。

その後二〇年、まことに残念なことに、この史上初の新しい社会を創出する事業は、延滞しつづけてきたのである。いまそのことを責め立てても後悔しても仕方がない。

こう前向きに考え直したらどうか。

「日本高齢社会」形成の事業は、世界で初めてのゆえに、二〇年の準備期間のあと、「高齢化率」二五%となるのを待って、「四人にひとり型の高齢社会」の事業として本格的な実現にはいった。戦後生まれの「平和団塊の世代」の約九七〇万人の参加を待った、という事情もある。

今からなら成功事例をつくることは可能である。何もしないですごせば国際的な失敗事例となる。そんなことはあってはならない。

一九九九年の「国際高齢者年」のあと、この国のありよう観察してきた本稿は、「団塊の世代」が定年を迎えるとき、老後が穏やかな姿になっていないだろうことを予測してきた。

「日本型高齢社会」は、この国で暮らす高齢者一人ひとりによる意識的自発的な活動なしには成り立たない。個人がその総体的な姿を推察するのはむずかしいが、達成に向かうこの国にど

うという変化をもたらすか。

それは行く先明るい展望でなければ意味がない。

二〇二〇年（東京オリンピックの開催年）ころまでの内輪な推測としてだが、高齢者の意識的自発的な生産活動・消費活動・社会活動によって、次のようなことが達成されるだろう。

・一過性の「アベノミクス」効果が衰落して収束にむかう日本経済を、「エイジノミクス（高齢化経済）」の製品・サービスによって救済するであろう。

・「超一〇〇〇兆円」の財政赤字の解消、つまりプライマリーバランスは、持続的な高齢化社会の推進によって大幅な縮小ができるであろう。

・「超一四〇〇兆円」といわれる家計黒字は高齢社会形成のための出資に向かうであろう。

・「アジアの先進国」として途上国が範とする日本でありつづけるであろう。

・「少子化」に歯止めをかけ、子育てで繁忙な女性の就業支援ができるであろう。

・「好事門を出でず、悪事千里を行く」という世相を防止できるであろう。

・「高齢弱者」の不安を払拭してだれもが安心して暮らせる「長寿社会」をもたらすであろう。

・世界がモデル事例とする「日本長寿社会」が姿をみせているであろう。

・数多くの国際機関を招請し、常態として各種の国際会議・イベントが行なわれ、世界の人がとが「一生に一度は訪れたい国」として評価されているだろう。

のちの歴史書は、誇らかに、こう記すであろう。

「二一世紀初頭の日本は、先行国としてアジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献し、世界大戦ののちに平和の証として灯した「平和憲法」を一〇〇年護持して「平和裏の高齢社会」を世界に先駆けて実現した。自助、互助、共助、公助のしくみを持つ地域社会のありようは、後進諸国のモデル事例を提供し、宗教にも民族にも男女にも貧富にも、そして年齢にも差別をしない民主主義国家を達成した」

国際的にも注目され納得されるような、「長寿社会Ⅱ日本型高齢社会」の形成は、高齢者とすべての世代の参加によって達成され、後を追って高齢化を迎える途上国や後人にとって、「日本型モデル」となるべきものである。

#### 四 ちよつとばかり国際人

#### 国民性としての「ホスピタリティー」

\*自然にあふれ出る「おもてなし」の心

二〇二〇年のオリンピック東京招致が決まって準備が進んでいるが、二〇〇二年六月の日韓共催のサッカー「ワールドカップ」の折りの国際的な熱気はなつかしい。ホスト国として、参加各国チームの選手たちを迎え入れ、みごとに「ホスピタリティー」（おもてなしの心）を発揮

した二八市町村。

「アリガトー」は世界語になる勢いだったし、街の清潔なこと、花の多いこと、礼儀ただしこと、どこにも温泉があること、列車が時刻通りに動いていること、スシが「トテモ、オイシイ」など、物価が高いことを除けばホスピタリティーは十分に実証されたのだった。

競技場の内と外で示したように、日本各地の人びとには世界中から訪れた人びとに、おのずから溢れ出る親和の感性によって国際交流を友好的にすすめることができる潜在力があることを、世界に証明する機会となったのだった。

子どもたち、女性、高齢者が、それぞれの地域でみせた国際交流での「お国ぶり讃歌」であった。とくにアフリカのカメルーン・チームを迎えた大分県の中津江村と、二〇一三年に引退した人気NO1だった「ベツカム様」がいるイングランド・チームを迎えた兵庫県の津名町が話題にはなったが。

おのずから表れる「ホスピタリティー」（おもてなしの心）はどこから生じるのか。

長く鎖国した島国であったことで、地域に潜んでいる国際交流への期待感には、計り知れないものがあるように思われる。これこそが地域の資産として生かされるべき地域パワーなのではないか。「地域から地域へ」のつながり、とくに海外の都市とのヒトとモノの交流には、労苦をはるかに越える成果が実現される可能性が見えている。

「アベノミクス」による円安効果で、海外からの旅行者が増えている。とくにアジアからのお

客が多いというのはうれしい。

日本企業は海外進出で、アジアの民衆の暮らしの近代化、豊かさに貢献している。アジアの人びとが「暮らしの先進国化」を成し遂げたわが国に来てくれることで、いっそう「平和の国」の評価がアジアの人びとに理解されることが何よりうれしい。

わが国の地域の「ホスピタリティー」（おもてなしの心）を支えているのは、四季の移ろいをじょうずに受け入れながら温和な感性を大切にして暮らしている人びと、だれに対しても等しく親切な高齢者のみなさんである。

その心の深い層に培われている繊細さや優しさは、四季折り折りに変化する風物との出会いがもたらしてくれた自然の恩恵（天恵）といえるものに違いない。

人生に何度となく繰り返される季節との出会い・・・。

・ 春は桜前線（三月～五月）が北上し、秋には紅葉前線（一〇月～一二月）が南下する。

・ 南からは春一番が吹き荒れ、北からは木枯らしが吹き抜ける。

・ 八十八夜の晩霜を気にかけて、二百十日の無風を祈る。

・ 南の海に大漁を伝えていわし雲が湧き、北の海にぶり起こしの雷鳴が轟く・・・。

わが国の自然は、みごとに四季の変化に調和がとれている。それはまた海の幸・野の幸・山の幸を豊富にもたらしてくれる。「平分秋色」というが、秋には収穫を等しく分け合い、奪うよりは譲り合い、見捨てるよりは助け合う、といった「国民性としての和の心」（温和、穏和、調

和、親和、平和、協和、総和・・まだある）が、自然のうちに育まれている。と、これは海外の日本研究者が等しく指摘するところ。

だれかれの分け隔てなく萎えた心を励まし、痛んだ身を癒してくれる風物とくに温泉や特産物に事欠かない。それとともに先人が貯えてくれた歴史・伝統遺産も数多く残されている。

二〇一三年には、富士山が世界文化遺産に登録された。自然遺産ではなく文化遺産であることに納得がいく。また「和食」が世界無形文化遺産に登録された。「和食」は、さまざまな知識や技術が人から人へと受け継がれ磨きあげられて、「地場産業」や「お国ぶり」として暮らしを豊かにしてきたのである。

だれかれの分け隔てなく等しく親切な高齢者。「日本高齢社会」は高い国際評価を受けるであろうし、長寿者への敬愛の情は、他国の人びとからも多く寄せられるだろう。

### 自治体が産み出す「国際貢献」

＊リピーターに「国土を四倍に見せる法」

自治体が海外にふさわしい相手を見出して、住民同士が親しく行き来し、異質な文化コラボや特産品の共同製作をおこなう姿からは将来への成果がうかがえる。ホームステイで訪れる青少年は日本を好きになってくれるにちがいない。

常に開かれた不凍港のように頼りがいある存在としてのわが国の小村、中町、大都市。それぞれの海外との交流は将来かならず双方の特性や豊かさを生み出す源泉となる。

いま「姉妹・友好自治体」は一六七〇ほどあるが、多くはない。複数都市にすることと、合併企業や物産の共同開発といった経済活動や個別分野のさまざまな交流が進めば、数も内容的にもおおいに広がるのが予測される。

とくに長い民間交流の歴史をもつ日本と中国の場合には、国家間の不和・齟齬の時期を乗り越えて、すでに三五〇余の「友好都市」があり、信頼をつなぎ、友好の成果をもたらしてきた。太い交流のパイプになっている。戦後これまでに研修生として訪れた中国側の多くの若者が、いまや各地の都市で第一線で活躍している。

いくつか友好都市の例をあげれば、首都の東京（各区も）と北京（各区も）、近代港湾都市の大阪・横浜と上海、神戸と天津、福岡と広州、歴史文物の京都・奈良と西安、名古屋と南京をはじめ、産業では鉄の大分と武漢、石炭の大牟田と大同、伝統物産の金沢と蘇州、瓷都の有田と景德鎮、ぶどうの勝沼とトルファン、牡丹の須賀川と洛陽、紙の富士と嘉興、酒づくりの西宮と紹興といった特産物。そして人物を介した絆による交流では留学生魯迅のふるさと紹興と先生藤野巖九郎の生地あわら、亡命期の郭沫若にちなむ市川とふるさと楽山、中国国歌の作曲者聶耳の終焉の地である藤沢と生地昆明、孔子ゆかりの足利と濟寧など幅広い関係を持つ。

そしてそれを地道に支えているのは、長い日中交流の歴史を思い、大戦時の不幸な記憶を忘



れずに信頼を積み上げてきた両国の高齢世代のみなさんである。

「国際交流課」が設けられている県、市、大学は少なくない。K市の市役所にも「国際交流課」が設けられていて、現地のことばに堪能な職員「国際交流員」が常駐して対応している。市に滞在している外国人滞在者には、各分野の研修者や留学生や企業人などがいて、さまざまな国際交流圏をつくって暮らしている。多くはないが結婚して定住している人もいる。

海外の姉妹・友好都市から友好・参観にやってきた人びとは、まず県都で交流の時を過ごし、地方を代表する文化に接する。それから市町村にはいる。

海外からの客人たちは、それぞれの「友好市町村」を訪れて、目的である文化やスポーツや物産に関する交流の時を過ごす。各地にある温泉施設に案内されて、日本式のもてなしを受けることになる。これが楽しい。市町村が設けるのは、四季折り折りの美しい風物や料理や温泉を活かした「地域の国際交流施設」である。海外からの訪問者は、

「一生に一度は行ってみたい」

と心躍らせてはるばるやってくる。

「人生っていいな。日本ってすばらしい。別の季節にまた来たい」

と、野天風呂につかって暮れなずむ異郷の空の星を眺めながら、母国語でつぶやいてくれる。

そして「和食」のおもてなし。宿のおかみさんをはじめ、地元の高齢者のみなさんがだれをも等しく親しく迎える姿は、海外から訪れた一人ひとりの友人の心に、母国の暮れなずむ星空

を見上げるたびに、「アリガトー」とともに一生のあいだ輝きつづけていることだろう。

わが国の高齢者が持つ「モノづくり」の能力や「親和」の心情は、「シニア海外ボランティア」のみなさんや海外進出企業の高齢社員の実績が示すように、途上国の人びとにとっては発想の原動力ともなるものだ。

これはとくに重要な視点であるが、迎える側のみなさんが、四季を「四つの変化」として際立たせることによって、遠来の客人たちは春・夏・秋・冬（新年）の四回は訪れる楽しみを持つことになる。いうなれば、四季を時節の刻みとして活かす人びとの暮らしの知恵が、ここでは「優れた小国」の知恵として「国土を四倍に見せる法」となるのである。

そして何より喜ばしいことは、海外の市町村との地道で実質的な交流活動が、わが国が「恒久平和をめざしている優れた文化大国」であることを、海外各地からの発信によって明らかにしてくれることである。「文化大国」なら大国意識を競っても誇ってもいい。

### 「国際高齢者年99」は新世紀へのメッセージ

\*「高齢者のための五原則」が共有の意識

新世紀に迎える地球規模での潮流として「高齢化社会」を予測し、国連は一九九二年に一九九九年を「国際高齢者年」(International Year of Older Persons 1999)と定め、一九九五年

にそのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」(towards a society for all ages)としたのだった。

「国際高齢者年」——前世紀末近くにそんな国際的行事があったことを知っている高齢者がどれほどいるだろうか。

国連がテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びとの賛同と参加を期待したためであったろう。活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年期を迎える高齢者であり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」がさがげとなる立場にある。

一九九〇年代から新世紀にかけて、そういう明確なメッセージが警鐘にも似た強い風圧として、この国で高齢期を迎えている人びとに、しっかりと受け止められていたならば、新世紀一〇年の取り組み方もその結果も大いに異なっていただろう。

そうならなかったのは、なぜなのか。この問いへの答えは重い。

各国が新世紀を迎える「高齢化社会」にむかってスムーズに移行できるよう、国連から次々に取り組みが提案され、一九九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのである。

一九九〇年の総会で、毎年の一〇月一日を「国際高齢者デー」(International Day of Older Persons)と定めたあと、運動の国際的な展開への願いを込めて、

\*\*\*\*\*

自立 (independence)

参加 (participation)

ケア (care)

自己実現 (self-fulfilment)

尊厳 (dignity)

\*\*\*\*\*

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年であり、そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことだった。

一九九九年の「国際高齢者年」の各種行事に参加した記憶をもつ人も少なくないはずである。

わが国も当時の総務庁を中心にして自治体や民間団体も参加して全国的な活動を展開した。

当時の民間の活動団体が結集した高連協（当時は「高齢者年NGO連絡協議会」のち「高齢社会NGO連携協議会」）が結成されたのもこの時である。

だれあろう、毎年一〇月一日の「国際高齢者デー」に、他国に先んじて活動を展開し、実質的な成果を積み上げて国際的に発信するのは、この国の高齢者の役割だったのである。

一九九九年の「国際高齢者年」をきっかけとして、新世紀へむかって「日本型高齢社会」へのブランドデザインが提案され、高齢化対応の具体的な取り組みが新世紀に次々におこなわれ、増えつつける高齢者に呼びかけがなされていたなら、高齢者意識もまた広く醸成されていたこ

とだろう。

自治体によっては、すでに九〇年代に、たとえば東大和市、春日市、枚方市、新居浜市、柳川市など先駆的に「高齢者（高齢社会）憲章」を定めたところもあったのだった。

「長生きは命の芸術品」ではじまるのは、「南国市高齢者憲章」である。

だが全国的な活動にまでは進まなかった。これは明らかに将来構想を示せなかった政治リーダーの責任である。団体でも個人でも国連の「高齢者原則」の五つを意識して活動することが「高齢化国際人」なのである。

わが国の場合は、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の国連五原則のうち、わずかに「ケア」だけは実体をもって官民協働で推進されてきたといえる。「国際高齢者年」に参加して高連協を支えてきた福祉関係の団体は、その後も一貫して活動を継続してきているからだ。

九〇年代から新世紀を通じてこの二〇年余り、高齢者みんなが「わたしの高齢期」を意識して、みずからの暮らしを充足させる地域生活圏に「モノやサービスや居場所」をこしらえるために活動して、「高齢化」を実現させていたならば、企業や組織もまた「高齢化対応のリストラ」にも努めていたことだろう。

そして新世紀を迎えて、国民運動として着実に推進されていたなら、わが国の高齢者自身がこれほど早くしわ寄せを受けて苦難を強いられることにはならなかったのである。

## 不戦不争の灯かりを伝えて

\*「平和憲法」施行一〇〇年を祝う

「恒久平和」を掲げた「日本国憲法」は、原子爆弾という人類をも破滅させることができる可能性をもつ武器が登場した先の大戦で亡くなった人びとへの「哀悼のモニュメント」(歴史的記念碑)であり、とくにその「九条」は先人の心火によって燃えつづけている「不戦不争の灯」ともいうべきものである。

半世紀を越え、新世紀を迎えて一五年、その経緯を確認し、党派性を排して「衆議」して引き継ぐべき貴重な歴史文化遺産である。したがって二〇四七年、制定一〇〇年までは「そのまま保持すべきもの」である。

国際紛争は絶えることなくつづき、世界の軍事技術は仮想敵国を想定しながら自己増殖をつづける。それは太平洋戦争以後、朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争で、その恐るべき一端をみせつけた。局地戦はなお絶え間なくつづいている。

改憲? そんな悪夢のような企てを押し止めるのが、大戦後に平和を託されて生まれたベビーブーマーである九七〇万人の「平和団塊の世代」(戦後ツ子)のみなさんである。

体現している「日本高齢社会」がそのまま歴史的な「世界平和へのメッセージ」となることに希望がある。

想像力の深度も構想力の精度も足りない現代の若手政治家には、「日本国憲法」を改変する能力も資格もないことを知らねばならない。先の戦争の惨禍への経緯を繰り返さないためにおおいに論議すべきであるが、自分が納得できるレベルの認識で改憲を実行しようとするれば、必ず過ちをおかすことになる。

憲法は今ある人びとのためのものであるが、今ある人びとのものではない。

「自主憲法」などと称して根幹に傷をつけるとすれば、先人にも後人に対しても、これほど恥ずべき行為はない。

いま確認すべきことは、憲法の条文の文言の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつつづけている平和への「先人の心火」を感得し、灯を引き継ぐことである。その地点から戦争の惨禍を想起する想像力を培うことである。

若手の政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する憲法の趣意を「国際世論」とするために努めて、三二年ののちに迎える「平和憲法施行一〇〇年記念」祝典を、国際平和のもとでおこなえるように保ちつつづけることである。

国際的に先行してたどる「日本高齢社会」形成への歩みを、「世界平和へのメッセージ」として対置すること。天年（天寿）を全うする一人ひとりの高齢者の日また一日の生命の灯を、戦争への兆しがあるかぎり、歴史を貫いて流れる「不戦不爭の叡智」に託して「戦争放棄・恒久平和」の明かりとして灯しつづけること。

「日本国憲法」の「不戦不爭」の明かりが途絶えたとき、わが国はまた半世紀あまりを積んで得た国際的な評価を閉ざし、歴史的な輝きを失うことになる。

耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、選ぶべき道はおのずと明瞭なはずである。

## おわりに

### そして「寿終正寝」（天寿）を全うする

\*八面玲瓏の人生の達成をめざして

国民が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない国などありえない。

「天寿を全うする」ことは個人の願いであり、二一世紀が「平和の世紀」であることは国民としての願いであり、そういう「日本高齢社会」は国際平和の証となる。

だから「高齢化」で先行するわが国に高齢化途上各国が期待するものは、「恒久平和」を掲げる憲法の下で、高齢者がどこでも等しくおだやかな人生を享受することができる「日本高齢社会」の実現であり、その形成へいたる仔細なプロセスである。

市民が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない市町村などありえない。



隣人が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない隣人などありえない。

日本の高齢者はいま、歴史にまれな長い平和の時代に生きて、「日本高齢社会」を構成するひとりとして存在している。みずからが充足して住み慣れた地で、天年（天寿）を全うすることが、そのまま国際的な信頼を引き継ぐ「平和へのメッセージ」となることを確信している。

国際的指針・国連が掲げる「高齢者五原則」の結語「尊厳」(dignity)に連なることをめざして、小さな水玉模様のような「高齢期人生」を送るために、われらが掲げる指針「老中八策」を、ここにご紹介しよう。

\*\*\*\*

#### 「老中八策」

- 一 六五歳から九〇歳にむかって「高齢期人生」を模索しつつ体現中
- 二 「引退余生」の他力依存ではなく「現役長生」の自立意識を確立中
- 三 培ってきた能力を活かして高齢期を豊かにする「モノ・サービス」を制作中
- 四 健康（＜病気）・知識（＜認知症）・行動（＜介護）のバランスで包括ケアを実現中
- 五 三世代（青少年～三〇歳 + 中年～六〇歳 + 高年～九〇歳+）現役型社会を創出中
- 六 日また一日欠かさずに「地域生活圏」（共生と共助の文化圏）の形成に参加中
- 七 高齢者の「居場所」でそれぞれの自己目標の実現をみんなで談論・協議中
- 八 水玉模様のような小さな会（文風の会も）に加わって各地各界の同志と連携中

注：二一世紀を通じて底流する国際的な潮流は「高齢化」であり、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」（高齢者五原則）は国連が提唱する国際的な指針。

\*\*\*\*\*

八策を掲げてはいるものの、すべてをとということではなく、ひとつでも意識して実現にむかうなら、それは二一世紀の初頭のこの国で暮らす高齢者としての国際的貢献である「日本高齢社会」の形成に参加することになる。

家族が穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない家族などありえない。

自らが穏やかに生きて天寿を全うする「寿終正寝」を願わない人間などありえない。

こうして日また一日を努めて、八面玲瓏の人生の達成をめざして、「尊厳」をもって「寿終正寝」（天寿）を全うすること、願えばだれにでも可能なわが人生である。